
天使の仮面舞踏会

橘伊津姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使の仮面舞踏会

【Zコード】

Z0035R

【作者名】

橘伊津姫

【あらすじ】

三文小説化の主人公「俺」こと、萌木伊津留が出合った奇妙な同居人。

「ショリ・ルー」と名乗ったそいつと暮らしが始めてから、俺の周辺が何やら怪しい事に……。

果たして奴の正体は？

振り回される俺の運命は！？

プロローグ

1 プロローグ

誰にでも、一生のうちに忘れられない光景が、一つや二つはあるもんだ。そして俺も、あの日見た光景を一生忘れる事はないだろう。そう。俺の人生を変えた光景を。

＊＊

あの日、俺は書き上げた原稿を出版社に納め、自宅へ向かってバイクを飛ばしていた。一応のとこ、小説家なんぞをやっている俺は、帰り際の担当者の言葉を思い出していた。

「じゃあ、萌木さん。もえぎさん 次回はちびっとホラーっぽくいきましょうか。あ、ファンタジーの要素も入れてね」

なあにが“ちびっと”だ、バカたれが。テーマは注文つけるだけだから楽だろうけど、ネタ考えんのは俺なんだぜえ……。ぶつぶつ。夕陽が朱い。その朱が、白い雲に映えている。まるで朱炎が揺れているようだ。

メット越しに視線を上げて、俺は息を飲み込んだ。

「え……。あの形は？」

そこに「天使」が立っていた。夕陽に背を向け、翼を広げて巨大な天使が立っていたのだ。その両腕は下界へ向けて差し伸べられ、顔はやや俯いている。

見事な雲の芸術だ。朱く燃える夕陽をまとい降臨した天使。

「緋色の大天使　か」

ほんの一瞬、俺は雲の天使に気を取られた。ハツとした時には過ぎた。脇から飛び出してきたダンプの荷台へ向かって、俺のバイクは特攻ぶちかましていたのだ。

脳天まで突き抜ける衝撃と、身体が吹っ飛ぶ感覺と、ああ、ヤベ
エ。俺の人生、これでアウトか。案外短い人生だつたな……。おあ
！ バイクのローン つてな自分の意識。
そして ブラック・アウト。

氣付かねえな……（前書き）

どうして俺が、ショウヒと出会ったのか？ その理由……。

気付けばそこ

気が付くと俺は、温く漬んだ闇の中に漂っていた。ホンワカしていて、気持ちがイイ。

このまま沈み込んで、ドロのように眠ってしまったくなる。膝を抱えて丸くなる。トロトロと意識を溶かして、周囲の闇と同化してしまいたい。

“死ぬぞ、お前”

“そう。死んでしま……まつ……まつ、待てえい！ 俺は、まだ死にたかねーぞ！ まだまだ遊びてえし、女の子とだつてお付き合いしてーんだ！ 「冗談じやねーぞお！」

バチッと目を開けると、まとわりつく柔らかい闇を搔き分け、全力で抗う。

“そんな事したって、無駄だよ。お前、深い場まで来すぎたんだ”
また声がした。さつき、俺の意識を目覚めさせてくれた、あの声だ。声のした方に目をやると、真っ暗な闇の中にボカリと光が浮かんでいる。その光が、スイーツと近寄ってきた。どうやら光の中に、誰かがいるようだ。

“よお”

光の中の人物が、片手を挙げて笑いかけてくる。いやに馴れ馴れしい。

“随分と元気そうじやないかよ。死に掛けたにしては”

呆れ気味に苦笑し、腕を組んで俺を見ている人物は、銀の髪に金の瞳の超美形。男か女か、一見、判断しがたい中性的な顔立ち。胡坐をかいて座り、頬杖をついているその態度から、恐らくは男なんだろうが……見た目で判断は出来ん。何てつたつて飲み屋で声かけた「女」が「男」だつたっていう、苦しい経験の持ち主だかんなあ、俺つて奴は……。

“何、ボーッとしてんだよ、オメーはさ。死に掛けてんのに、随分

とまあ余裕だな”

男は（果たして男なのか？）ニヤツと笑う。おお。男の俺がゾクツとする。あ、あぶねー。

“なあ。お前、名前教えてくれよ”

俺が動搖してんのを、表情から見事に読み取つたらしい。ニヤニヤ笑いが深くなる。

伊津留だよ、いづる。もえきいづる萌木伊津留だ。職業は、鳴かず飛ばずの作家業。血液型はお人好しのO型で、生年月日は昭和46年3月15日。星座は魚座。干支は亥年。現在、恋人募集中とくらう。どうよ！“

俺はヤケクソになつて自己紹介を披露する。相手は普カ普力と浮いたまま問い合わせてきた。

“ふうん。伊津留。お前、このまま死んでみる？”

“ふつざけんなあ！ やりたい事、やつてねえ事が山ほどあんだ！”

“ならさ、俺と取り引きしようぜ”

取り引きうるんげ？ 本当に、一体何モンなのよ、こいつ？

胡乱うろん気に相手を眺めて

何をだよ？

“生き返らせてやるよ、俺が。そのかわり、しばらくの間、お前と一緒に居させてくれればいいんだ”

生き返らせるつて、お前、そんな事出来んのかよ？ マジで、何モンなんだ？

奴はフフンと鼻で笑うと、

“俺はシェリ・ルー。ショラつて呼んでくれ。ちょっとばかし事情があつて、人間界に降りてきた『アズラエル』だ”

アズラエル、アズラエル。何か、どつかで聞いた事あんだけど、なんだつけかなあ？ でも人間界に降りてきた？ なら、こいつは人間じゃねーのか？ むー！。

“どうする？ 信用するんか？”

信用するも何も、理解不能状態なんだよ、俺はよお。

“まあまあ、そう言つなよ”

本当に、生き返せってくれるんだろうなあ。ぬか喜びは嫌だか

んな。

“任せとけよ。大丈夫だつて”

とか何とか言つてよお、実は、死神だつた。なあんてんじゃねーだらうなあ?

“疑り深い奴だな、こいつは”

奴の手が軽く俺の肩を押した。

“安心して流れで行けよ。次に気がつく時は、自分の身体の中だ。心配すんな。じゃあな”

闇の中、そこだけ明るい光の中で、シェリ・ルーはヒラヒラと手を振つている。

吸い寄せられるよつて闇の中を流れ、そして ブラック・アウト。

シェリ・ルーといづヤシ（前書き）

目が覚めたとき、俺は確かに生きていた。よかつたあ。

シリ・ルーといつやッ

ガヤガヤと周囲がやかましい。

「 んー。ぬ？」

意識が徐々に引っ張られ、感覚が戻つてくる。

「 うにゅー？」

ゆつくりと目を開く。つわー、眩しい。締め切りがずれ込み、地獄のような徹夜の後、何日か振りに太陽を見た時みたいだ。眩しさが過ぎると、まず、白い天井が見えてくる。そして窓と、外の景色。

んー。どうやら俺は生き返つたらしい。常識で考えれば噴飯もの話しだが、今の俺には「これしか言いようがない。ベッドの中で手足をワキヤワキヤ動かしてみる。うむ。大丈夫だ。ちゃんと動く。上半身を起こして思いつきリノビをする。

お、お、生きとる、生きとる。ワハハハハ。

一人でニマニマしていると、突然、声を掛けられた。

「 気色悪い奴だナ、さつきつから」

声のした方を見ると、椅子に腰掛けて俺の事を呆れ氣味に見ている男がいる。

「 だつ、誰だよ、お前！」

慌てた俺は、何を思ったのかシーツをしつかりと引き上げ、枕を抱きしめて聞いただした。

「 はーああ」

男は大げさにため息をついてみせる。

あ、何か、見た事あんぞ、コイツ。

「 お前、死ぬほど鈍い奴だな。つとにさあ。命の恩人の顔ぐらい覚えとけよ」

そう言って、茶色の長髪をかきあげた。はて、どじで見たんだつたかいの？ ええーつと。

「ああ つ！ お、お前はああ！？」

思わず指差して叫んじまつたよ。

ああ、そうだ。じいつの薄茶色の髪を銀にして、色素の薄い瞳を金にしたら、夢ん中の奴だ。夢の夢？

「五日間も眠つてたんだぜ、お前。あんまり暇だつたから、あちこち治しちまうなんてサービス付だ」

確かに手足に傷はなく、動いてみても痛みはまったく感じられない。

「看護師の姉ちゃんが言つてたぞ。気がつき次第検査して、異常がなければ退院してもいいんだとさ」

「おお、ラッキー！ 昔から病院で嫌いなんだよなあ、俺つて。

タイミング良くやつてきた白衣のお姉さまに案内されて、検査のフルコース。結果を見ながら不思議だと首をひねり、頭を悩ませている医者共を尻目に、後日、会計金額を持つてくる事を了承してもらつて退院。あのまま病院にいたら、生体実験されかねんぞ。

街へ出る。おおお！ シヤバだ、シヤバ！ やつぱり外が一番だな！ 歩きながら、買つたばかりの煙草に火を点けようとした。

「歩き煙草はまずいでしょ、やつぱり」

横からスッと伸ばされた白い手が、俺の唇から煙草を奪つていつた。

「お行儀、悪いよ」

微笑を浮かべて囁く奴に、俺は本能的に頷いてしまつた。仕方なく、煙草を箱に戻すと、服のポケットにしまつ。

俺の着ていた服は事故のお陰で雑巾以下となり果て、今はショーラの用意してくれた新品のスーツを着ている。

少し余裕のある黒のスーツ。ちなみにショリ・ルーとショラは、ダーク・グレーのスーツ。しかし、何でスーツなんだ？ 他にも安い服はあつただろうに？

別にスーツが嫌いな訳じゃない。どちらかというと、好きな方だ。しかし、この生地の手触り、この仕立ての良さ……値が張るぞ、こ

れ。まあ、そろえてもらつたんだから、あんまし文句も言えんが。

「お前さんが、俺の夢ん中に出てきたシエリ・ルーと同一人物つていうのは、五十歩譲つて本当としよつ。けど、何で俺の後をついてくるんだ？」

「伊津留、約束しただろ？」「

「約束？」

シエラは俺に人差し指を突きつけると、額にかかる髪をかきあげながら言った。

「ん。お前さんを生き返らせてやつたら、こさせてくれるつてよ。まさか、忘れたんじやないよな？」

「へへっ。キレーサッパリ、忘れてたよーんだ。しかし、そんな約束したのかあ？」

俺は腕を組んで空を見上げて考えた。……約束……。したよつー

な、してないよーな……。

「あーつ！ 思い出したつ！」

確かにシエラはそんなような事、言つてたよ。しかしねえ、俺は“約束”をした覚えはないぜ。つて、ちょっと卑怯？

「はああ。本当に、忘れたんね」

シエラは盛大にため息を吐くと、少し腰をかがめ前髪越しに俺の顔を見る。

「ううつ。そういう目付きで見るのはヤメてくれええ。反則だあ。シエリ・ルーの身長は、一六五センチの俺より十センチばかり高い。その長身と服装から、パツと見た目には“男”に見える。が、薄茶色のサラサラ・ストレートの長髪に、抜けるように白い肌。加えて中性的な顔立ちとくれば……。

「うわああつ！ 流し目を送るな！ へタな女よりも色つぽいんだよ、オメーはよつ！」

「約束、破る気なのかよ？」

「お、あ、だつて、お前」「

何を言つていいかわからん。頭ん中がパニクつている。

「生き返せてもひりつて、傷まで治してもひりつといて」

シーラが言い募る。い、いかん。少しば反撃せねば。シーラの色

番に迷つとる場合ではないぞ、俺。ガツツだ、俺。ファイトだ、俺。

「だつてお前よ。生き返らせてやる』なんて言われて、素直に信用するか、普通? まず『夢だった』と思つ。聞いた奴らは

や

わうわう。頭つかり信用するやうな、オメテたい奴はいないだろ

う。……恐らくね。

必死の反撃に出た俺を見て、シーラは深いため息を吐く。

「でも、生きてんじやんよ」

シーリと真砂と顔のこゝ奴ら（前書き）

シーラといい、真砂といい、何で……。グッスン。

シェラと真砂と顔のいい奴ら

「 ほあ ？」

前髪をバサッとかきあげ、空を見上げてから
「夢だと思って死ぬならまだしも、伊津留つてば、生きてんじやん。
それって何でだらうなあ？」

眼を細めて一マツと笑う。

タズラを思いついた時のガキ大将の顔に見える。

「そ、そんな、大体よお、生き返らせたたの、ケガを治したたの、どうやってやつたんだよ？ お前がやつたつていう何か証拠でもあるのかよ。ええつ？」

俺の先を歩いていたシリ・ルーが、クルリと振り返り、人差し指を俺の頬の前に突き出してひと言。

「企業秘密です」

「わかつた。もー、何も言わんでいい」

無性に煙草が吸いたかつた。ポケット

えながら、大きなため息を吐き出した。

そのまま深呼吸して、腹に力を入れる。

あ、もしかして
なんじや、伊達のところに行つてもいいのか?

ここまで来て、何かシェリ・ルーが慌て始める。なんだ?

「アパートに一人暮らしだけど？」

「エ? あ、いや。家族と一緒にたりすると、やつぱつマズイかなあ、」うなづいて

「別にマズかあねえよ。俺以外に誰かが住んでるわけでもなし」

流れる車の列を見ながら目を眇める。
むー。やっぱり眼鏡がないとキツイかも。

普段の俺は眼鏡がないと日常生活に支障をきたす。細かい作業が好きなのと凝り性が祟つて（単に姿勢が悪いとの噂あり）、俺の視力はかなり低下している。まったく見えない訳ではないが、見えにくい事に変わりはないのでイライラする。

「なあなあ、伊津留。本当にいいのか？ すっげー迷惑なら俺、無理言わないぞ」

隣ではシェリ・ルーが、いまだにゴチャゴチャ言つている。

「そんなら聞くけど、俺がお前の事『すっげー迷惑』つついたらどうすんの？ まず今夜の寝床。どつか、行くアテもある訳？ なあ？」

「自分でも意地が悪いと思うよ。もつさまでやり込められていた、その反動なのだ。大人氣ない事に。」

シェラはグツと言葉に詰まると、ボソツと呟いた。

「別にいくアテなんてないよ」

「だろーと思つたよ。つたぐ。これを聞いてシェラを放り出せる程、俺は無慈悲にはできていない。

「はあふ。来いよ。構わないよ、一人くらい増えたつて」
捨てられた仔犬みたいな瞳で俺の事を見ていたシェリ・ルーに、右手の親指を立てて言う。

「ん。頼むわ、伊津留」

「そう。余計な事はウダウダ言わない方がいい。」

二パニパと笑顔を振りまくシェリ・ルーを連れて自分ん家の近くまで歩いてきた時、俺は妙な事に気が付いた。眼鏡がないので、多少ボンヤリと霞んで見える街の風景。いつも見慣れているはずの風景の中に、ハツキリと見えるモノが混じつている。

「例えば。」

行き交う人々の足元をかすめる黒い影。5・6メートル離れた店の前に佇む、若い女性の表情。走ってくる子供にダブつて見える奇怪な生物。地面からウネウネと這い出でくるデロデロ等々。

それらは街の風景に溶け込む事なく、俺の視界に暴力的に飛び込

んでくる。田をこすつたり、まばたきしたりするくらいでは、それらは消えそうにもない。

「なあ、ショーラよ」

多分、俺の声は、みつともない程うわずっていたに違いない。

「なんか俺さ、変なモンが見えてんだけど」

「変なモン?」

お、おおつ! 今、俺の前を横切つた奴! オメー、何でシッポ生えてんだよお!

一人静かにパニックに陥つてゐる俺を見て奴は言つた。

「もしかして、ウネウネとかデロデロ?」

ショーラの言葉に俺はただ、「コク」「クとうなずく。あ、涙目だ。

「ああ、別に大した事じやないさ。伊津留の傷を治したりするんで、俺の魂の一部がお前の身体ん中に入つて、それが不安定なだけだ」

なんだ、そんな事か。つてな顔だ。

「んじや、んじやさ。その、お前の魂の一部とやらが安定すれば、こうじうのは見えなくなんのか?」

すがり付きたい思いで尋ねる俺に、ショーラは一ヶ口笑いかけると「安心しろ。シッカリ、ハツキリ、クツキリ見えるようになる」あつ。

「でも俺が側にいる時は、ヤバイのは寄つてこないから。心配すんな」

そのひと言に、俺はショーラの両手を握り締めてまくし立てた。

「来て。頼む。家賃入れるとか言わない。お願ひします。一緒に住んでください」

お田田ウルウルの俺の勢いに一瞬息を飲んでから、奴はのたまつた。

「もちろん。とこひで、伊津留の家つて、ここから近い? まだ結構ある?」

「いや。あとちよつとだけど」

何とか膝に力を入れ、背筋を伸ばす。

「あ、んじゃさ、ちつとばかり寄り道してもいいかな？ 知り合いがこの近くに店を出してんだけど」

クイックと田の前の路地を親指で示す。

「あんまり遠くじゃなきや、かまわねえよ」

何？ 知り合い？ いるの、この街に？

シェリ・ルーの後について示された路地へ入り込む。

ん？ こんな所に道なんかあつたっけか？ ぬぬー。思い出せん。思い悩む俺を知らぬ気に（いや、完璧に無視して）、シェラはサクサクと進んでいく。ま、何とかなるでしょう。

説明してもらいたい事は山ほどあった。そしてその質問のほとんど全部に、シェリ・ルーは説明する事はない。する気がない事も、同時に理解できてしまった。

だが、この男とも女とも知れない美貌の持ち主。出会つてから（田覚めてから）数時間しか経つていない謎の人物「シェリ・ルー」を信用する気になつていて俺。

「うー。この店」

シエラの声につられて足を止めたその場所は、「仮面舞踏会」と飾り文字の看板を出した喫茶店だった。

カロン、カロロン

ドアのカウベルが独特の音色で迎えてくれる。カウンターでグラスを磨いていたマスターらしき若い男が顔を上げ、シェリ・ルーと俺を認めると微笑んで口を開く。

「いらっしゃいませ。おや、」^{マスク}「姿が見えないと思つたら、本当に突然ですね」

「」^{まあ}無沙汰、真砂。店の方はどうよ？」

カウンター席に腰を降ろした俺達二人の前に水のグラスとおしぶりを置き、肩をすくめて苦笑した。外人臭い仕草が様になつていて、「まあ、見ての通り。こんな店だからね」

通りに面している窓ガラスから差し込む陽の光が、店内を柔らか

く染めている。路地ひとつ入っただけで街の喧騒が遠い。まるで別の空間に入り込んだようだ。

「『』注文は？」

真砂と呼ばれた男に声を掛けられて、俺はメニューに目を通した。ヒョイと顔を上げると、カウンターの奥の棚にズラリと並んだ酒のボトルが目に入った。俺のもの言いたげな視線に気付き、真砂はチラツとボトルに目をやり、

「残念でした。こつちは街の景色がセピア色に染まってからそう言ってウインクをひとつ。ばっちり決まったそれが嫌味にならない。

「カフェ・オ・レ
「ストロング」

俺の事を外見で“こういう人物”と思い込んでいた奴は、一緒にコーヒーを飲みに来つたりすると必ず、

「え、萌木さんて、コーヒーに砂糖入れるんですか？」

とか言いやがる。悪かつたな。俺は元々、基本的に、根本的に甘党なんだよ。

「あ、そうだ。真砂、紹介するよ。今度、俺の家主になつた萌木伊津留。作家なんだぜ。 そんでこつちが『仮面舞踏会』のマスターで、こうとくじまい豪徳寺真砂。でも豪徳寺ってな顔じゃないけどな」

確かに古臭く、厳めしい姓にはそぐわない、色白のほつそりした青年だ。

「だから萌木さんも、真砂って呼んで下さいよ。姓の方で呼ばれると、何か自分もゴツツクないといけないような気になるから」

俺の前にカフェ・オ・レのカツプを置くと、ニコツと笑う。

顔の造作は整っている。肩の辺りまで伸ばした髪を、根元でゆるく結わいている。

「俺の事も伊津留でいいわ。『萌木さん』とか呼ばれると、締め切りの催促にあつていいみたいでさ。落ち着かんのだわ」

しかしショリ・ルーといい、真砂といい、何で顔のいい奴が寄つ

てくんだ？ 腹立つなあ～～。

ハア。トホホ。だからって、別に俺が不細工つて訳じゃないからな。まあまあ、いい男なんだから。十人並みには男前なんだからなつ！

負け犬の遠吠えにしか聞こえないトロロが、また悲しい。

『仮面舞踏会』とアーティスト（前書き）

田の前に現れた不思議な店「仮面舞踏会」。うううう、どうや？

『仮面舞踏会』といつて口

俺が側の一人に対しても妙な（不毛な）対抗意識を燃やしている時、店内に来客を告げるカウベルの音が響き渡つた。

「いらっしゃいます」

真砂のテノールに迎えられて入ってきたのは、どこか疲れた表情の女の子だ。窓際のテーブルに落ち着くと、真砂がオーダーをとりにいく。

「何にいたしましょう？」

「あ、ミルク・ティーを」

「かしこまりました」

テーブルに頬杖をついて、窓の外の景色をボンヤリと眺めている。何分かして、ミルク・ティー特有の柔らかい香りが静かに流れてきた。

「お待たせいたしました」

ピンクに花の散ったカップを女の子の前に差し出す。その声にハツと我に返った彼女は、恥ずかしそうに笑んで礼を言った。

「不思議ね。ここでボーッとしてたら、今までの色んな事が浮かんできてる。なんだか少し、あつたかくなつたみたい」

「当店にいらっしゃる方は、皆様がそうおっしゃいます」

ミルク・ティーをひと口すすつて

「おいしい……。今までこんな所にお店があるなんて、知らなかつたわ。もう、全部が嫌になつちゃつて。心の中が硬くなつちゃつた。そしたら、このお店があつたのよ」

彼女の言葉に、真砂はゆつくりと微笑んだ。

「楽しい時、嬉しい時、満たされている時には、この店は見えないんです。でも反対に悲しい時、寂しい時、辛い時には、すぐに見つかるんですよ。冷めてしまった心を温めるために。硬くなつてしまつた気持ちを柔らかくするために」

「本当ね」

「彼女に一礼すると、真砂はカウンターに戻ってきた。

「相変わらず、女には優しいな」

「男にやる優しさは、あいにくと持ち合わせがないんですよ」

シーラの皮肉を軽く受け流した真砂は、おかわり分のカップを俺にしてくれる。しばらくの間、とりとめもない会話が続く。俺達以外、たった一人のお客だった女の子が、ニッコリ笑顔で帰るのを見届けてから、

「そいじゃ、俺達も帰るところよ」

「そうだな」

シーラの掛け声にヨシヨシセと立ち上がり、ゴソゴソと財布を探す。

「あ、一杯目は私のおごりですから。お近づきのしむ

「んお、サンキュー」

釣銭を受け取ると、先に店を出たシリ・ルーを追いかけようとする。

「伊津留さん」

「ああ？ 何？ 真砂」

相手が敬称を付けてくれたのを、分かつていて無視する。

「天使って、いると思いますか？」

ムムム。何事だ、いきなり？ しかし真砂の目は、[冗談を言つて]いるにしては真面目すぎるようだ。

「“天使”ねえ」

ついこの前までなら「いる訳ねえじゃん、そんなモン」と、即答するところだ。が。分からなくなってしまったんだなあ、これが。死にかけた経験。シリ・ルーとの出会い。圧倒的な存在感を持つて視界に入ってくる不思議な物体。ひと言で切り捨ててしまう事も出来ない。

「んー。そうだな。この広い世の中、何がいても不思議じゃねえと思うんだよな。いるかもしないモノを、絶対いねえんだと言い切

れる程、世の中知らないしな。かと言つて、いると大見得切れる程生きてもいいしな。難しい問題だな」

胸ポケットから煙草を取り出す。

「でもさ、『いる』んじゃねえかと思つた方が、生きるの樂しいよな。夢あつてさ」

一本抜き取つて火を点けずに呑める。

「伊津留らしい答えなんでしょうね」

真砂はクッと笑いながら手を振つた。

「シェラの事、よろしく」

その言葉にこちらも手を挙げて応える。

「また、くんよ」

「いつでもどうぞ」

カロロン

カウベルに送られて「仮面舞踏会」を出る。

「なあにを話し込んでたのかな？」

だいぶ短くなつた煙草の灰を、店先の灰皿に落としこみながらシェリ・ルーが尋ねてくる。何気ない素振りを装つてはいるが、実は気になつて仕方がないらしい。

「別に。いろいろとナ。シェラは性格が悪いから、気をつけた方がいいとかつてな」

「う、つ。伊津留、お前つて意地悪いよな」

「ほつといてくれ。生まれつきだ」

次元の低い言い争いをしながら、我が家へと急ぐ。

五日振りの我が家への道を、奇妙な同居人と一緒に。

俺の日常と非日常（前書き）

平穏なはずの日常で、非日常の波紋が広がり始める。

「 る。伊津留つてばよ
「一いや～。つるせーよ。俺はもつと寝てたいんだあ！ 眠
らせひおー！

「んの、ボケ野郎！ 担当せんから、電話だぞつづー。とつとと起
きうー！」

ビローンと引っ張られた耳に、目覚まし時計の如き怒声が突き刺
さつた。驚いて飛び起きた俺は、立ち上がろうとして迂闊にも、天
井に嫌というほど頭をぶつけてしまった。ちなみに俺の睡眠スペー
スはロフトである。分かる人にはわかると思うが、慌てて起きたり
すると、死ぬほど痛い目を見ることになる。

なんとか電話に辿りつくと

「はい、萌木ですが

」

“あ、おはようございます、萌木先生。事故で入院なさってたんで
すって？ お見舞いにも行かないで、どうもすみません。もう大丈
夫なんですか？”

電話の相手は、俺がコラムの連載をもらっている某社の担当殿だ。

“ て事で、次の締め切りは来月の一十日ですから。よろしくお
願いしますよ。じゃ、失礼します。”

その電話は、担当者の一方的な話を伝え、一方的に切れた。ツー
ツ、ツーツと弦いでいる受話器を握り締めたまま、俺は深いため息
を吐いた。

受話器を戻しながら、昨日の事を思い出していた。五日振りにア
パートへ帰った俺を迎えたのは、五日分の新聞の束と留守電の点滅。
伝言は全部で十件。

うち一件は保険屋から。実家からも入っていた。四件は事故の事
を聞いた友人達からの見舞いで、飛び交うからかいの中にも気遣い
の色があちこちに伺われ、それなりに嬉しい電話だった。

問題は残りの四件。いずれも担当者からだつたのだが、人の心配より原稿の心配だ。ある担当なんぞ“死ぬんなら、うちの原稿あげてからにして下さー”などとのたまつた。君達は担当者の鑑だよ。

「いつか、コロス。

はーあ。俺つて愛されてないかも……。

カシカシと頭を搔きながら、もう一度田寝よつかと振り向く。

「伊津留。何するつもりなんさ？」

後ろからシェラの声がかぶさる。

「あん？ 寝んだよ、もー回」

はあーふつ。ちくしょー。本當は今日から遅れちまつた五日分の仕事を片付けるつもりだつたんだ。あくまでも、つ・も・り。さつきの電話ですっかり、やる気を失くしちまつたよ。

「だめだめ。せっかく起きたんだから早く顔洗つて。今日から仕事すんだろ？ ホレホレ、行つた行つた」

強制的に洗面所へと追いやられた俺は、不本意ながらシャゴシャゴと歯を磨き始める。

うーむ。ショラの奴め。この調子でいくと、今までどの担当者も成し得なかつた“萌木の原稿を締め切り前に”といつ快挙を成し遂げるかも……。

別に俺だつて、ワザと遅れてるわけじやないんだけビヨツ！ 計画倒れの男と呼んでくれ。

目の粗いタオルで顔を拭いていると、トーストのいい匂いが漂つてくる。

駅から歩きで二十分弱の場所にあるこのアパートを、俺は結構気に入つてゐる。比較的駅に近いため、家賃もそれなりに高めだが、環境はなかなか良い。バス・トイレが別というのも嬉しい。特にこんな状況でトイレが目の前にあつて、トーストの匂いがしてきても、まず食欲をそそらないと思う。部屋選びでは、大きなポイントだな。リビング兼仕事部屋へ戻つてみると、シェリ・ルーがまめまめしく朝食の支度をしている。モノトーンが好きな俺が揃えた市松模様

のテーブルの上には、朝食の盛られた食器が並べられている。

しかし、こいつって何者だ？ トーストにコーヒーは朝食の基本形である（俺の場合、それしか摂取しないという話もある）。基本形ではあるが、食卓に彩りがないというのも、また事実である。

ならばオプションを揃えればいいだけなのだが、元来怠け者で朝に弱い俺には、無理な相談なのだ。目の前に並べられたベーコン・エッグや野菜サラダの盛られたボウルを見ながら、俺はしばしの間、感慨に耽ってしまった。朝食とは、かくあるべきだよな。

「伊津留？」

トーストにバターを塗っていたシェラが、不思議そうな顔をして見上げる。

「んあ、ああ。いやあ、まともな朝メシ見るの、久しぶりだなあと思つてよ」

積み重ねたクッションに座り込み、奴が手渡してくれたマグカップを受け取る。さっきまでのイライラはどこへやら。俺は上機嫌で、日課である新聞に目を通しながら朝メシを堪能していた。溜まっていた五日分の新聞を端から順にチェックしていく。小説のネタは、どこに転がっているか分からぬ。

ネタネタ、どーこだ。

＊＊

最初は小さな記事だった。公園をねぐらにしていたホームレスの老人が野良犬に噛み殺されたという記事で、何が俺の意識に引っかつたのか自分でも分からぬ。

その一日後の新聞には、終電で帰ってきた酔っ払いの会社員が帰宅途中で、野良犬らしき大型の獣に襲われている。この被害者は首筋に喰いつかれて、意識不明の重体だ。翌日、翌々日と何もなく、今日の新聞をめくつてみる。胸の中がモヤモヤする。それがどうしてなのか、自分でも良く分からぬ。あえていうなら、焦りに似て

いるかもしねない。内容に視線を走らせていく。

あつた！

午前二時頃、一人暮らしの老婦人が自宅の中で襲われている。やはり、野良犬らしき大型獣だ。すごい惨状だったらしい。しかも、重体だった三日前の被害者は、意識不明のまま亡くなつたと書いてある。

五日間に三人。決して少ない数ではない。

「むーん。夜間のパトロールを強化しても、外出を控えても、無意味な気がするのはなんでかなあ？」

俺の独り言にシェラが反応する。

「ん？ 何だつて？」

「あ？ ああ、悪い。独り言だ」

ゴソゴソと新聞をたたむと、仕事机の側に積んでおく。
「これから仕事すんだろ？」

テーブルの上の食器を片付けながら、シェラが尋ねる。

「おお。済ましちまわねーと、担当が泣くからな」

パジャマ代わりのトレーナーを脱ぐと、椅子に引っ掛けでおいたシャツに腕を通す。力チャカチャと音をさせながら、キッチンからシェリ・ルーの声が響いてくる。

「じゃ、俺、ちょっと出掛けてくるわ。昼は用意しどくから。あ、夜メシは何食いたいかな？」

着替え終わつてから煙草をくわえる。

「エビフリア。何だ、出掛けんのか？」

片付け終了したシェラが、俺の仕事用コーヒー セットを運んでくる。良く分かつたな。仕事中の俺は際限なくコーヒーを消費する。そのため、手の届く所にコーヒーセットを置いておかないと落ち着かない。コーヒーと煙草がないと、俺のお仕事用ゼンマイが切れちまう。

「ん。お仕事や」

「へえ、お前、仕事なんざしてたの？」

俺の煙草から一本抜き取り

「してたんさ。夕方には帰つてくるから、大人しくお仕事してんだぜ」

「いちいちムカつく奴だな、コイツ。俺は分かったといつ合図に片手を挙げ、仕事机に向かつてから気が付いた。

「おい、ちょっと待て！ お前がいなくて、俺はどうすりやいいんだ？」

「何が？」

「何がじゃねーよ、このオマヌケ野郎！」

「俺に見えるあの『テロ』『ロロ』やら、グログロやら、その他モロモロの事だよつ！」

「ああ」

「そんな事かと呟いて

「だから、大人しく仕事してろつて言つただろ？」

「ケロリンパと言つんじゃね つつ！」

「バカ。資料揃えたりすんのに、出掛けたりしなきゃなんねーんだよ」

ムキになつている俺を見て、シェリ・ルーはクククツと肩を震わせて笑う。

「大丈夫だよ。もう“力”も安定してるし、ちょっとやそつとじや、お前にはとり憑けないよ」

「本当だなあ？」

「疑り深いんだぞ、俺つてば。

「ああ。本当本当」

そう言われると、本当に大丈夫なよつな気になつちまうんだから、俺も人がいい。

シーラはキツチンに消え、何やら音がする。昼メシと夜メシの心配をしなくて済む俺は、自分用のコーヒーを淹れて机に向かう。散らかつた原稿用紙の中から書きかけのページを探し出すと、眼鏡をかけてペンを執る。

「ええと、こいつの締め切りが今月末だる。その後、来月の二十日があつて あ、ちょっと待てよお」

原稿を揃えながら、卓上カレンダーをチェックする。

うー。こりゃ、ちょっとヤバイな。

ペンのお尻で頭をカシカシと搔くと、ラジオのパワーをONにして、仕事を開始する。

仕事を始めるまでに時間がかかるが、準備が完了すれば、邪魔されるのが何より嫌だ。そんな気配を察してか、ショラも必要以上に音を立てない。いつの間に掛けたものやら、気が付けばドアにメモが張つてある。

出掛けるよ。昼メシは鍋の味噌汁と、冷蔵庫の中のおかずを温めて。漬物も入つてゐるから。メシは炊いてあるよ。夕方には戻るから、大人しく、いい子にしてろよ P・S・何か急用の時は、真砂のところに電話してくれ 番号が続く。

まるで長いコト一緒に過いしてきたかのように、俺の生活パターンに溶け込んでいる。要らぬ氣を使う必要はなく、自分の生活を壊す心配もない。『よく自然に、さりげなく、シェリ・ルーが俺の世界に入つてくる。同居人としては最適である。

一時間くらい集中して原稿用紙のマス目を文字で埋めた後、新しいコーヒーを淹れ直し、ラジオをCDにチエンジしようとする。

CDラックから数枚ディスクを抜き取り、適当な一枚をデッキにセットしようと近寄る。スイッチを押そうとした瞬間、番組がニュースに変わった。女性パーソナリティが、それまでの事件を報告していく。

『した 本日未明、市××町の さん宅に侵入し、一人暮らしこの さんを殺害した大型の獣は、ほかの二件と同一の種類である可能性が大きいという、動物園関係者からのコメントが発表されました。警察からの発表によりますと、現場に残されていた獣毛や歯形から類似点が指摘され 』

俺はCDをセットすると、スイッチを切り替えた。ズンズンと響

いてくる重低音のリズムに浸りながら、今聞いたばかりのニュースの事を考えていた。

三件とも同一の動物 おそらく大型肉食獣の類いだろう である可能性が高い、か。高いなんてもんじゃねえ。まず間違いなく同じ奴だ。目撃者がいないので、詳細は分からぬ。そう、目撃者が一人もいないのだ。公園、帰宅途中の道、住宅地……。

他の人がいない時間、いない場所を選ぶほど知能が高いのか。それとも単なる偶然なのか？ 何か目的があるのか。ただ、人間の血肉の味を覚えただけなのか？

謎だらけだ。そして一番の疑問は、この事件が気になつて仕方がない、この俺自身。

何でだ？ 分からん。

ぬるくなつたコーヒーを一気に飲み干すと、俺は机の上の原稿用紙に注意を戻した。当面の問題は、この紙の束だ。

ハード・ロックの波に包まれながら、ひたすら白紙を消費する事に意識を集中する。

悪夢の到来（前書き）

悪夢は知らなこいつかに運び寄る。つい、誰の側にでも……。

悪夢の到来

「ねえ、知ってる？　この間から続いている事件の事」

助手席の女が尋ねる。

「事件？　ああ、野良犬が人間を襲つてゐるっていう奴？　犬のくせに人様襲うなんてな」

右手の煙草を口元へ持つていきながら、運転席の男が答えた。
「そうそう。ニュースで、夜間の外出は控えるようにって言つてたよね」

そういうてから女は、腕時計に視線を走らせる。時刻はすでに十時半を回つている。久しぶりのデートで浮かれていた二人は、映画のレイントショーの帰りであつた。事件も警告も知つていたが、普段から会社の残業などで帰りが遅くなる事に慣れていたために、あまり気いていなかつたのだ。何より「自分達に限つて」という気持ちもあつた。

だが、一度時刻を気にし始めるとな、途端に不安にかられてしまうのだ。まるで、人間の時間の流れの外にある、人間外の時間帯に足を踏み入れてしまつたようだ。

そんな恋人の怯えに気が付いたのか、運転していた男が口を開く。
「平氣だつて。そんなに不安がるなよ。イザつて時には、俺が守つてやるから」

「本当ね。絶対よ」

「ああ、ホントホント」

大通りを抜けて、静かな住宅地へと車を乗り入れる。

「さ、ホラ。もうすぐ家に着くから安心しろよ」

しかし次の角を曲がった瞬間、男はブレーキを思いつきり踏み込んでいた。タイヤの滑る甲高い音が、夜の闇に響き渡る。

「うわっ！」

「キャアッ！」

ガクンッというショックと共に、車体が止まる。

「何？ 一体、何なのよ？」

両手で胸を押さえながら、女が男に詰め寄った。

「あ、ああ。ここ曲がったら、目の前に大きな犬がいたんだよ。そんで、慌ててブレーク踏んだんだけど……」

「轢いちゃった、の？」

「いや……でも……わかんねえよ」

男の手がノロノロとシートベルトを外す。

「ちょっと後ろ回つて見てくるわ。やっぱ、轢いてたりすつとマズイしな。ちょっと待つてくれよ」

車内に女を残してドアを開けると、男は後方へ回つて確認しに行く。

ハイ・ビームに照らされて、シンと静まり返った家並みが、白々と浮かび上がっている。ただ自分の鼓動と息遣いだけが、閉ざされた狭い空間に響いている。

「お、遅いな智司。何してんだろ……」

小声で呟いたつもりだったが、想像以上に大きく聞こえる。車の後ろに回つたきり、相手の戻つて来る気配はない。

不安を紛らわそうと、カーラジオのボリュームを上げようとして、女はふと疑問を抱いた。

静かだ。静か過ぎる。行き交う人影もない。先ほどのブレーキに対しても、何の反応もないのだ。交通量の多い町中での道ではない。それこそ文字通り、他人の家の玄関先なのだ。まだ家々の窓には明かりが灯っている。何らかのリアクションがあつて、然るべきだ。

「やあよお。智司、早く戻つてきてよお」

両手で口の肩を抱くと、震えているのが良く分かる。

ピシャ

まるで雨がフロントガラスを叩くかのような音に、女は飛び上がつて反応した。

ガラスの上部に数ヶ所、水滴が落ちている。雨にしては、変な降り方だ。ガラスを伝いながら、水滴が流れてくる。

ゆるやかに、ネットリと。

それが雨であろうはずない。なぜなら、雨には「色」がないからである。ましてや赤い雨など存在するはずがない。

ドンッ！

ボンネットの上に、丸いボールのよつた物体が落ちてきた。ボールは周囲に闇色の飛沫しぶきを撒き散らし、ボンネットの上を飛び跳ねた。

「ひつ……！」

「ロリ」と転がったボール＝生首の見開かれた瞳と女の視線がモロに合つた。悲鳴をあげようとする声帯と、深く息を吸い込もうとする気管の別々の動きによって、自分の声とは思えない、かすれた声が喉に引っ掛けかっている。

半分引き垂るよつにしてシートベルトを外し、車外へと転がり出る。

「あ、ああああ、や やとわわわと やわわわ、やとしへい
ヒイイイイ……！」

精神に異常をきたしたかのように、意味を成さない言葉をわめきながら、少しでも車から 男の生首から 遠ざかろうとする。腰が抜けているために、全力で進んでいるにもかかわらず、ちつとも前に進まない。

不意に背後で唸り声が沸き上がる。それは新鮮な獲物を見つけた肉食獣の歓喜の唸り。

「ヒイイヒアアアあああ ！」

顔中を涙と脂汗と涎で汚しながら、爪が剥がれるのも構わず、四つん這いになつて必死で逃げる。

嫌つ！ イヤアアツ！ 来ないでえ、嫌よお！ 助けて助けて誰かあああつ！！

叫び声を上げようとした女の背中に、ズンッ、と獣の体重がかかる。耳元に、生臭い息が触れる。体中の毛が逆立つた。

「いやああああああ つ！！」

最後に女の口から出た意味のある言葉も、唐突に終わりを告げた。

『神』についての考察（前書き）

「神」とは何ぞや？　俺の疑問に誰も答えてはくれなかつたんだ。

『神』についての考察

「どうもー。ありがとうございましたー！」

締め切り一日遅れの原稿を抱え、ホツとした表所で帰つていく担当者を見送つた後、徹夜明けの頭をカシカシと搔きながら、クッシュンに腰を降ろす。

「伊津留、お疲れさん」

シェリ・ルーがねぎらいの言葉をかけながら、半分使い物にならない俺の前に昼食を並べていく。

正体不明の俺の同居人、シェリ・ルー。以前はどこで何をしていたのか知らんけど、作る料理は激ウマ！ いつの間にか、我が家のおさんどん《・・・・・》と化している。

しかし、テーブルに並んだ皿の数にも関わらず、俺の仏頂面が直らないのに気がつくと、

「いづる。消化に悪いから、メシ時に新聞読むのやめとけよ。それでなくとも、この一日間まともに食事してないんだから」「んー。ゴメンなさい」

新聞を床の上に放り出すと、クッシュンにもたれながら卵焼きをひと切れ頬張る。ホコホコと湯気を立てている味噌汁をすすりながら、テレビのスイッチを入れてみる。

どうにも気になつて、落ち着いてメシも食えねえ。

シェラが何か言いたそうに口を開くが、俺に無視されて諦める。

『 謎の大型獣について、動物園などから逃げ出したオオカミやライオンなどではないかという声も挙がっていますが、これまでに、いずれの動物園からもそのような届けは出されておりません。警察からは夜間パトロールと大型獣の搜索をより一層強化する方針ですが、市民の方々も、夜間の外出は極力控えて欲しいというコメントが発表されました』

画面の中で綺麗に着飾つてすまし顔の女子アナが、淡々とニュース

スを読み上げる。

つたくよお。「私には関係ないわ」つてな顔しやがつて。う、ー。

ムカムカ……。腹が立つからチャンネル替えてやる。

くわえ箸でリモコンを操作する俺を見て

「おーい、伊津留。お行儀、おぎょーぎ」

……こいつ、変なトコにつつさいんだよなあ。妙にババ臭かつたりするのだ。

「ヘイヘイ」

箸を置こうとした瞬間、CMを流していたチャンネルから、パツと画面が替わった。

『これが送られてきた映像です』

嫌味なくらいカツチリと髪を分けた男性アナウンサーが、カメラに向かってそう言つと同時に、VTRに切り替わる。

「う、わ……」

「ひで……」

俺とシェラ、同時に眩いでしまつた。

画面上に映し出されたのは、以前から不^ふ穏な噂の絶えなかつた某国^{ふおん}の映像だ。あちこちで鳴り渡る爆音。破壊し尽くされた街並み。瓦礫^{がれき}の下から運び出される怪我人と、それを見つめる生氣のない瞳をした人々。罪もなく傷付けられていく子供達の横で、誇らしげに機関銃を抱える少年兵。

実家にいる俺の弟とたいして変わらないくらいだ。そう考えたら、見てんのが堪らなく辛くなつてきた。

ブツ　ツン

テレビをOFFにすると、漬物を口に放り込んで必要以上に大きな音を立てて噛み締めた。

「なあ、シェリ・ルー。お前、考えた事ねえか?」

「何を?」

熱めのお茶を入れながら、シェリ・ルーが応える。俺は食べ終えた食器を重ねて下げるが、湯呑みを受け取りながら続ける。

「俺はずーっと考えてたんだ。もしも『人間』を造ったのが、聖書にある通り“神”なんだとしたら。そしてその神が、本当に全知全能なんだとしたら。どうして“神”は人間に『争い』なんてモノを与えたのかってな。そもそも戦争の大半は、宗教が原因じゃねえか」

ショラは湯呑みを両手でくるんで、何事か考え込んでいる。俺はひと口お茶をすると、

「第一さ、人間ってのは“神”的似姿なんだろ？ だつたらぞ、“神”的分身ともいえる人間にだぜ？ 何で『争い』とか『憎しみ』なんて心があんだよ。わかんねーんだよなあ」

疑問符の連発である。この疑問は俺にとつて何度も繰り返され、そして解答を得られぬまま、今日を迎えている。

そう。誰にも解答を出す事など出来ない問い合わせのかも知れない。

でも。でも、もしかしたら。こいつなら、ショラなら解答を見つけてくれるかも知れない。そんな想いがあった。

例え見つけられなくとも、俺の考えを理解してくれるはずだという、何の根拠もない確信めいたものがあった。

だいぶぬるくなつたお茶を口元に運びながら、逆にショラが俺に問いかけてくる。

「なあ、伊津留。“天国”ってのはさ、限られた選ばれた奴にしか行けない場所だと思うか？」

信じる者は救われる。それは俺の一番嫌いな考え方、思想だ。

信じよ、さらば救われん　　裏をかえせば、信じる者しか救わない。極端な発想かもしけないが、俺にはセコく感じられて仕方がない。

お前は私を信じない。だから私はお前を救わない。俺の事を信じてる奴だけついて來い。それ以外の奴等は、勝手に死にやがれ。やれやれつて感じだぜ。結構、自分勝手な言い草に聞こえる。本当は違う解釈があるのかもしね。でも、俺が今まで出会つたキリスト教関係者の皆さんには、納得できる解釈を提示してくれなかつた。

本当は彼らも分かっていないのかも知れない。

「俺は別に無神論者つて訳じゃねーし、宗教嫌いって訳でもねえ。アンチ・キリスト派を気取つているつもりもないしな。一応これでも、実家の関係で仏教徒だつたりするし。けど、選ばれた者にしかつてーのが、どうしても納得いかねえ。要するに、最終的には“神”の好みの問題になつちまうようでな。“天国の門”をくぐる人間を一人でも拒絶した時点で、それは“神”を名乗る資格を失うと、俺は思う。まあ、あくまでも俺個人の意見だから、クリスチャンの人間が聞いたら激怒するかもしれんけどな」

言いたい事は言つた。胡坐を組んだ膝に頬杖をつき、シェリ・ルーに眼をやる。すっかり冷めてしまつたお茶を飲み干すと、シェラは湯呑みを掌に打ち付け、ニヤツと笑う。

「うん。俺もまったく同感だ」

「おい……。それだけかよ？なんか、肩透かしきらつたみたいだな。しかし、それ以上シェラは何も言つ氣はないらしい。ちえつ。がつかりだ。

テーブルの上の食器を片付け、キッチンから聞こえてくる水音を聞いていたら、ドバッと眠気が押し寄せてきた。大アクビをしながら、キッチンに向かつて声を掛ける。

「ヒュア～。あふつ。お前、今日も出掛けんのか？」

「いんや。今日は出掛けないで、うちにいるよ」

水の音にかき消されないようこ、少しばかり張り上げたシェリ・ルーの返事が響く。

「それじゃあよお。俺、ちつと寝るわ。今日は外でメシ食つて、真砂んトコ行こいざ」

水音が止み、キッチンからシェラが顔を出した。

「ああ、OK。伊津留が寝てる間に、洗濯物終わらせとくわ。しかし、今メシ食い終わつたのに、もう次のメシの話か？」

皆さんもお気付きの事と思うが、我が家家の家事というものは、今や全てショラを中心に回つていて。決して決して、俺が強制してい

る訳ではないのだ。ゼエーんぜん押し付けたりしている訳じゃないんだ（何で俺、言い訳してんだろ？ しかも必死に）。これはあくまでも、奴が自主的にやつてくれている事なのだ。ま、俺がやるよりも数段手際がいいので、任せつけなしなになつてんのも、また事実である。

ノタクタとロフトに上がると、布団の中に潜り込む。ゴソゴソ。この布団だつてショーラがこまめに干してくれているから、いつもフツカフカだ。まったく。あいつが来てからの方が、信じられないくらい経済的なのだ。すでに俺ん家は、シェリ・ルーなしではやつていけなくなつている。ああ。トホホ。

洗濯機の「ウンウン」いう音を聞いていのうひに、大挙してやつてきた睡魔の波に呑み込まれてしまう。

おーい、ショーラあ。色物の洗濯、別々にしてなあ……。

シェリの本音と俺のコラボ（漫書き）

垣間見たシェリ・ルーの本音。そして理解してしまった、自分の本音。
参ったな。俺つばはマジで？

シェラの本音と俺のつぶやき

「あ、そーだ。ちょっと本屋に寄りたいんだけど、いいか?」

「あの後、五時間程眠つた俺は、必要以上に元気を取り戻していた。
「うを? ああ、構わんよ」

木曜日の午後八時。街がこれから活気付き、美しく化粧を施す時間。いつもなら通りにはまだ人が溢れ、行き交う車のテール・ランプが赤い列をなしているはずなのに。妙に閑散としている街中を、俺達二人は歩いて行く。

やつぱり「謎の猛獣」事件の影響が大きいのだ。すれ違う人々は、一様に不安の表情を浮かべ、少しでも周囲に人がいる間に家に、目的地に辿り着こうとしている。塾帰りの小・中学生も、遊びに繰り出す高校生、コンパに用のない大学生。いや、学生だけじゃない。人目をばかばかず、自分達の世界に没入するための場所へと急ぐカップルも、仕事の憂さを晴らしに赤ちゃんの暖簾をくぐるサラリーマンも、めつきり数が減つている。深夜十一時まで営業している近所の本屋も、「こんトコ早仕舞いだ。まあ、営業しても客が来ないことにはねえ。仕方ないよな……。

「エート。参考書、自然科学、経済、歴史、資格に趣味つと。あ、これだろー。それからー」

小説の資料である地図と、自分用の文庫本を二冊。

「おや? シェラはどこじや? 店内をぐるりと見回す。あ、おつた。……をい。料理本の棚の前かよ……。

おそらく本人は気がついていないだろう。一心に本を眺めている自分が、店内の注目を集めている。なんてこたあね。ま、いいや別に。 ん?

視線を感じる。連れと違つて、特に目立つ事はないはずだ。何だろう? 気のせいかしらん?

努めてさりげなく店内を見回す。

いた！ いたのだが しかし。

視線の主もシェラに劣らず、派手派手な奴でやんの。肩にかかる金髪を斜めにカット（クレオパトラカットって奴?）し、緑色の瞳でジッと俺を睨み付けている。うう。視線が痛い。ちょうど俺の鎖骨の辺りに、相手の視線がビシビシと刺さる。人の視線に何らかの物理的な力があるとすれば、間違いない俺の体には穴が開いている。それ程、あからさまに“悪意”つてモンを人に遠慮なくぶつけてくれやがる。

くそつ！ 一体全体、俺が何したつてんだよ！ 外国人に知り合
いはいねえぞ、俺は！ あ、でも、知らない間になんかした？

側の宗教書の棚の前に立つと、適當な一冊を抜き出して広げながら、体の位置を変えてみる。相手に対しても、俺の横顔が見えるようにして立つ。そして大きく息を吸い込むと、ツイつと相手の方へ顔を向ける。『ツハデーハー』な金髪の兄ちゃんは、俺と目が合うと弾かれたように視線を外し、そのまま店から出て行ってしまった。何だつたんだよ、マジでえ……。ホーッと息を吐き、手に取った本に視線を落とす。『天使と悪魔の系譜』　『アズラエル』　そ
うだ。シェリー・ルーは俺と初めて会つた夢ん中（なのか？）で、確かにそう言った。その言葉の意味は「死の天使」だったはず。
「よ、伊津留。買う本決まつたか？」

では本を買ひ紹ねたシニカ 袋を抱えて二二二二て
いる。

「お、おお。会話してくんや
広げていた本を閉じると、そのままページへ直行する。ぐぬぬ、重
いぢやねーかよ。

「ヤヒト、メシにしようかね」

しかし、さつきの金髪兄ちゃん、何だつたんだろう？ 使用頻度の少ない頭に活動を強制しながら、本来の目的地であるステーキハウスへ、スタコラサツサ。店内に一步踏み込んだ瞬間そこいら中

の視線が一点に集中した。すなわち、シエラ・ルーこと我が相棒殿に。レジカウンターの奥ではウエイトレスのお姉様方が、熾烈な「オーダーを取りに行くのは私よ」合戦を繰り広げている。」りやあ、しまつたぜなあ。今度から外食ん時は、氣いつけんと……。テーブルについて煙草を出していると、やつとの事でその資格を獲得したのであらう、目をハートにしたウエイトレスがサービス過剰な笑顔でやつてくる。連れの俺の方なんぞ、完全無視だもんねえ。まあ、しょうがねえよなあ。その気持ちはよく分かる。……けど、エプロン破れてつぞ。

名残惜し氣に彼女がテーブルを去ると、煙草をくわえて苦笑して見せる。

「お前みたいに顔のイイ奴は、女に不自由しねえな。羨ましいこそ」

「上着のポケットから煙草を取り出していたシエラは、皮肉っぽく眼を光らせて答える。

「羨む事なんかないわ。上辺に魅かれてやつてくる、中身の見えない連中が多すぎるだけだよ」

「そんな、誘蛾灯に集まる蛾みたいに。そこまで言つちまつたら、身も蓋もないだろうによ」

「似たようなモンさ。顔と中身が比例するなんて誰が決めたんだ？顔がキレイだから、中身までもキレイとは限らない。天使の顔した悪魔がいたつて、ちつとも不思議じやない。でも、それを見ない奴が多すぎる。それだけの事さ」

煙をフツと吐き出し、俺の方へ視線を流す。

「俺もそうかも知んないぜ。どつする？」

ゴクリと喉が鳴る。正直言つて、シエラの話の半分も耳に入つてない。背筋にゾクゾクくる。

体中に鳥肌が立つほど、凄絶な色氣が漂う。性別を超越した、純粹な“美”がここにある。知らず知らず呼吸が速くなる。

「かまわねえよ。お前が何者だったって、俺は一緒にいる事を

選んだんだから

上の空状態だ。自分が何を言っているのかさえ、よく分かっていない。ただ、今ここで、自分を信じている事の証を、一緒に在る事の証を示せとシェラに言われたら、俺は迷わず自分の喉首を搔つ切つていただろう。己の命を証するために。それほどまでに、この時の俺はシェラの全部に魅かれていた。

短くなつた煙草を灰皿でもみ消すと、前髪をかき上げ、シェラはポツリと呟く。

「……俺は、この顔が嫌いだ」

話題が日常的なモノに移ると同時に、俺を縛り付けていた鎖が切れたように、思考回路が正常に戻る。

「そおかあ？」

努めて、バカ明るい声を出す。氷の溶けてしまつた水に口をつけ、知らないうちに渴いていた喉を潤す。

「俺は好きだぞ、お前の顔。いいじゃねえか。第一、みつともねえぐらいブ男で、自分の顔が嫌いだつてんなら分かるけど、お前みたいに顔が整つてる奴が言うと、俺を含めて十人並みの連中は自殺するしかないぞ」

新しい煙草に火を点ける。

「この顔、伊津留は気に入つてゐるのか？」

覗き込むように俺に向けられた瞳には、先程の剣呑な光はない。

「おお。大好きだぜ」

念のために言つておこう。俺はゲイでもなければ、バイでもない。女の子大好きな、三十歳の健全な男なのよお。夢だつて希望だつてある。結婚願望だつてあるんだ。なのに。

ある意味、俺は完全にシェラに惚れていた。例えこいつが妖怪だったとしても、天使でも悪魔でも そう、死神だつたとしても構うものか。シェラが何者だつたとしても、俺はシェラと一緒に在る事を選んだんだから。

「お待たせいたしました」

タイミングよくウエイトレスが料理を持ってやってくる。くうー。

腹が悲鳴をあげとる。

「さて。不毛な会話はやめて、人間の基本的欲望を満たすとしますか」

「だな。消化に悪い話は止めよう」

ニヤリと笑うと、互いの皿に取り組む。うー。しかし。

「こういう店に来て、こういう事を言つのもアレだけじゃあ

フォークの肉を口へ運びながら、声を潜めて言つ。

「やっぱ、シーラのメシの方が美味しいわ」

闖入者もしくは敵対者（前書き）

招かれざる闖入者、もしくは敵対者。何モンだよ、お前。
腹立つなあ～！

闖入者もしくは敵対者

相変わらず、相棒に注がれる店内の視線は熱い。が、ソレを無視する「ツツも掴めた。

「こうがつ！ こうがなのだつ！」

「！」

不意に緊張した俺を見て、ショーラが不思議そつに眉を引き上げる。

「何？ どうかした？」

「あ、いや、何でもない。うん。気のせいだつた」

なるべく軽薄そうな返事をするが、神経はある方向に集中している。皿の中身はあらかた片付いている。食後のコーヒーをすすりながら、煙草の箱を引き寄せた。

「ん？ やけに軽い。によろる ナーラス。空だぜ。」

「つと、煙草買つてくるわ」

あることが気になつていて俺は、レジカウンター奥の自販機スペースへ急ぐ。小銭をスリットに落とし、銘柄のボタンをプッシュする。煙草を取り出し口から取ろうと身をかがめながら、全神経は背後に集中している。

「何か言いたい事があんなら、サッサとしゃべつて、どつかに行つちまつてくれよ」

振り向きながら、かなり不機嫌な声になるのを抑えられない。抑えるつもりもない。それもそのはず。俺の後ろで腕を組んで立っているには、先程の本屋で思いつきりガン飛ばしてくれた、あの派手兄ちゃんだ。人がメシ食つてゐるのに、視界に入りにくい隅のテーブルで、またまた俺達にガンくれてんだわ。

あーつたぐ。尋ねてんのは俺なのに、どうしてだか相手の方が態度がデカイ。なまじ顔がいいだけに、むしょうに腹が立つ。

「何だよ。用がねえんなら行くからな」

イライラと口を開いたとき、相手がよつやく声を発した。

「あそこにはいるのは、お前の連れか？」

すつづー工ラソーに言ひ。んだ、しゃべれんじやん。日本語わかんねえのかと思つて、一瞬心配してソンしたぞ。

「俺の連れだよ。それがどうした？」

そもそも連れでなければ、一緒にテーブルにいるはずがないだろう。俺、相席嫌いだし。金髪兄ちゃんは緑色の目を細め、ジロジロと俺の事を見ている。否、これは「見る」なんてモンじやないわ。「ねめつける」と言つた方がより正確だ。無遠慮に視線が突き刺さる。

「ふん。何を好き好んで、このよくな下賤な輩とげせん やから」

思いつ切り人を見下した言葉に、俺の頭は瞬間湯沸かし器になる（簡単に言えば、ブツチギレそうになつたという事よ）。怒りの余り声も出ない俺を鼻先で嘲笑すると、またまたエラソーにそつくり返り、高飛車に言い放つた。

「いいか、良く聞け。やつは災厄を振り撒く者だ。側にいる者全てに、不幸が舞い降りるだろ。今のうちに縁を切ることだな。まあ、貴様の生命など、どうなつたところで気にもならんがな」

超ムカつく野郎だなあ。

ブツツンしそうになる自分を抑え、深呼吸する。ここで相手が思つてゐる通りの行動なんて、意地でもとつてやるもんか。

「おい

言つだけ言つた金髪兄ちゃんは、俺に背を向けて歩き出やうとしている。その足を止めさせたくて、言つてみる。

「この忠告、ありがとよ。けどな、どこの馬の骨か分かりもしない他人に『あなたは不幸になりますから、相棒と別れた方がいいですよ』とか言われて、『はい、そうします。ありがとうございます』なんて奴は、いないんじやないのかねえ？」

手の中の煙草の箱をポンと弾ませる。

「災厄？ 不幸？ 結構なこっちゃねえか。平々凡々な生活は、こちからお断りだ。そんなんであいつと一緒にいられんなよ」

「愚かな。すでに魅入られていたか」

片頬を歪めて憎憎しげに嘲笑うのを見ながら、こちらも不敵に笑つてやる。

「そつからよ。あんたがいくらギャンギャン吠えても、せいぜい、女を取られた男が嫌がらせしてるようにしか見えないぜ。無愛想な金髪兄ちゃんよ。シェラの方がよっぽど、いい男だね」

左手の中指を立てて、舌を出してやる。うーん、我ながら低次元な……。良い子の皆は、真似しないようにね。

しかし、その低次元さゆえに相手のプライドに効いたらしい。不遜な光を浮かべていた瞳が、馬鹿にされたとわかった途端、怒りにギラッと燃えた。体ごと俺の方へ向き直ると、右手の人差し指を突きつけ、

「口を慎め、異端者が！ そこまで言つのならば、覚悟は出来ておるのだろ？ その身に父なる神の怒りを受けるが良い！」

そう吐き捨てるど、くるりと踵きびすを返し、自販機スペースを出て行つた。何だよ「父なる神の怒り」って。ディープなカルト関係者か？ はあ／＼ふう／＼。その場で数回、深呼吸を繰り返す。待た

せているショラに、時間のかかつた訳を何と言い繕うか？

テーブルに戻るまでに、さりげなく店内をチェックする。思つた通り、いけすかねえ兄ちゃんの姿はない。ケツ！

「よつ。お待たせしたね」

テーブルに頬杖をついて窓の外を眺めていたシェラが、チラッと視線を俺に戻す。

「随分、時間がかかつたな」

「そ、なんだよ。自販機の前まで行つたら小銭が無くて、札を使おうと思つたら、デカイのしかなくてな。レジで両替してもらつたらよ、お前の事をしつこく聞かれてな」

焦りまくりながらも、必死で言い訳する。何だか、浮気がばれそうな亭主みたいじゃねーか、これじゃ……。自分でもかなり情けなく感じている俺を見て笑ながら

「いいよ。分かったから、そろそろ行こうか。真砂んトコに寄るんだろ？」

上着を手に取ると立ち上がる。それだけで、周囲からホウと、熱いため息が漏れる。マジかよ……。

伝票を掴んでレジへ向かいながら、ついてくるシリ・ルーに警告告。

「先に外で待つてろよ」

「？ 何で？」

心底から不思議そうな相棒に、

「お前の顔に見惚れて、会計に時間がかかるからだ」

と、懇切丁寧に説明してやる。

眉をヒョイと持ち上げて肩をすくめ一足先に外へ出る相棒に、店内中の羨望と憧憬の眼差しが送られる。会計のためにレジ前に残つた俺には、嫉妬と疑問、猜疑の渦巻く凶悪な視線が容赦なく注がれる。ホント、人間て感情の動物やね（そりや、女か……）。

財布をしまいながら、植え込みの側で煙草をくわえているシリ・ルーに手を振る。夜の闇の中、そこだけ輝いているかのような白い美貌に、フウツと笑みが浮く。あうつ……。これはまた、強烈な爆走しそうになる心臓と暴走しそうになる理性をなだめつつ、ギクシャクと歩を進める。

これまでの経緯から、何とか動きが止まつて見入つてしまつはなくなつたのだが 恐るべし、シェラの微笑。

ちょうど駐車場から歩いて来たカツブルの女性が、急に胸を押されて座り込んでしまつた。病気ではない。見れば分かる。……いや、これもある意味では、一種の病気かもしね。シェラの笑みを、まともに目撃してしまつたらしい。街灯の明かりを受けて、我が相棒の顔容は妖しく光つて見える。営業妨害で訴えられかねない美貌の主を、なかば引きずるようにしてその場を去る。

今夜あの場に居合わせたカツブルのうち、一体、何組が破滅の道を辿るのだろう？ ご愁傷様です。 合掌。言つとくけど、俺の

せいじやないからな。

そろそろ十時になろうつかといつ街並みを、一人でポテポテと歩いて行く。上弦の月が、天空から地上を穏やかに照らしていた。

しかし、頭くんぜな。マジで何モソだつたんだ、あの金髪野郎。なあにが『下賤の輩』なんだよ、失礼な奴め。『貴様の生命など知らん』とかぬかすんなら、何しに俺の前に現れたんだよなあ？ 馬鹿じやねえの？

怒りに任せて自分の世界に入り込んでいた俺は、シェラがいつも路地を通り過ぎた事に、まったく気付いていなかつた。

真砂の経営する“仮面舞踏会”へ行くのに使う薄暗い路地は、そこだけ別の世界のような雰囲氣がある。どこか、この世でない、別の空間への入り口のような氣がして、密かに俺のお氣に入りであつたりする。

ブツブツと独つ“じちながり、何も考えないまま路地へ入り込むとする。

「おい、伊津留つてばよ！」

先程から呼びかけていたらしにショラの声に、意識が浮上しかかる。

「「ひにょ？」

「妙な返事してんなよ……。今日は、そつちじやないんだ」

ショラが路地から五・六歩離れた所で、俺の事を呼んでいる。

「何で？」 いっちの方が近いじやんよ

親指で通りの奥を指して、キヨトンとして答えた俺に、シェラが首を振つて言つ。

「変なんだよ、そつちの道。だから、いっちの道から行くんだ。わざわざ、厄介事に首を突つ込む事もないだろ？」

「ふうん。変なんだ」

「そう。変なんだよ」

スゲー、不毛な会話。

「わあつたよ」

ポケットから手を抜き出した拍子に、中からライターが飛び出した。

「おつと」

カツンと地面で硬い音を響かせ、路地の方へと跳ねていく。拾おうとして路地へ足を踏み出した俺を見て、シヨラが焦つて叫んだ。

「待てつ！ 駄目だ、馬鹿！」

現出した悪夢（前書き）

俺達の田の前にも、とりとひ形になつた悪夢が。
俺つてば、結構ペーンチ！

現出した悪夢

相棒の制止の声が届く前に、俺は路地へ入り込んでいた。ライターを拾い上げ、

「シェラ、テメー、俺を馬鹿って言つたな」

振り向こうとした俺に足に、何かが当たった。

「？」

何気なく視線を向けて、俺はエラく後悔する羽目になる。俺に足に当たっているのは、靴を履いたままの、男物の右足。

自分の足は左右とも、ここに揃っている。シリ・ルーの足でもなからうつなあ。奴の足なら、もっとキレイなはずだ。……見た事ないが。

じゃ、一体、誰の足なんだ？ それに何だってこんなトコに、片一方だけ落つこちてんだよ？ 左足だけじゃ不便だろ？

そこまで考えたとき、俺の思考回路は本人の意志を無視してその機能を停止した。脳は目から入ってきた情報をそのまま受け取る。思考回路を介さず、原始的な脳が認識する。

人間の足は取り外し不可なはずである。ましてや、こんな場所に片足だけ……。よく見れば（見なくていいつづ！）付け根の部分から引き千切られたように、肉と皮膚が大きく爆ぜている。飛び散った血痕が黒々しい。

「うつ……」

ようやく思考が正常に作動し始めたのだろう。胃から急激な勢いで逆流してきた温かいモノが、喉元までせり上がりつて来る。ぐるりと背を向け、体を丸めて激しく嘔吐する。

「大丈夫か、伊津留！」

駆け寄ってきたシェラが、俺の背中をそすつてくれる。周囲に吐瀉物の異臭が漂つた。

「げえつ げほつげほつ、じほつ」

胃の内容物は、あらかた出でてしまった。口の周りについた汚れを、ハンカチを引つ張り出して拭う。

「げほっ、うん。大丈夫だ」

くそつ。涙目になつてやがる。空氣を求めて喘ぐ肺に、深呼吸して酸素を送つてやる。空氣中に溶けていた甘い血臭が、呼気に伴い肺の中に入り込む。それに反応しそうになる胃をなだめながら、シェラに頼む。

「悪い、シェラ。その足を何とかしてくれ」

「ああ、分かつた」

シェラは着ていたジャケットを脱ぐと、落ちているその足にかけて視界から隠す。胃をさすり、シェラの手にすがりつくようにして立ち上がる。こいつの言つてた『変な』つてのはコレの事だつたんか？しかし、他の部分はどうしたんだ？まさか、帰つたわけじゃあるまい。危険な好奇心が頭をもたげる。

俺の顔を覗き込んでいたシェラが、ハツとして体を硬くした。

「伊津留 動けるか？」

見上げたシェラの色の薄い瞳が、炯炯^{けいけい}と光を放つていて。ライト・ブラウンの長い髪が、風もないのにザワリと揺れた。

「無理だ つても、意味ねえんだろ？」

シリ・ルーの身体から発せられる、圧倒的な迫力。普段のお茶抜けた姿からは、想像もできない威圧感、存在感。

路地の奥、街灯の明かりの届かぬ先から、低い唸り声が聞こえてくる。まるで、食事時を邪魔された猫のような。しかも、その猫ときたら大きさが、トラかライオンぐらいありそうな。この声からすると。

「おい。これって もしかして、コレが例のかよ？」

笑いそうになる膝に力を入れて、とにかく一人で立つてみる。いざという時に、シェラにしがみついたままじゃみつともないし、足手まといになつちまう。そんな情けない羽目に陥るのだけは、絶対に避けたい。

「ああ。そつらしいな」

金色に光る視線を唸り声の方へ向けながら、短くシェラが答える。闇が。街灯に照らされている光の輪の外、俺達を取り巻く闇が凝つた。

「あ、あいつかよ……？」

低く太く唸り声を発しながら、ドロ色の毛皮を波打たせて、巨大な獣が姿を現す。

視線の高さが、そう大して変わらない。この世の一体どこを探せば、こんなデカイ動物がいるつてんだよお！？

大きく裂けた口から、並んだ歯が覗く。

「ちくしょー！ テメーかよ、今まで人間を襲つてやがったんは！ 俺の声に反応してか、「そいつ」と田が命づ。うつ、ヤダなあ……。

瞬間、「そいつ」が笑つた気がした。しかも、「一タア」という嫌あな嗤いだ。慌てて視線を逸らそうとする。逸らそうとする。そらそと……。

でーつ！ 何でだよおおー！？

見えない手で頭を挟みつけられているかのよつこ、視線を逸らす事が出来ない。いや、頭だけじゃねえ。全身がまるで金縛りにでもあつたみたいに、ピクリとも動かない。

「そいつ」の嗤いが、さらに広がつた。唾液の溢れた口の中で、真っ赤な舌が踊る。まるでそれ自体に生命があるかのよつこ。くそー！ こんちくしょー！ 動け動けよ動けええ！ 馬つ鹿野郎おお！ 自分の身体で唯一本人の希望通りになるのが、心の中で叫び、罵倒する事。なんて、なんて、救われねーじゃねーかよおおつ！ そんな俺を面白そうに見ながら、「そいつ」が近寄つてくる。獣独特の歩調で、ノソリノソリと、しかし確実に。

ああああ……。視界一杯に、黄色く濁つた瞳が広がる。

食イタイ

喰ライ尽クシテヤル

強烈な飢え。全てを喰らいくぐしても尚、やむ事のない飢餓感。

憎イ憎イ憎イ憎イ……

ナゼ私ガ？ 私ダケ、不公平ダワ

ドウシテ俺 NANDA？ アイツノ方ガ、アイツノ方ガ……

オオ、呪ワシイゾオ

死ンデシマエ、死ネ死ネ死ネ……

殺シテヤル、アンナ奴

死ニタクナイ

無限とも思える、感情の激流。押し流されてしまいそうな「憎悪」、触れば切れてしまいそうな「殺意」「呪詛」「絶望」……。ありとあらゆる「負」の感情。

ぱあんっ！

景気のいい音が響き、頬がジンジンと痛み出す。

「伊津留つ！ 気がついたかよつ！？」

殴られた頬に手を当てて、コクコクと首を振る。しかし、イタヒ

……。

悔しそうに眼を細める「そいつ」との距離は、いつの間にか半分を切つている。

「馬鹿が。あいつの技にはまって、お前、自分から食われに行くトコだつたんだよ！」

シエラが激昂しながら怒鳴りつけてくる。

「俺の後ろにいる。危なつかしくてたまんねえ」

手荒くシエラの背後に押しやられる。思つていたほど、時間は経過していないらしい。ほんの数秒の間の出来事。獲物自らが食われに来るのを待つていた獣は、街灯の明かりに全身をさらす。光は「そいつ」にとつては「得意ではない」程度の事らしい。今まで動かなかつたのは、ただ単に面倒だつただけのようだ。

目をつけていた餌（えつ？ 僕かつ？）を横取りされて、そうとう頭にきているのだろう。不機嫌そうな唸り声が徐々に高くなつていぐ。それに合わせて、太い尻尾がクネクネと気味の悪いダンスを

踊る。全身を覆う泥色の毛皮の中、尾だけがヌメヌと光っている。先端が持ち上がり、パクリと口を開ける。

尾？ お？ おおおお？ ありやあ、尻尾なんかじゃねえぞ！ パックリと開いた口からは、赤い舌がのぞいている。まるで地獄の淵から漏れる炎のようだ。それは俺の腕ほどもあるうかといつ、巨大な大蛇。

なぜだあ！ この世の生物学的進化論つてモンを、完全に無視してんぞ、テメー！

裂けた口をひときわ大きく開けて、蛇が鋭く威嚇音を発する。その瞬間、あらかじめ決められていた合図のように、「そいつ」が飛び掛ってきた。

すくんでしまった俺の胸倉を掴んで、力任せに前方へ投げ飛ばしたシェラが、相手から目を離さずに怒鳴つた。

「伊津留。先に行つて、路地から抜け出せるかどうか、試してみろ！」

その声に尻を蹴飛ばされるように、俺は路地の奥へと駆け込む。ここを曲がれば、道を通り向けようとした瞬間、すごい勢いで何かに弾き飛ばされる。

「つてー。んでだよー！ 何で出られねえんだよ、この野郎！」「ばんっ！」と両手を何もない空間へ叩きつける。見えない壁となつた空間は、断固として俺を拒んでいる。

「おい、シェラ！ どうなつてん！」

わめきながら振り返つた俺の目に飛び込んできたのは、朱に染まつた肩を押さえ、しゃがみこんだシェラの姿。

奴は、シェラと俺の間にいる。逃げられないのを知つていいのか、弱つていてる方を先に片付けてしまおうと決めたらしい。

あの蛇が厄介だ。でも、何とかせんと……。何とかなるのか？ キヨロキヨロと周囲を見回し、転がっているビール瓶を発見した。それを拾い上げると、いきなり相手にブン投げる。と同時にダッシュ。

結構な勢いで飛ぶビール瓶を、空中で器用に蛇がよけている。その間に俺は自己最高記録を更新すべく、全力で奴の脇を走り抜け、相棒の許へ辿り着いた。

日常の崩壊……寸前？（前書き）

俺の頭は理解能力を超えた出来事の連続にパンク寸前！
誰か、俺を助けてくれ～い～い～！！

「ショーラッ！　お前、怪我　　」

側に膝をついた俺を見て、ショーラが怒声を上げる。

「馬鹿っ！　何で戻ってきたんだよっ！？　お前だけでも逃げてくれりやあ良かつたのに」

むつ。おめえ、また俺の事、馬鹿呼ばわりしやがつたな？

「人の事だと思って、馬鹿馬鹿言つてんじゃねーぞ、この馬鹿！見えねえ壁があつて、その向こうにや行けねえんだよ！」

思わず、ショーラの胸倉を掴みそつになつて、両手を握り締めると、ジリジリと近づいてくる奴をにらみつける。

「もしも何もなくつたつてな、友達置いて俺一人だけで逃げるなんて、出来るはずねえだろうがっ！」

「　悪い。サンキュー」

しかし、この状況を何とか打開しなければ、話が先へ進まない。

唾液と唸り声をこぼしながら、一步一步近づいてくる“死”的姿。くつそー。せつかく生き返ったんだ。こんなトコロで死んで堪るか！

「おお。死んでなんかやるもんか」

そう言葉に出した途端、バクバクいってる心臓とは別に、自分の内部で脈打つモノが生まれた。

死ぬもんか、死ぬもんか、死ぬもんか　　。感情と共に、圧力が高まつていく。

「ふざけるな！　貴様みたいな、訳の分からねえ奴に、くれてやる生命はねえっ！」

限界点まで達した圧力は、純粹な「力」となつて暴れ狂う。俺をぶち壊して飛び出そと、熱を持つて高まる圧力は膨れ上がり、とどまる気配はない。ふらついて思わず体を支えようとした手が、シエラの体に触れた。その瞬間、まるで電流のよつて、俺の心を得体の知れない痺れが疾走つた。

一気に背骨に沿つて駆け上がり、額の一転に集中する。あの、ナンとかチャクラ、「第三の眼」のある部分だ。凄まじい勢いの「力」と「熱」が、俺の額に集まっている。

負けたくない。死にたくないと繰り返す心が、奴をにらみつける目の前が、真っ白に弾け飛んだ。

ああ。もう駄目だ。抑え切れねえ。

「う、おおおおおお

喉が張り裂ける程の叫びがほとばしる。「力」と「熱」の奔流が、額を突き破つて溢れ出る。

白く霞んだ俺の視界に、自由になつた「力の矢」が真っ直ぐ伸び上がり、空中の壁を貫いて飛び去るのが見えた。壁は貫かれた部分から亀裂を生じ、粉々に碎けて消滅する。

「見えない壁」 であるにも関わらず、それが消え去つたのを感じる事ができた。なぜか俺には、感じ取ることが出来たのである。

「 結界が、開いた」

シエラの内部から何かが俺に流れ込んできたのと同じように、俺の内部からも何かがシエラに流れ込んだのだろう。シエラの髪と瞳が、本来の色を取り戻して輝いている。

この路地一体を閉じていたはずの結界が破れた事により、己の不利を悟つたのだろう。怒りで体毛を逆立てながら、ダツと地面を蹴り付け、妖獣が迫つてくる。

立ち上がるうとした膝が、情けなくも碎けた。ゲツ！ どうすんだよお。もお、体が動かねえじゃねえかー！

不意にシエラが動いた。左肩の怪我を押さえていた右手を離すと、目の前で何かの形を描く。血まみれの右手が動いた跡に、ほの蒼い光の残像が灯る。

「 ふつ！」

鋭く、短く息を吐くと、人差し指に中指を揃えた右手を突き出す。空中に描かれた印がシエラの指の軌跡を辿り、妖獣に絡みついた。

「 もやおんつー！」

網のよう広がった輝く模様が、妖獣の身体を捕縛している。

「ぐるるる……」

狂ったように頭を振り回し、何とか自由にならうともがく獣を、俺は呆然と見ていた。

「なんだ？ 一体、今、何が起こったんだ？ どうしたんだ？」

「シリ・ルーは銀の髪を振り立て、金の瞳を天に向けて叫んだ。

「真砂お！ 聞こえてるんなら、来てくれ！ 俺達はここだ！」

俺は一瞬、怪我のせいがなんかで、シリ・ルーがおかしくなったのかと思った。悪いけど、マジでそう思つてしまつたのだ。いくら近いとは言つても、声が届く距離じゃない事は確かだ。しかし、俺にはそれ以上のことを考えている暇はなかつた。なぜならば。

奴がシリ・ルーの戒めを解いたからだ。こいつ スゴすぎだぜ。

「伊津留！ 手を伸ばしてっ！ 上です！」

頭上から、どうしたわけか真砂の声が降つてくる。深く考える以前に、身体が言葉に勝手に反応した。虚空へ向かつて伸ばした腕を、誰かの力強い腕が掴んだ。体を引き上げられる、ぐんつ、という上昇感。

「今晚は。いい月だね、伊津留」

真砂がいる……空中に……浮いている……俺の目の前に……ちなみに、俺も。

俺も？ 余計な事を考えてしまつた俺は、ヒヨイと下を見てしまつた。

「ど つ、ああああっ！」

「駄目ですよ、暴れないで！ あいつの鼻先に落としちゃうかもしれませんよ」

もちろん「あいつ」とは例の妖獣の事だ。真砂の腕にヒシッとしたがみつくと、涙目で首を縦に振つて見せた。

「よし。今のうちに、店の方へ避難しましよう」

バサッ。ピンと張つた布を振つたような、風を叩く音がすぐ側で

聞こえる。

再度、俺は真砂を見上げて田を剥いた。

「ま、真砂」

「はい、なんでしょう?」

「バサツ、バフツ。

規則正しく夜空を打ち付けているのは……。

「あんた、それ……翼……なのかな?」

「ええ、そうですよ」

もしもし? ニッコリと笑っている場合か? なんでしょう? いやないだろ? そうですよちやねえだろ? ?

広がる夜空の闇よりもなお深い。漆黒の翼、蝙蝠いのちつばつの羽。力強く羽ばたく巨大な翼は、俺達一人分の体重をしつかりと支えている。何か言いたそうに口を開いた俺を見て、

「質問は後で。今は問答している場合ではないと思っているんですが」

「……はい。その通りです」

不承不承ではあつたが、口を閉じる。確かに、そんな場合じやないですね。何といつても空の上だし。奴の上だし。

しかし、何かが……えっとお何だっけか? おあつ!

「まさ?」まさ?」、真砂!」

「一回呼べば、分かりますよ。何ですか?」

真砂に抱きかかえられた、かなりカツ「悪い姿で俺は喚ぐ。

「シエラは? あいつはどーすんだ?」

雄雄しく上下する翼が大気を打つたびに、グンッと体が前進する。

「大丈夫ですよ。後からちゃんと来ますから。それにいくら何でも、二人抱えては飛べません」

黒のスラックスと白いドレスシャツ、アスコット・タイの美青年が空を飛ぶ。長めの髪を風に流し、闇より黒い蝙蝠の翼で。

「だつて、あいつ怪我して」

「大丈夫ですから。よっぽどの怪我じゃない限り、ちゃんと店まで

来ます」

そこまで言い切られちゃうと、後が続かないよなあ……。やつと口をつぐんだ俺を連れて、真砂は空を急ぐ。どこをどう辿ったのか、よく覚えていない。俺つてば、気が動転してたしね。気付いた時には店の前だった。勧められるままに店内へ入り、カウンターへ座ると、奥でコーヒーを淹れ始めた真砂の手元をボーッと見ていた。思考がまとまらない。

「力チャ……ン。

ただ消費する事を目的としているかのように、何本目かの煙草をくわえた俺の目の前に、真砂がカフェ・オ・レのカップを置いた。

「あ。サンキュー」

火の点いていない煙草を灰皿に置き、カップに口をつける。いつもより甘めだ。

昼間はほとんど客の入らない喫茶店だが、夜ともなれば話は違つてくるようだ。奥のテーブルから順に埋まつていくのか、店には結構な客がいた。特に騒ぐでもなく、静かに酒を飲んでいる客の姿が、この「仮面舞踏会」という店にふさわしい。

「伊津留？」

「ん？」

再度、煙草の消費を開始した俺に、真砂が声をかけてくる。質問したいことは山ほどあった。けど、何から聞いていいのか、よく分からん。

「んな、真砂」

カウンターを回つて、隣のストウールへ腰掛けた真砂に声をかける。

「この店つてばさ、『どこの』あるんだりう？」

とりあえずは、無難なトコから攻めていい。いきなり本題には入りづらい……。

自分はウイスキーの入ったグラスを片手に、『ジョーカー』に火を点けた真砂は、深いため息と一緒に煙を吐く。

私の店は『こちら』と『あちら』の狭間。どこでもあり、どこでもない場所に存在しているんですよ

はい？ 何ですか？ 聞かなきや良かつた。俺の顔を見て、ちつとも理解できていないのを察した真砂が、噛み砕いてくれる。

「つまりね。伊津留が普段、日常生活をしている空間と、この店のある空間は別々なんです。縦横に広がる無限のパラレル・ワールドの全部に存在し、それと同時に、全部に属さない所なんですよ、こ

こは」

「だつて、初めて来た時に、女の子が来ただじやん。あれは？」

「彼女が、この店の存在を望んだから。心をなぐさめる場所が必要だつたからです」

楽しい時、満たされている時には見つからない。でも悲しい時、寂しい時にはすぐに見つかる。そういう店なんです。

あの時に真砂が言った言葉の意味がやつと、俺にも分かった気がした。

「でも、俺とショラは何でもないのに来れるぞ？」

それでも食い下がる。しつこいのだけが、取り得なんだから。

「でも、嫌われるんだよなあ、『レ』。

「それはショラがいたからですよ」

「うつ。気がついてはいたけど、『ひまつときつ』と言われちやうと、ちつとショックだいね。

「なら、普通の『人間』は来れない訳？」

「ええ。特別な時以外は」

「俺も普通なんですけど？」

「伊津留は大丈夫ですよ。安心してください」

安心ねえ……。俺は店の奥をクイッと右手の親指で示した。

「んじや、あっちの客は？ 普通じゃない訳？」

時空の迷子たち（前書き）

少しずつ明かされていく、不思議な物語。
どうして信じればいいんだろう？

真砂はちらりと視線を流し、眞面目な顔をして俺の方を向いた。
「お話するのは構わないんですが、聞くからには、信じてもらわなくてはいけません。今から話す事を、信じきる自信がありますか？」
自分の話す事を無条件で、何も言わずに信じる。それが出来なければ、教えるわけにはいかないと言う。

「彼らは、大切な私のお客様です。客の事を安易な好奇心だけで探られる訳にはいかないんですよ、私の立場として」

それはそうだ。もつともな話である。俺だって、本も読んだ事ないのに、モノカキだというだけで近寄つてくる連中は、大嫌いだ。
しかし、ここまで関わった以上、『やつぱ、や～めた』つてのは
いただけねえよなあ。

「信じるよ」

毒を喰らわば皿まで。シェラの事を知りたければ、真砂の、この連中の話を信じなければ。根拠はないが、この直感は外れない。静かに俺を見ていた真砂がただひと言、わかりました、とだけ答えた。
その頃になると、店内もやや活気付いてきている。顔見知りに声を掛け、酒を勧めて話し込む客が増えた。

「いいですか、伊津留。これから言う事を、絶対に笑わないで聞いてください。もしもあなたが『そんなの嘘だ』と思った瞬間に、この店はあなたを『排斥』します。今後一度と、この店を見つける事は出来ません」

そう言いおくと、一番奥のテーブルを真砂は指差した。

「隅のテーブルに、サングラスをかけた青年がいるでしょう？」
店の中の一番薄暗い場所に「彼」はいた。こんな夜に、しかも店内でサングラスとは、目が悪いのか？

「彼は“バジリスク”です」

バジリスク 王冠を持つトカゲ。蛇族の王とも言われる伝説の

生き物。雄鶏の産んだ卵をヒキガエルが温めると、この生物が孵る
とされている。視線が合つと石になり、その毒は岩盤にさえ穴を穿
つ。

仮にも、ファンタジー小説を書こうかという小説家のハシクレで
ある。ある程度の知識はあるのだ。

だが、しかし “バジリスク” う？ いや、いかんいかん。 “
排斥” されてしまう。つまりは、この店への永久出入り禁止を申し
渡される事になる。そいつは嫌だ。やはり、「石化」を防止するた
めのサングラスなんだろうか？

「そつちの彼女はバンシー、もう一人はセイレーンです」

茶色のワンピースを着た髪の長い沈んだ表情の女性と、派手な化
粧の女性が話し込んでいる。

バンシー。死者が出る夜に、いざこからともなく聞こえくる女の
泣き声。その親族に替わって悲しみの声をあげる妖精。そしてセイ
レーン。海に棲まう魔女。甘美な歌声で船乗り達を惑わし、海中へ
と引きずり込む女怪。

「左目を前髪で隠している男性は“邪眼”。ボトル三本目に掛かっ
ている彼は“狼男”です」

あ、頭の中が、グールグル。

「危なくないのか？」

真砂は少し暗い目をすると、

「ええ。例えば、あの“バジリスク”的ですが、昔、一人の女
性と恋に落ちました。しかし、彼女は彼の瞳を見て石になってしま
つたのです。悲しみにくれた彼は、その時に自らの両眼を潰してし
まいました」

フィルターぎりぎりまで短くなつたジョーカーをもみ消し、次の
一本をくわえる。

「ほい」

「ああ、どうも」

真砂の煙草に火を点けると、自分もキャビンに火を点ける。

「バンシーは開発によって森を追われ、彷徨つてゐるうちに戦場に出てしまつたんです。堪りませんよね。死人の出ない夜はないんですから」

バンシーが泣くから、人が死ぬのではない。人が死ぬからバンシーが泣くのだ。この妖精はその不吉な使命とは別に、心優しく大人しい妖精なのだ。近く死者の出る事を予知し、常に闇の中に姿を現す。

そんな妖精が戦場へ迷い出たら……。人の死なない夜はない。狂つたように泣き叫びながら、バンシーは必死に探したに違いない。嗄れた喉を潤し、迷い疲れた足を休める事が出来る場所を。何より、死者の気配のない場所を。

「セイレーンはご存知の通り『海の魔女』です。が、今の海のどこに一体、彼女達が棲むことが出来る場所があるのでしょうか？ 清浄だつた海は汚され、掘り返され、埋め立てられていく。実験と称した核の使用で、彼女の仲間達は死んでいきました。座礁したタンカーから流れ出した重油に汚され、消えていった仲間もいたそうです。そして彼女は一人になつてしましました」

「探そつとはしないのか？」

聞き返した俺に、真砂は煙と一緒に答えた。

「皆、彼女の目の前で死んでしまつたんです。探せばどこかにいるのかも知れません。でも、彼女は探さないでしよう。期待が大きい分だけ、失望した時の傷も深いのですから」

そりや、そりやう。

「この店はね、行き場のない、帰る場所のない者達のためにあるんです。彼らも昼間は、人に混じつて生きています。だけど夜だけは、本来の姿に戻れるんです。だからこの店の名前は『仮面舞踏会』なんですね」

仮面を被らなければ生きていけない彼らのための店。帰る場所はなく、行き着く場所もない。そして、彼らをそのような境遇に陥れた大筋の理由は「人間」という、巨大で貪欲な化け物だ。共存して

いたはずの彼らを「迷信」や「御伽噺」として闇の中へ退け、自分達だけが地上の覇者のような顔をしている。

真砂はストゥールから立ち上ると、カウンターへ戻り棚から酒瓶を降ろす。

「何にしますか？」

「じゃ、モスコミュール」

そう強くないカクテルをオーダーして、煙草の消費を再開する。遅い。仮面舞踏会に来てから、結構時間が経つた。なのに。

「遅い……」

思わず呟いた。

ロング・グラスが目の前に置かれる。目に優しいグリーンのカクテルが落とされた店内の照明に映える。

顔を上げると、視界の隅で何かが動いた。何気なく視線を移動させると、カウンターの陰から一頭の大型犬が現れた。そのままヒヨイとストゥールに飛び乗る。なかなか器用じゃんか。

室内の照明に銀色の毛並みが美しい。ハスキー犬かな？

俺がじつと見つめているのに気付くと、トバーズの瞳を煌めかせて振り向く。

「俺の顔に、何か付いてるかい？」

「あ、いや、別に」

慌てて返事をし、視線を逸らして一呼吸。え？ 何がどうだつて？

首がモゲる程の勢いで振り向いた俺は、真砂から深皿に水をもらつていてる“犬”を見た。

「あ、あ、しゃ、しゃべった……？」

ぐりん、と皿玉を動かして“犬”は俺を見ると、ばくんと口を開けた。

「しゃべっちゃ、悪いのか？」

別に「犬がしゃべってはいけない」という法律はない。従つて、

俺の隣の腰掛けたこの犬が、鳴こうが喚こうが、何も悪いこたない。しゃべろうが、叫ぼうが、歌い出そうが、構うこたあないのだ。だ・が　だが、なのだよ！　なぜだ！　なぜなんだ！

しばらくの間硬直してしまった俺は、グラスの触れ合ひ音にハツと我に帰る。

「し、失礼。言葉を話す犬を見たのは、初めてだつたものですから

」

ギクシャクと言い訳をする俺に對して、その犬はこう宣下した。「当たり前さ。話す犬がそこいら辺にゴロゴロしてたら、うるさくて堪らんぞ」

確かに、その通りだと思つ。

深皿の水に口を（舌を？）つけながら

「あんた、名前は？」

「う、一。犬にあんた呼ばわつされてるしよお。悲しいなあ。

「　萌木伊津留です」

「ほうん。俺はガル。ひとつ頭のケロベロスだ。よろしくな、新入りさん」

地獄の番犬ケロベロス。三つもしくは九つの頭を持つ、巨大な犬。その鋭利な牙で死者の魂を引き裂き、舌には猛毒を持つ植物が生えるといつ。

ぱぱぱっとフラッシュの如くに、言葉が脳の表面を駆けていく。

「不思議そうな顔してんナ。なんでケロベロスなのに頭が一つキリつきやねえのか、つてな」

トパーズの瞳を細めて、口を大きく開く。赤い舌がダラリと垂れ下がる。もしかして、笑つてるつてやつか？

「普通、俺達の一族は複数の頭を持つて生まれる。なのになんでか、俺だけがひとつ頭のままで生まれてきちまつたのさ」

深皿の水は飲み干したらしい。

「当然、群れの中にはいられねえ。居場所がないんさ。そんで、出てきちまつたんだわ」

店内をグルッと見回すと、鼻を突き出す。

「真砂つて、一体……？」

「何に見えますか?」

「もしかして、吸血鬼とか言つてか？」苦笑しながら、煙草をくわえる。

「はは。当たつです」

事も無げに、あつさりと認めて下さる。「神秘」とか「不思議」とか、一切関係ねえつ！ って感じだ。

俺はポカーンと口を開けたまま、真砂を眺めていた。よつぼど間の抜けた顔をしていたんだろう。ガルが俺の腕を鼻先でつついてくれた。ハツと気がついて、口の端にぶら下がっていた煙草を慌ててくわえ直す。

左手が、無意識に頸部をなでていた。

「じゃあ、真砂も、その……吸う訳？ 血

時。恐る恐る尋ねる俺に苦笑しながら真砂が答へよこした。その

ガロロロソッ ガロソッ！

けたたましい音を立てて、ドアが開いた。店内の視線が、騒音の二掛けられる。

主に向こう側

「よお。水、くんねえ？」

ドアにもたれて弱々しく笑っているのは、置き去りにしてしま

またたわが相棒、シェリ・ルーその人だつた。

**

「何だ、伊津留。お前つてばシェリ・ルーの知り合いだつたんか？」
カウンターにかけた前足にアゴを乗つけて、ガルが俺に話しかけてきた。

「ん。知り合いつてか、何て言うのかね。一緒に住んでんよ。まあ、やつの大家さんでトコかな？」

氷が溶け出して薄くなつてしまつたモスコミュールを飲みながら、ガルに答えた。

「ホウ。あの真砂が珍しく『人間』なんぞをかまつているから、どんな奴なのかと思っていたが。なるほど、シェリ・ルーの知り合いだつたとはね」

「ホウ。あの真砂が珍しく『人間』なんぞをかまつているから、どんな奴なのかと思っていたが。なるほど、シェリ・ルーの知り合いだつたとはね」

キャビンをくわえて、ガルに視線だけを移しながら、いつの間にかタメ口になつてしまつてている俺は

「何？ 真砂つて、普段『人間』相手にしてない訳？」

「昼間は別だぜ。でもよ、この店 자체が人間の目には映りにくいんだ。夜になつてから店に人間がやつてきたことは、俺の知る限り、今夜が初めてだ」

ガルはクフウンと鼻を鳴らすと、ショラの手當てに忙しい真砂をチラツと見る。

「あのな、伊津留」

長くなつた灰を灰皿に落としながら顔を上げた俺に、ガルは続けで言う。

「真砂はよ、人の血なんか吸わないから安心しな。それに、たとえ奴に血を吸われたつて、吸血鬼にはならねえよ」

え？ 何？ そんな事つてある訳？

「奴は吸血鬼の持つ属性を、何一つ持つて生まれてこなかつた。陽の下を歩いても塵にならない。血を吸つても、相手は吸血鬼にはならない。十字架もニンニクも効かない。まあ、心臓に杭を打たれても生きていられるかどうか、奴にも自信はないと思つけどな」

俺つてば思うのよね。吸血鬼じやなくつたつて、心臓に杭打たれたら死んじまうんじやなかろうか？

「死ねない吸血鬼つてのも、寂しいモンだよなあ。真砂も俺も、自分の同族から弾き出されたんだ。『自分と違う』 それだけの理由で他者を追い詰めるのは、何も人間に限つた事じやねえ。その寂しさは……」

一瞬言葉を切つてから、俺の方を見る。

「シェリ・ルーも例外じやない」

「ガルツ！」

傷を洗つた水を取替えてきた真砂が、キツイ口調で話しをさえぎる。

「ガル！ それはシホラの問題です！」

テーブルの上にアゴを乗せたまま、上目遣いに真砂を見ながら、ガルが口を開く。

「おおさ、こいつはシェリ・ルーと伊津留の問題だよ。けどな、誤魔化したままつてのは、いかがなもんかねえ？」

消毒したシホラの傷にガーゼを当てながら、真砂も負けてはいない。

「だからといつて、あなたが勝手に話していい理由にはならないでしちゃう。私自身に事ならともかく。。。シホラにだつて、都合というものはあるんですよ」

言つときやあ言つ奴だつたのねえ、真砂つてば……。

「馬鹿か、オメーは？ 五百年も生きてて、脳みそ、干乾びてんじやねーの？」

ゲッ。。。ガルもキツい事言つなあ……。

「いいか？ 伊津留は普通の人間だぞ？ 僕達と違つて『寿命』つてもんに支配されてんだ。シェリ・ルーの都合なんぞに付き合つてたら、あつという間にジジイになつちまつよ」

「それによお。ここまで聞いちまつてんのに、『』に『』までの話、全

部チャラね』つてやたら、伊津留の奴キレるぞ』

ああ、確かにその通りだ。これ以上ない程、好奇心刺激されてんのに『お預け』くらつたら、店ん中で暴れるぜ、俺。

「伊津留はどうなんだよ？』

それまで口を閉ぢして、いた当の本人が、よつやつと話しかけてきた。

すっかり短くなつちまつた煙草を灰皿に押し付けると、新しい一本に火を点ける。深く煙を吸い込むと、流れる紫煙ごしにシェラを見る。しかし、何本目だコレ？

「ここでお前さんの事を聞かなかつたら、多分この先ずっと、俺はお前に聞き出せないと思つ。そしてお前も、今言わなかつたら、このままはぐらかす氣でいるんだろう？」

トソンッと灰皿の縁に煙草を当てて灰を落とす。

「そのうち、何も言わないまま、黙つていなくなるつもりでいるんだろう？」

シェラの肩がピクリと動く。左肩に巻いた包帯の白が皿に痛い。「ほらな。……話しちまえよ、シェラ。お前が何者だろうが、俺は一向に構わんや。正体隠して、黙つていなくなるな」

シェリ・ルーの無事な方の肩をぽんぽんと叩き、真砂が静かに言う。

「シェラ。伊津留も、ああ言つてくれています。話してしまつた方がいいかも知れませんよ」

しばらくの間、周囲に沈黙が落ちる。

「あのな、伊津留」

「お？」

「もしも、俺が本当の事を話して、それで、俺の事が嫌になつたら。そつしたら、遠慮しないで言つてくれよな。お前のト「口、出て行くからや」

あ、俺、イライラしてきた。残りのカクテルを一息で飲み干すと、少々力を入れてカウンターへ戻す。

ダンツ。

ゲッ。予定より力入れ過ぎちゃつた。割れてないよな、グラス…

「俺なあ、お前の事、スゲー好きだよ。何かもう、ずーっと前から付き合つてるみたいに、シェラの事気に入つてるんさ。けどなあ、お前のそういう、ウツダウダしてるト「なあ、メチャメチャ嫌いなんだよ」

俺がいいつて言つてんだから、それでいいんだよ。いちいち悩む事あねえんだ。

想いをそのまま視線に乗せて。そして、静かにシェリ・ルーが語り出す。

「『アズラエル』って、知つてるか?」

ほほう。やはりそこから攻めてきましたか。

「少しほな。『死の天使』とか『沈黙の天使』とかつてんだろ?」

煙草をもみ消す。今日は、もうヤメとこうか。

シェラはフイツと横を向くと、小さくこう言つた。

「俺がその『アズラエル』なんだよ」

フウアサ。

優しく空氣を震わせて、シェリ・ルーの背に華が咲いた。力強く優美に風を伴うであらう、その華は 四葉の翼。
雄雄しく羽ばたき見る者を魅了するその華は 鮮やかな紅。

**

「彼」は、闇の中に身を横たえていた。身体中がジクジクと、鈍く

痛みを訴えている。すでに大半の傷は塞がっているといふのに。「彼」は不機嫌に唸りながら、闇の奥をにらみ付けている。しかし、その目には闇以外のモノが映っている。

思い出すのは数日前の出来事。「食事中」だった「彼」の目の前に、二人の人間が現れた。「彼」の脆弱な思考回路には、せいぜい楽しみが増えた程度の認識しかなかつた。

しかしこの二人組みは、「彼」の「食事」の邪魔をした上に、「彼」が張り巡らせておいた結界を碎き、こともあるうに「彼」に傷まで負わせたのだ。

身体中の傷を塞ぐのに一日。千切れた尾を再生するのに一日。黒髪の人間が逃げた後、銀色の髪をした奴が放つた、強烈な光に焼かれた網膜の再生に一日。

その間、動き回る事も「食事」をする事も、「仕事」をする事も出来ない。空腹で目が眩む。飢えて怒りが燃え上がる。まるで数千の虫に、身内を食い荒らされていくようだ。

もつと力が必要だ。もつともつと、強さが必要だ。知恵もつけなくてはいけない。学習しなくては、奴等の裏をかくことは出来ない。憤怒の炎を瞳に浮かべながら、「彼」は思い描いていた。

銀の髪の男と黒い髪の男、二人の姿を。

眠れぬ夜の不思議な話（前書き）

シェリー・ルーの爆弾発言から一週間。

つかの間の平和は、これから来る嵐の前の静けさなのか？

疲れぬ夜の不思議な話

「うーみゅ……」

東の空が、わずかに色を変え始める時刻。アパートの周辺も、部屋の中も、まだ静かである。

時計の針は、午前四時五十分を指している。

くそっ！ いつもなら、こんな時間、布団に包まって夢ん中だぜえ、ちくしょーっ！ 何が悲しくてこんな時間まで起きとかなかんのやああ！

腹の中で雄叫びをあげている俺は（さすがに、本当に叫ぶ勇気はない）、別に突発性不眠症になつて、疲れぬ夜を悶々と過ごしている訳ではない。

机の上に頬杖をつきながら、「コーヒーの飲み過ぎでタポタポの腹と、万有引力の法則に従がつて落ちてくる目蓋まぶたと鬪いながら、無常に時を刻み続ける時計に急かされてパソコン・モニターとにじみ合つてているのだ。

疲れない事に関しては、不眠症と似たようなモンか……。いや、やつぱ違うか……。

どうも締め切り間近になると、俺の理性は荷物まとめて、トンズラっこくらしい。

締め切りは刻一刻と迫つているのに、パソコンのモニターに映し出された文章は、夕辺打ち始めた時から比べて、進歩を見せた後がない。

まずい……ひつじょうへへへに、マズイ！

アップは明日の十時だぞ（本当は、今日の十時だった）。担当さん拌み倒して、せっかく延ばしてもらったのに、意味がないい！ ヒイイイー！

机の上に放り出してあつたキャビンの箱を引き寄せると、一本抜き出す。を？ 最後の一本だ。しゃーねーなあ。

煙草に火を点けると、パソコンの電源をOFFにして立ち上がる（「いつぺん、電源を入れたまま出掛けたら、しこたま怒られた」）。

どうせ、座つても何も出てこないんだ。気分転換を兼ねて、煙草を買いに行ってこよう。椅子に引っ掛けたジャケットを片手に、玄関へ向う。少しばかり立て付けの悪いドアを、なるべく静かに開けて外へ出る。しーっ、うるさいよ、ドア。もちろん、眠っているシェラを起こさないよとの、心配りからだ。

ちなみに俺が徹夜で仕事をする時は、奴は俺の代わりにロフトで眠る。普段はリビングのソファーベッドで寝ているのだが、俺が無理やりに移らせた。いくらなんでも、夜っぴいて灯っているスタンドと、神経を逆なでするキーボードのクリック音の傍らで眠らせるのは気が引ける。これでも同居人には気を使っているのだ。

ドアに鍵を掛け、まだまだ暗い通りへ出た俺は、ブルツと体を震わせた。表は結構冷えている。せっかく外へ出たんだ。予定変更。自販機やめて、コンビニにしよう。おつ買い物、お買い物～

自己主張を続ける自販機を無視して、近所のコンビニへと足を向ける。

「はーう。平和だねえ」

煙草の煙を吐き出しながら、ぼつりと呟いてみる。声は静かな通りに吸い込まれていった。

衝撃の事実！

『俺つて、実は天使なの！』発言をシェリ・ルーがブチかましてから、早くも一週間が経過した。

田の前に広げられた翼は四葉、いずれも鮮やかな紅。

この色は、俺に下された罪の色だ。

シェラはそう言つて、顔を伏せた。どうやら本人は、気に入つていないらしい。

ふうん。綺麗じやん。

俺は珍しく、漢字で発音してやつた。

キ……レイ？ この翼が？

信じられない事を聞いた、とでも言つよつてショリ・ルーは目を見開いている。

「なあ、シェラ。お前はその羽が嫌いみたいだけだな。どんなにお前が嫌がつても、そいつはお前の背中についてんだ。取つちまう訳にはいかないんだろうが？」 したら、諦めて認めちまつた方が楽だぜ。この翼も自分の一部だつて。

何か、スッゲー恥ずかしい説教してる、俺。でも、マジでシェラの翼は綺麗だと思ったんだ。

コンビにのドアをくぐり、かごを片手に店内を物色する。この一週間、例の「謎の大型獣事件」がなかつたためか、こんな時間にも関わらず、チラホラと人影がある。

かなり傷を負つたはずだから、しばらくは動けないと思つ。まあ、あくまでも希望だけどな。

結局、相手を仕留めることは出来なかつたが、しばらくの間、再起不能にするくらいは出来たといつて事である。あんなゴツイ奴とやりあつたのだ。それだけでも、大したものだと言わねばなるまい。事実、シェラだつてあれだけの傷を負つたのだ。ちょっとやそつとの事では、倒すのは難しいだろう。

あれもケロベロスの仲間だつたりするのか？

尋ねた瞬間、両肩にズシッと重しがかかつた。お、重い……。

「お前、俺にケンカ売つてんのか？」 あ？ 買うぞ、そのケンカ。

耳元で、ハアアアアと怒りの息遣い。

俺達ケロベロスは、誇り高い一族だぞ。まかり間違つても、人間なんぞ喰うかつ！

思いつきり怒鳴られてしまい、ひたすらに謝り続けたんだ。

せんべいにチョコレート。そういうや、朝飯までまだ時間があるなよし、おにぎり買おう、おにぎり。かごに商品を放り込むと、レジへ向う。そうそう、忘れちゃいけない。レジの横に置いてある、五箱入りのキャビンを手に取つた。

「いらっしゃいませ～」

バー「コード・スキャナー」を手にした、愛想のいい兄ちゃんが立っている。ジーンズの尻ポケットから財布を出していると、声をかけられた。

「あれ？ 伊津留さん？」

「んあ？」

顔を上げると、レジの兄ちゃんと目が合った。

「やっぱ、伊津留さんだ」

兄ちゃん、人の良さそうな顔でニーパニーパ笑っている。誰だっけ？ 自慢じゃないが、俺は人の顔と名前を覚えるのが苦手なのだ。

「お、真砂んトコの」

そーか、そーだ。『仮面舞踏会』の客で、確か狐の妖怪（あの店は、東西入り混じってんですわ）とか言ってたっけ。

「どうしたんですか、こんな時間に？」

レジには、俺以外に客はいない。会計を済ませて、財布をしまいながら世間話なんぞしてみる。

「彼女とケンカして、部屋を追い出されたとか？」

「いらっしゃい。

「馬鹿者。仕事だよ、仕事。徹夜明けの買出しを」

妖怪が一四時間営業コンビニの深夜アルバイト。情けない話だが、これが現実。この世界で生活する者には、人間だろうが妖怪だろうが、「金」という必要不可欠なアイテムと、住むべき場所が等しく要求されるのだ。

もはや、夜の闇に紛れて などという、古き良き時代は去った。人間にはより快適に。それ以外の者のは、より過酷な条件を提供する。そういう世界になってしまったのだ。

他愛のない世間話をしてから、レジを離れる。その背中に声が掛けられた。

「ああ、そうだ。シエリ・ルーに言つといつださい。例の件、動き出したら知らせますから」

俺は右手を挙げて応えると、コンビニを後にした。買つたばかり

の缶コーヒーを開けると、一口飲んで両手を暖める。

結局のところ、『アズラエル』って何なんだよ？

俺の問いに視線を落とし、緋色に輝く翼をたたむ。

人間に“死”を運ぶ者。天界に居ます者にして、もつとも“魔

”に近い者。もつとも忌むべき災厄の種子……。

ものスグー言われようだよなあ。仮にも「天使」なんだぜ？ 初めて真砂に会った時、なんで奴があんなに“天使”にこだわつていたのか、ようやく分かつた。

そこで？ なんで人間界にいるんだよ？ 天使なんだから、天界とやらにいるんじゃないのかよ？

一番気になつてたのは、そこんトコだ。シェラは、俺が死にかけていた時「事情があつて」と言つた。その事情については、何一つ聞かされていない。

そこまでは……。あまり深入りしないほうがいいだろう？

飲み終わつた缶を袋にしまいなおすと、静かにドアを開けた。シェラはまだ眠つているらしい。ガサガサとうるさいビニール袋をテーブルに置くと、お握りのパックを引っ張り出す。このビニールの音つて、すつごい響くのな。あ、忘れないうちに、空き缶は捨てなくては。分別、分別。ちゃんと捨てないと、絶対、やり直しさせられるんだ。

パソコンの脇に置いてあつたカップを覗き、底の方で冷たくなつてゐるコーヒーを飲み干すと、新しく淹れ直す。

どうせここまで関わつちまたんだ。今さら、隠し事はなしにしようぜ。

俺の言葉に、シェラは眉根を寄せた。まだなにやら悩んでいるらしい。その迷いを断ち切ることが出来るナイフを、おそらく俺は隠し持つてゐる。

なあ、シェラ。お前さあ、金髪をここらへんで、こいつ（肩の辺りで手を動かし）ナナメにカットした、緑色の眼えした、むつちやくちゃタカビーで、ど派手な兄ちゃん知つてるか？

「ちいち強調してやる。いきなりの事だったの、じばし四惑つ
シェリ・ルー。」

え？ あ、ああ。知ってる。

ツナのお握りを頬張りながら、パソコンのスイッチをONにする。

「やっぱ、お握りにはお茶ですかねえ？」

ぶつぶつ言いながら、コーヒーを一口すすり、ディスプレイに目

をやる。

そいつの名前、何でーの？

まだよく事情の飲み込めていないシェラは、不思議そうな顔をしながら答えた。

第五天の天使長サンダルフォンの部下で、プリンシパリティーズ権天使のアフィエル

だけど？

何か、とってもマニアックな解答なんですか？ マオン？ サンダルフォン？ どつかの携帯電話会社か？ プリンなんだってえ？ とツ散らかつた資料の山を揃えなおし、ディスプレイに向づ。

あ、それはおいおい説明するけど……って、えええ！？ 何で伊津留がアフィエルの事知ってるんだよ！？

遅い……遅すぎるよ、シェリ・ルー君。君、反応が鈍いね。やれやれ。

会つたんだよ。ま、正確には、脅されたんだけどね。

「よし、とにかく設定いつてるトコまで、気張つて書いちまおう」時計は五時四十分を指している。何とかせねば。

会つた？ アフィエルに？ 何か言わただろ？ 変な事言われたろ？

興奮しまくりのシェラを静かにさせると。

お前、野郎の事知ってるみたいだから言つけど、俺がお前の事『何も聞いてません。ボク、何も知りません』つつって、素直に認めてくれると思うか？

さすがに、シェラも理解したようだ。そうなのだ。そうせ信じるような奴じやないんだから、こちらが内容を知っていた方が、動き

やすい事だつてあるのだ。

やつとの事で、シェリ・ルーが口を開く。

天から追われた時に、大天使ウリエルに半分に割かれた、俺の半身を捜しに……。

「ショラの半身か……」

俺は呟いて、煙草に火を点けた。

気の遠くなるほど昔、天を追われたシェリ・ルーは、自分の半身を捜し求めて地上を彷徨さまよつていた。幾度かは見つけ出したらしい。引き裂かれた己の半身を。ある時は樹木に宿り、ある時は岩に封じられ。人として生まれていた事もあつたという。

しかし、生きている時間が違ひ過ぎる。ショラに、厳密な意味での「寿命」は存在しない。目の前で、自分を置いて消えていく“生命”という名の灯火。その度にこいつは、あてもなく地上を流離う。だがその半身の魂も、ここ数百年の間、転生していないのだとう。捜し疲れて、中有一(あの世とこの世の中間……だとか)で休んでいた時に、俺と出会つたらしい。

考えてみりや、こいつの人生(天使生……?)淋し過ぎるかもな。

カコツ カコカコ カカカコツ カコツ

単調なキーボードのクリック音に乗せて、俺の思考が流れしていく。

恋慕と嫉妬の狭間（前書き）

忘れていたはずの心の痛み。

ビハビハ、お前の隣にいるのは俺じゃないんだ！？

恋慕と嫉妬の狭間

トウツ　トウルルルツ　トウルルルツ
静かな空間を電話の呼び出し音が鋭く切り裂く。夜間モードなので音は控えめだが、俺の考え方を中断させ、驚かせるには十分だ。誰だ？ こんな非常識な時間に電話なんぞしてくる無礼な奴は？ ハツ、ま、まさか、担当様ではあるまいか？

「　はい、萌木です」

「　

をい！ こんな時間にイタズラ電話ぢやねーだーろーなー？

「 もしもし？」

「 伊津つちゃん？」

棘を含んだ俺に言葉に、受話器の向こうから、消えてしまったそつな返事があった。この声は……この呼び方は……。

「 もしもし？ 美緒？ ネコちゃんか？」

頭の中に女友達の顔が浮かんだ。

「 どうしよお、伊津つちゃん。助けてよお。もう、分かんないよお

お

本橋美緒。俺の中学校時代の片思いの相手である。

「 どうしたんだよ？ 落ち着いて話してみる。今、ビニにいるんだ？」

？

電話の向こうで、彼女の細い鳴き声が聞こえる。

「 今、今ね。××総合病院にいるの。どうしよつ。一人が、一人が死んじやう」

上で、ショーラの起きた気配がする。

「 病院？ ひとりが？ 泣いてぢや分かんないだろ？ とにかく、そこにいる。今から行くから。××総合病院だな？」

ショーラが不安そうに見つめる中、彼女がうなずいているのが伝わる。電話を切ると、ショーラを振り返る。

「悪い。病院行つてくる。事と次第によつちや、彼女連れてくるから。何か軽いモン作つといてくれるか？」

「大丈夫か？ お前、徹夜明けだろ？ ついて行こつか？」

「ん、大丈夫だ」

すっかり冷たくなつてしまつたジャケットに腕を通すと、財布と煙草を突っ込んで車のキーを取り上げる。

普段、移動にはバイクを使つていたのだが、例の事故でおシャカにしてからは、車を使つてゐる。どつちにしたつて、美緒を乗せてくるんだつたら、バイクじゃ無理だし。

「じゃ、行つてくるから」

慌しくドアを閉めると、駐車場へ向つ。

倉田一人。通称ひとりは美緒の婚約者で、来年の春には挙式予定だ。そして、その事を考へるといまだに胸が痛む。忘れられない自分がいる。

まだまだ空いている道路に、ヘッドライトの反射が白々として、俺の気持ちを逸らせる。ステアリングをきる手が震える。煙草に火を点けて、深く吸い込む。

落ち着け、落ち着け。俺が事故つたら意味がない。落ち着いてくそつ！

××総合病院は、事故つた俺が目覚めた場所だ。エンジンを切るのももどかしく、病院内へ駆け込む。待合室の椅子に腰掛けていた女性が、俺の足音にパツと顔を上げた。美緒だ。

「来てくれたんだ、伊津つちゃん」

真つ赤に目を腫らした美緒がしがみついてくる。明るくて、クルクルと表情の変わるもの顔は、今はやつれて血の気が無い。

「ひとりは？」

震える肩を抱きしめながら、美緒に尋ねる。

「今、手術中なの。伊津つちゃん、一人が死んじゃつたら私、どうしよう」

不安気な瞳が見上げてくる。俺は自分の胸に美緒の顔を押し付け

ると、そつと髪を撫でた。棘が刺さつたままの胸に。

お前は俺の胸の中で、奴の心配をする、俺の胸で泣きながら、他の男の名前を呼ぶんだ。俺の心のどこかに、昏い炎が灯ったような気がした。「嫉妬」という名の炎が。

言葉にならなかつた想い。告げられずに終わつた恋。「好きだ」と言えずに、彼女の前から去つたのは俺。逃げ出したのは俺の方だ。俺に一人の事をとやかく言う権利は無い。

諦められた、と 忘れられたと思っていたのだ。今まで。
だが、現実は？ こんなにも、彼女が愛しい。こんな状況でなければ、俺は躊躇わずに美緒をかつせらつていただろう。

なぜ奴なんだ？ 筋違いだとは思つ。逃げ出したのは、自分なのに。だけど止まらない。止められない。なぜ？ なぜ、俺ではなく、お前の隣にいるのは奴なんだ！？

「伊津つちゃん？」

黙り込んでしまつた俺を美緒が覗き込んでいる。

「あ、ああ。何でもない」

彼女の肩に手をかけながら、手術室へと向つ。今は美緒に顔を見られたくない。恐らく俺は、とても醜い顔をしている。最高に浅ましい顔をしているはずだ。そんな顔を、彼女にだけは見られたくない。

「一体、何だつてひとりが？」

「先生の話では、大型の動物に襲われたんだろうつて。私もまだ、一人に会つてないの」

夜中に連絡をもらつて駆け付けた時には、もうすでに手術は始まつていたのだと言う。

倉田家の家族は来ていない。彼の両親は、一人が高校生の時に、事故で亡くなつている。親戚は、北海道に伯父夫婦がいるだけだと聞いたことがある。

自分で、手術が終わるのを待つていた美緒は、消える気配のない「手術中」のランプに耐え切れず、俺の所に電話を入れてきた

のだ。

何を話すでもなく、病院に着いてから一時間が経過した。

“大型の動物”による怪我。思い当たるのは、あの“妖獸”しかしれない。だとしたら、もう動ける程に回復したというのか？信じられない回復力だ。そんな奴を滅ぼす事は可能なのか？

不幸にも一人は、その復帰第一号の犠牲者になってしまった訳だ。うつむいて考え込んでいた俺は、横に座っていた美緒の緊張した気配に、顔を上げた。「手術中」のランプが消えている。

やがて扉が開くと、ストレッチャーに乗せられた一人が運び出される。

「あ、かず……ひと」

追いかけて行こうとする美緒を押し止めると、出てきた医者に礼を言い、手早く事情を説明して容体を尋ねる。

「発見が早かつたのが幸いしたようです。大型肉食獸の爪と牙のよう銳利な刃物で背中を数ヶ所、抉^{えぐ}られていますし、脇腹には内臓にまで達する傷もありましたが、生命は取り留めました」

今まで“妖獸”に襲われて助かった者は、皆無である。まだ、本調子ではないのか？ だとしたら、本当に運が良かつたな、一人。いや、こんな目に遭つてしまつて、運が悪かつたと言うべきか……。

今後の治療とリハビリについて簡単に説明を受け、何かあつた時のために名刺を渡す。再度、礼を述べると、所在無げに立つていてる美緒の腕を引つ張つて歩き出す。

「ち、ちょっと、伊津っちゃん？ 私、一人の所に行かなくちゃ

」

ゴチャゴチャ言つている美緒に、

「もう、俺達がする事はねえぞ。病室はちゃんと聞いたし、面会謝絶だ。ついでに言つなら、ここは完全介護だしな」

美緒が恨めしそうな顔をして俺を見る。

「駄目だ。お前も休まなくちゃ、倒れちまうよ。ひとりの意識が戻つた時に、お前が倒れたなんてバレたら、あいつ、這つてでも俺の

事殴りに来るぞ」

心の裡を隠しながら、もつともらしい事を言つてのける、お前が一人の側にいるのが、嫌なんだよ！

「俺んトコの同居人が、メシ作つて待つてるからさ。何かあつたらうちに連絡が来るよう、先生にも話しつけたし。ネコの家にも連絡しとかねえと、心配してんぞ」

俺の言葉に微笑みながら、美緒が答える。

「変わつてないね、伊津っちゃん、中学の時から、女の子には優しかつたんだよね」

バカ。女の子に優しかつたんじゃねえ。俺は、美緒、お前にだけ優しくしたかつたんだ。

美緒の手を握つたまま、愛車へ向う。

時計を見ると、そろそろ八時になろうつかといつてひらうだ。

「んあ、行こうか」

車の増え始めた道を走り出す。

「ありがとね、伊津っちゃん。誰かに助けてもらいたいと思つた時、伊津っちゃんしか思い浮かばなかつたの」

信号待ちの間に美緒が呟く。

「伊津っちゃんには迷惑だつたかも知れないけど、私、伊津っちゃんがいてくれて、すごく助かつたから」

うつむいている彼女の頭をポンと叩くと、アクセルを踏み込んでいく。

「覚えててくれて、嬉しいよ」

アパートの裏の駐車場に車を停めると、美緒を部屋へ案内する。

「あ、そうだ。今のうちに言つとくけど、うちの同居人、壮絶に顔が良いんだわ。あんまし、まともに見ないほうがいいぞ」

とりあえず、警告だけはしておく。

「え？ もしかして、伊津っちゃんの彼女？ だつたら悪いなあ」

「ちつがあ うつつ！ 断じて、そんなんじゃないつと思いたい（こらー）。」

まあ、他の事に気が回るよくなつただけ、良じとしておかうか。

「……ただいま」

ドアを開けて、美緒を促す。

「あ、お帰りい」

奥からシーラが返事をする。

「ん。彼女が、本橋美緒。俺の中学時代の同級生。んで、コツチが
おい？」

顔を出したシーラにペロっとお辞儀をして、顔を上げた美緒の動きが停止した。

「もしもし？ 美緒？」

最悪の状況を想像しながら、呼びかける。ギギギと音がしそうな動作で、美緒がゆっくりと振り返った。

「伊津つちゃんつて、ゲイだつたんだ……？」

だああかああらああ！－ 違つって言つてんだろおおおつ－！

無自覚の醜さと自覚した醜さ（前書き）

俺は何を望んでいるのだろう？

何を願つたのだろう？

自覚しなかつた自分の弱さと、知つてしまつた自分の醜さ……。

無自覚の醜さと自覚した醜さ

「そうそう、みうじくね。俺、伊津留の『彼女』で、シェリ・ルーって言います」

だあああああ

だああああああ

頭を抱える俺をよそに、ニコパツと笑ったシェラが答えていた。
「おらあっ！ お前ら楽しいか？ 俺をからかって、そんなに楽しいか？」

俺の全身から立せ昇る殺意は反応したのか、慌ててシニルが手を振った。

そうだよ。玄関先で漫才やってる場合じゃないだろ？

ようやく部屋に上がり、ソファーに美緒を座らせて電話の子機を持ってくる。

「さうして、おまえはおまえのままでいいんだよ。俺はおまえのままでいいんだよ。」

子機を手に取ると、白井の番号をフツシツと入力する。

ピボ
パ
トウルルル
トウルルル
トウルルル

「あ、もしもし？ おぬわん？ うん、あたし。今、伊津つちゃん

の臣」

も、俺の事は良く知つてゐる。

「あのね、お母さんが代わっていい

彼女が「予機を受工取」といふ言葉を聞いて、思ひ出でた。

大変な事に

L

医者から説明された事を、手短に伝える。ついで朝食を摂り、少し休ませてから帰宅させると云ひと、よろしくお願ひしますと返事

があり、電話は切れた。

子機を元の場所に戻すと、ショラが温め直してくれたコーンポタージュの鍋を持ってくる。マグカップに注ぎ分け美緒に渡すと、彼女は両手で包んで、ホウツと息をついた。

俺がサンドイッチに手を伸ばすと、すかさずショラに手の甲をはたかれた。

「だめ。お客様が先でしょう」

皿を美緒の方へ押しやる。

えーーーっ。俺も腹減ってるんですけどー。ぶーぶー。

「伊津留は、おにぎり食べたでしょ？」

食つたけどおお。でもおお。

「本橋さんは、何も食べてないんだよ

うつ。はい、分かりました。

俺達のやり取りを見ていた美緒が、堪らずにクスクス笑い出した。笑うゆとりが出てきたのは有り難い事だが、笑われた俺の立場がない……。

まあ、しかし。気分もほぐれたのか、ショラの作ったサンドイッチを食べ終わると、美緒はソファーの上でうつりうつり始めた。緊張が解けて、疲れが一気に出たのだろう。

「ほら、口にクッシュョンあるから。いいから、横になつて。少し眠つとけ。後で送つて行つてやるから」

起きていようとする彼女を無理やり寝かしつけ、毛布をかけてやる。すぐに規則正しい寝息が聞こえてくる。

「まあ、当たり前だけど、よつまど氣を張つてたんだな」

ショラを手伝つて食器類をキッチンへ運ぶ。たまにはやらないとね、手伝い。

「そうだな。そういう伊津留も疲れてんじゃないのか？ 徹夜明けでバタバタして」

「ん、まあな」

美緒をリビングで寝かしちまつたからな。仕事の続きが出来んの

よ。

「今、うちに、お前も少し休んどけよ。それで車に乗つたら、確実に事故るぞ」

「つむ。少々、頭がボーッとしている。もう一度と事故りたくないからな。こには、お言葉に甘えさせていただこう。

「んじゃ、悪い。上で少し眠らせてもらうわ。美緒が起きたら、起こしてくれよ」

自分で思つていたのより、はるかに疲れていたようだ。ロフトに上がり、ショーラの布団にもぐり込むと、そのままストンと眠りに落ちてしまった。

フツと何かの気配で眼を開く。視界が真っ白だ。俺はたつた一人で、真っ白な霧の中に立つている。

“夢か？”

ぐるりと周りを眺め回す。何の変化もない。仕方ないな。少し動いてみよう。

特にこれといった方向もない。適当な方へ向つて歩き出した。“おいおいおい。俺つてば、また死に掛けてるんじゃあるめーなー？”

以前「死に掛けた」時と状況が良く似ている。

“勘弁してくれよ。あんな体験、一回やりやあ上等だぜ”

身体にまとわり付く霧を掻き分けながら歩いていくと、不意に人影が出現する。

“美緒か……”

乳白色の闇の中に浮かび上がったのは、微笑んでいる美緒の姿。

“あのね、伊津っちゃん”

世にも幸せそうな笑顔で俺を呼ぶ。両手を広げて俺が一步を踏み出した瞬間。

“私ね、結婚するの。伊津っちゃんには、一番に知らせたくて”

俺の身体が凍りついた。

一点の邪氣もない笑顔。彼女は弾む足取りで、俺の横を通り過ぎる。

“美緒！”

無理やり振り返ると、そこには一人が立っている。そして、その腕を抱いて幸せそうに笑っている美緒。

“伊津っちゃん、私、幸せになるから”

“悪いな、伊津留。俺のほうが先に結婚するらしい。——この事、幸せにしたいんだ”

そう。過去に見た光景を、俺は追体験しているんだ。

あの時、俺は二人に「おめでとう」と言った。でも、その言葉の裏に隠されていた思いは？

“嫌だ！”

叫びが口を突いて出た。

“行くな、美緒。ここにいる。俺の所にいてくれ！ 美緒っ！”

振り返った美緒が残酷な言葉を口にする。

“だつて、伊津っちゃん、何も言ってくれなかつたじやない”

“伊津留。美緒はお前じやない、俺を選んだんだ。諦めろよ”

一人の言葉が、俺の理性を引き裂いた。

“嘘だ！ 違う！ 行くな、美緒！”

言葉が意味を成さない。一人が美緒の肩を抱いて遠ざかっていく。

“離せつ！ 俺のだ 美緒は俺のモンだ！ その手を離せ！”

届かない。どんなに叫んでも、美緒には届かない。 彼女が選んだのは俺じゃない。ならば、いつそ いつそ奴がいなくなつてしまえば……。

ソウ。奴ガイナクナツテシマエバ。

別の声が俺の思考にかぶさつてくる。

何ヲ悩ム必要ガアル？

オ前ノ欲シイ物ヲ、手ヲ伸バシテ取レバイ。誰モガヤツティルコトダ。

誰もが……手を伸ばして……。

欲シクハナノ力？ 欲しいとも。

悔シイダロウ？

悔しいぞ。

ナラバ…… ならば……？

その瞬間、鋭い痛みと景氣のいい破裂音がして、ポカツと眼が覚めた。

目の前にショラの顔がある。あ、起こしてくれたのか。ん？ でも

シリ・ルーの右手はまるで誰かをひっぱたいたかのように、奴の顔の前に掲げられ、俺の左頬は熱を帯びてジンジン痛みを訴えている。

どうやらコノヤロは、俺の事をひっぱたいて起こしたらしい。

「伊津留？」

そのままの姿勢で、ショラが口を開く。

「何だよ？」

思いつきり不機嫌に返事をする。

「田え、覚めたか？」

「くらあ！ ひっぱたいといて『田え、覚めたか？』はねーだろー、フツーー！」

くそつ！ ヒリヒリする頬に手を当てて起き上がる。そんな俺を見て、ショラが大きく息をついた。

はしごを降りるためにショラを促すと、奴が俺の腕をつかんで声をひそめた。

「お前、どんな夢を見てたのか知らないけど、連中の言う事に耳を貸すなよ。いつも俺がフオローしてやれるとは限らないんだ」

その言葉にギクリとする。

「ち、ちょっと待てよ。その『連中』ってのは何なんだよ？ 訳わかんねーぞ」

ショラは俺が夢見たのを知っている。俺は何を思った？ 何を願つた？ その『夢』の中で？

「そう。その『連中』だよ。奴等は、人の心の隙間に入り込む。そ

うやつて、人間の『負の感情』を喰つてテカくなるんだ。お前の夢の中に入り込んでいたのは、あの“妖獸”的一部だ」

「何と！？」

「彼女を送つていつたら、詳しく述べてやる。とにかく、自分の心に隙を作るな。伊津留、お前は自分が思つてゐるよりも、精神的に強いんだ。よつぱど心が乱れていの限り、奴等はお前に手が出せない。いいな？」

「こくこくこく。らじやーです。ただ、首を縦に振るばかりである。

かなりスッキリした顔で起きていた美緒を、安全運転で実家へ送り届ける。せめてお茶でも、という美緒のお母様のお誘いを丁重にお断り申し上げ、俺は自宅へと急ぐ。

シエラに聞きたい事が沢山あつた。伝えておきたい事が沢山あつた。

俺の「負の感情」　それは一人に対する「嫉妬」以外の何者でもない。

どこか俺の目届かない場所で、ヤツが嘲笑つてゐる気がする。所詮、お前も人間なんだ。どんなに気取つて見せてても、結局は自分が一番可愛いんだと。

駐車場に車を入れると、身体を弓かずるようにして部屋へ向つ。

「たあだいまあ

今日一日は始まつたばかりだと語つのに、すでに疲れ切つてゐる俺は、一体何者？

ポテポテとリビングへ入る。シエラの返事はない。普段なら少しは変だと思うのだが、今の俺に、通常の思考は望むべくもない。

「おーい。帰つた　ぞ……」

「お早いお帰りだな。邪魔しているわ」

俺は言葉を失つた。

悪夢の記憶（前書き）

どうして自分は「人間」を襲うのか？
この世界へどうやって降り立ったのか？「彼」は記憶を辿り始める。

初めて、獲物を逃した。まだ体調が万全ではないらしい。彼は不機嫌そうに唸り声をあげた。

方法を変えなくてはいけないかも知れない。これまでのように、闇雲に人間を襲う事は難しくなる可能性がある。あの一人のようないが現れないとも限らない。

彼は猛烈に考えていた。

「狩り」には「知恵」が必要だ。それには「学習」しなくてはなるまい。いままでは力づくで、どうにか出来た。力の弱いもの、年老いたもの、正気を失っていたもの、不意を狙つたもの。でも、それだけでは、駄目かもしれない。現に、今回は逃げられている。

そもそも、自分はなぜ人間を襲うのか？勿論、食すためである。と、彼の本能が告げる。だが、それ以外に何かあつたはずだ。何か、大切な事が……。

彼は闇の中にうずくまって、初めて「自分」について考えている。どうやって、この雑多な世界へやつってきたのか？

「自分」と言う存在は、一体何なのか？

彼は自分の記憶の中を遡つてみた。

まず最初に思い出されるのは、炎と煙が絶え間なく立ち込める平原。荒涼としていて、水もない。生きて動くものがない世界。想像できないくらい広い大地は、深い亀裂に覆われ、巨大な火柱が立ち上る。

鎖に繋がれた手足。視界を遮る牢獄の檻。

自分だけではなく、そこかしこに同じような牢獄があつた。

いつが夜明けなのか夜なのか。それ以前に空があるのかすら分からぬ世界。

遙か彼方、南の方角からは何者かの歌う声が風に乗つて聞こえてくるが、時に沈黙して業火の燃え上がる音だけが耳を振るわせる。

無機質な顔をした巨大な者達が、自分と同じように囚われている事だけは見て取れた。

次に思い出すのは、魂の自由。繋がれていた鎖を断ち切り、堅牢であるはずの檻を抜け出し、自由に虚空を駆け回る。

そして追っ手。檻を抜け出した自分を追い、何者ががやつてくる。囚われれば、再びあの檻へ連れ戻されるのだ。……いや、今度はもつと酷いことになるかもしない。

とにかく逃げるのだ。奴らの手の届かない場所へ。

そうして逃げて逃げて。「彼」はどこかへ辿り着いたのだ。それが「どこ」なのかは分からぬ。でも、温かくて優しくて。「彼」が今までに経験した事のない安らぎがそこにはあった。

魂の脈動を刻む鼓動。それに合わせて全身を巡る熱い血流。「肉体」を持たなかつた「彼」にとって、全てが新鮮な出来事だつた。やがて来る苦痛。全身がよじれるような痛み。温かな、安心できる場所から引き離される不安。失いたくない焦燥と、新たな世界に対する期待が入り混じつた、何とも形容しがたい気持ち。

次の瞬間、「彼」が感じたのは光。眩しいほどに溢れる光。文字通り、生まれて初めて浴びた光は、「彼」を惜しげもなく照らしていた。

その身上に触れる柔らかな毛並み。優しく慈しむ抱擁。「彼」にとって、味わつた事のない至福のとき。この一瞬のためなら、魂が束縛される不自由も甘受する価値があると思つた。

それから訪れたのは出会い。どういう経緯だったのは忘れてしまつた。とにかく、冷たい雨に濡れて、心細くて、寂しかつた。自分を暖めてくれる者なら、誰でも良かつた。でも、その出会いは「彼」にとつて運命。

濡れぼそつた「彼」を静かに抱き上げ、震える身体をそつと拭いてくれたのは……。

誰だつただろう? とても大事な事なのに、思い出せなくてイライラする。ほんやりと記憶の中に浮かび上がるその人物は、とても

優しかった気がする。自分を大切してくれた。自分も大切にしたいと思った。人間なのに？自分は人を喰う。なのに、どうして大切に感じるのだろう？その矛盾が解消されない。

ただ、思い出せることがある。その「大切な人間」を、「彼」は失つてしまつたのだ。その人間は、「彼」を置いて逝つてしまつた。この雑多な世界に「彼」を一人で置いたまま。

そうだ！自分からあの優しかった人間を奪い去つた連中に復讐するため、自分は「狩り」を始めたのだ。「彼」の大切な人間を奪い去つた連中。助けようともしなかつた連中。

だから「彼」は人間への殺戮を心に誓つたのだ。

それさえ分かれば、それでいい。

これで心おきなく殺戮を続けられる。まだ「狩り」は始まつたばかりだ。自分の身内に巢食つ、この虚無は殺す事によつてしまつられない。いや、埋まらないかもしれない。それでもいいのだ。「彼」から喜びの全てを奪つた、「人」という名の種族に復讐するためには、身内に虚無を飼つていたほうが都合がいい。常に飢えていなければ、「狩り」は続けられないのだから。

それが思い出せれば、後は体力を取り戻すだけだ。早く回復すれば、それだけ早く復讐を開始できる。

今は眠ろう。休む事によつて、力を取り戻すのだ。

そして、「狩り」を続けよう。

悪夢の正体と天使の誤算（前書き）

部屋へ戻つた俺を待つていたのは、この世で一番見たたくない顔、ア
フィエルだつた。

この高飛車天使が明かす妖獣の正体。

そして自信満々な奴が、予想だにしなかつた誤算とは？

悪夢の正体と天使の誤算

テーブルに肘をついて不機嫌丸出しのシェリ・ルーと、窓辺に立つて腕を組み、無表情にこちらを見ている野郎。

「なあ、おい、シェラ君よ」

「何だね、伊津留君」

ぶつきらぼうに返つてくる言葉。ああ、良かつた。反応がある。

「もしかして俺つてば、幻覚か何か見えてんじやないかしら？」

「ほほう、奇遇だねえ。実は俺にも見えてんだよ。で、一体どんな幻覚だ？」

話しているうちに、徐々に余裕が戻つてくる。

「頭あ、金髪でよ。」「、モデルみたいにナナメにカットしてよ

「田玉が緑色か？ やたらと陰険で、目つきの悪い」

「そうそつ。えらく態度のデカイ」

言いたい放題である。それもそのはず。今の俺達二人が絶対に会いたくない人物が、部屋の中にはいるのだ。

ちょっとやそとの悪口なんざ、笑つて聞き流すべしの余裕がねえなら、初めっから来なきやいいのさ！

「んで、その幻は一体全体、何にし現れやがったんだ？」

「何か話があるんだとさ」

やつと話の流れが本題へ向つてきた。その問題の人物 アフィエルはと言えば、平静を取り繕つてはいるものの、引きつった口元と額に浮かんだ青筋は「ごまかしようがない」。

「で、何の用だよアフィエルさん？ 人の留守中に勝手に家に上がりこむなんざ、あんまりホメラレタもんじゃないぜ」

「ふん。お前達が“妖獣”と呼んでいるアレの事についてな」

相変わらず、タカビーな野郎だ。まるで六本木ヒルズの屋上から、俺達の事を見下ろしてゐみたいに話しゃがる。

「ほうん。そりゃまた、『親切に。あ、シェラ。コーヒー淹れて

くんね？ 無駄に緊張したら、喉渴いちつたよ

「ん、OK」

立ち上がったシェラがキッチンへ消えると、食器の触れ合つ音が聞こえてくる。

俺はおもむろに煙草に火を点けると、

「で、話しつて何だよ。こつとも、これで色々と忙しいんだ。サク

サク済ませてくれよ」

灰皿を引き寄せて、無愛想な声を出す。

「お前達が“妖獸”と呼んでいる、あの生き物について何を、どれだけ知つていい？」

シェラがトレイを持つて戻つてくる。

「別に。やたらと図体がでかくて、シッポが蛇んなつて、泣きが入るくらいタフで、あつちやこつちやで人間喰い散らかしてる事くらいしか知らねえよ」

「バカシェラ。こんな奴の分まで、持つてきてやることないんだよ。『シェリ・ルー』よ。お前なら、もう少しまともな答えが出来るんじやないのか？」

あ、テメー。俺の事、馬鹿にしやがったな、くらつ！

俺の隣に置かれていたクツ・ションに座り込むと、マグカップを口に運びながらシェラが答えた。

「第三天の北の地獄、ゲヘナから逃げ出した妖獸・幻獸の魂だらう」
「なんだ、そりや？」しかし、顔中を「？」マークで一杯にしている俺を一顧だにせず、アフィエルはコーヒーを口にする。

「あんな、伊津留。人間が言う“天”てのはさ、七つの階層に分かれているんだ。その、下から数えて三番目にあたる天が『第三天・サグン』。で、このサグンの北には『ゲヘナ』と呼ばれる地獄があつて、岩と氷と炎とで閉ざされた大地しかない。ここに捕らえられた魂を繋いで、天使達が罰するんだ」

「じゃ、何か？ あの妖獸は元々、その……第三天？ に繋がれていた奴が、鎖かなんかを引き千切つて逃げ出したと

俺の問いに、「コツクリとうなずきながらコーヒーを飲むショラ。
「頭の悪い人間のお前にも、どうやら理解できたようだな。事がどう
れだけ重大かが」

ブチツ。

あら、切れちゃつた。右手が勝手に動く。手元にあつた雑誌を、
アフィエルめがけて投げつける。

バサバサバサ バツ、バサササ。

俺の投げつけた雑誌を片手で叩き落したアフィエルは、物凄い目
付きで俺をにらみつけてきた。

「何をするつ！」

「『何をするつ！』じゃねーよ、このタワケ者が。つまるといふ、
お前等の管理不行き届きで逃げ出した化けモンが、俺達に迷惑かけ
てんじやねえかよ。こんな場所でボケボケ茶あんぞ飲んでる場合
か？ さつさとどうにかしやがれ、大馬鹿野郎！」

心底怒り狂つている俺の言葉に

「何とかしろだと？ フン、下衆^{げす}が。貴様等、自分達の立場をわき
まえてから物を言え。あの妖獸によつて薄汚い人間が滅ぼされたか
らと書いて、我等にしてみれば、痛くも痒くもないわ」

アフィエルは傲然と言い放つ。

「テメー、仮にも天使のくせして、そおんな事言つていいんかよ！
？」

俺は世の一般常識というモノを甘く見ていたらしい事を、痛切に
思い知らされる事になる。

「何か勘違いしていいるらしいな。我等にとつて人間など、どうでも
良い存在なのだ」

少しも動じてないよ、コイツ。

「天使が人間を守護しているだと？ 思い違いも甚だしい。馬鹿馬
鹿しいにも程がある」

え？ そうなの？ そういうモンなの？

ちょっとばかし氣勢を殺がれちゃつて、俺はシェラの方を向いた。

「アフィエルの言つ事も、ある意味、真実なんだ。信じられないかもしれないけどな」

ほんの少し寂しそうな表情をして、シェリ・ルーが答えた。

「だつてよ、『人間』てのは、『神』が創造したんだろ？ 何でだよ？」

初めに神は、天と地とを創造された。

そう。神は初源の七日間に六日目に、土くれから『人間』を創り出したはず。自分の勝手で俺達『人間』を創つておきながら、その責任はとらないってのかよ？

「愚かな戯言を信じる者どもよ。我等が真実、父なる神と共に拝するは、高貴なる『初源の人』アダム・カドモンただお一人。墮落したイヴの末裔たる女の胎から生まれた『人間』など、汚らわしい限りだ」

オメーよお。今の台詞、女性人権擁護団体のおばちゃん達の前で、も一回言つてみる。

しかし俺は、アフィエルの言葉を聞きながら、もう一つの神話を思い出していた。

その昔。神は天使達を創造し、神以外の何者をも拝するな、と告げた。

やがて神は、『初源の人』アダム・カドモンを創造する。『彼』が天使達よりも高位であると考へた神は、先の命令を忘れて新しい被造物に服するように命じた。

しかし神以外に首を垂れる事を良しとしなかつた天使達は、こう言つて神の命令を拒んだ。

「いかにして炎の子が、土くれの子を拝せよつか」

その結果、天界の三分の一の天使達が闇の深淵へと墮ちて行く事になつたのである。

「墮天使」についての、あまり知られていない、もう一つの「真実」である。

深く神を愛したが故に、最愛の神によつて天上を追われた天使達。

つたぐ、この「神」って奴はよお……。

「で、お前の用件な何なんだ？お前等の言つ所の汚らわしい地上まで、わざわざ聖書の講釈をしに来たわけでもあるまいこ」

「そうそう。初めは“妖獣”的話をしてたんだつた。」

「どうせお前の事だ。逃げ出した妖獣の魂を捕らえて来い、とか言われたんだろうが」

シリ・ルーの一言に、アフィエルがなんとも嫌そうな顔をする。どうやら、図星らしい。

「その通りだ。サンダルフォン様の『』指示で、あの魂を第三天に取れ戻すように言われている。初めは、簡単に見つけられるはずだったのだ。痕跡も残っていたからな」

“はず”や“つもり”で渡つていけるほど、世の中そんなに甘くない。「締め切りまでには、上がるはずだつたんです」とか「こんなにかかるつもりじゃなかつたんです」とか言つても、担当さんに許してもらえない、この俺が言つんだから間違いない。

あれ？ 何か違う……。

「それで？ “つもり”と“はず”が、どうしたつて？」

頭を抱えてしまった俺をさりげなく見ながら、シリラは冷たく先を促す。こいつって、敵に回すと、かなりヤな奴かも。

「しばらくの間は、順調に痕跡を追うことができた。ただあいつの気配さえ追つていれば良かつたんだからな。ところが、途中でその気配が消えてしまった」

ゆつくりとコーヒーを飲み干して、カップを手の中でクルクルと回す。やめろよお、そのカップ高かつたんだからな。

苦虫を（どんな虫なのか、幼少の頃からの謎である）まとめて數十匹、噛み潰したような渋面でアフィエルが続けた。 んむ。 いい気味だ。

「妖獣の魂が、人間の中に紛れ込んでしまった。 いや、そうではないな。妖獣の奴の魂と人間の魂が融合してしまったらしい。おかげで、じちらは後手後手に回らざるを得ない」

第三天とやらから逃げ出した妖獸

デイー・ガといいうらし

の魂は、まず何らかの「器」を手に入れたようだ。ここいら辺は他の魂と同じく、この世界の法則に従がつたらしい。すなわち、「器」を持たない魂は、長くこの世に留まる事が出来ない。

アフィエル達“天使”は、たとえデイー・ガが肉体を持つたとしても、追跡には何ら支障はなかつたらしい。「器」である肉体の特徴ではなく、デイー・ガの「妖獸」としての氣配で追跡していたというのだから。しかし、そこで問題が起こり、デイー・ガの氣配は完全に人間のモノと融合してしまつたようなのだ。天使達に言わせると、人間の氣配と言うのは不安定でまとまりがなく、雑多でうつとうしいものなんだそうだ。ヨケーなお世話だつての、大馬鹿野郎！「つまりは、逃げられた魂を連れ戻す事はおろか、見つけ出すことも出来ないでいるつて訳か」

相棒の鋭い突つ込みに、奴は世にも渋い顔でどつか別の方向を向いている。シェラは残つたコーヒーを飲み干して、先を促す。

「それで？」

をい。ここまで聞いたら、いつかな鈍い俺でさえ、こいつの言わんとしている事は想像できるぞ。けど、シェリ・ルーはアフィエル自身に言わせたいようだつたし、奴が困るのは俺も大歓迎なので、そのまま沈黙を守つっていた。俺もケツコ一、人が悪い。

「私もこれで、地上の事には詳しいつもりだ。もちろん、他の天使達に比べてと言う意味だが。しかし、永の歳月、地を流れいたお前であれば、我等には眼の届かない小さな場所まで入り込めるだろう。いかがわしい、下等な友人も多いそだだからな」

いちいち、嫌味な野郎だ……。

苦虫がもう百匹程追加されたような表情で、それでも必死に体面を取り繕いながら

「墮天使シェリ・ルーよ。妖獸・デイー・ガを捕らえて見せよ。見事成功したならば、お前の帰天をサンダルフォン様に取り成してやつても良い」

くおら、このガキ！（天使の年齢なんて知るかよ！）人にモノを頼む時に使う文法ぢやねえだろうが、それはよつ！

ショーラッ！ テメーも黙つとらんで、なんとか言つたれ！ ガツンと！

「別に。お前に頭を下げてまで、戻りたい場所ではないな」

うーし、良く言った。ひとり会心の笑みをたたえる俺に反し、相棒の言葉に呆然とした顔になるアフィエル。

「天に帰る気がないと言うのか？ 何をたわけた事を言つているのだ。我等『天使』にとつて、帰天本能は何よりも優先されるものだぞ。それを……」

「帰天本能」？ あんだ、そりや？ 後から聞いた話によると、動物に「帰巣本能」があるように、天使にも「帰天本能」というものがあるらしい。人間が持つてゐる「睡眠」「食欲」「闘争」などの諸々の「本能」の中で「生存本能」が優先されるように、天使にとって「帰天本能」とは、全てにおいて優先されるべきモノなのだろう。

その本能を否定されたんだから、驚いて当然だろう。

「戻つたからといって、何が変わる訳でもなし。所詮、俺は『アズラエル』だからな」

よつぽど、口クな事なかつたんだな。それに、半身を探し出さないといけないわけだし。

「私の申し出を断る、というのだな？」

申し出？ はい？ 押し付けじゃなくて？

言葉は正しく使いましょうね、アフィエル君。

断られるとは、思つても見なかつたのだろう。顔色を失くしているアフィエルは、傍から見ていておかしくなるくらい、動搖していた。

「ああ。お前の申し出は断らせてもらつ。だが妖獣の件は話が別だ。これ以上の被害を出さないために、そして何より、奴が罪を重ねないために。お前に言われる以前から、俺達は奴を追いかけている」

シェリ・ルーの言葉に、アフィエルは複雑な顔をする。

「結局は引き受けるのではないか。それならば最初から素直に」

「勘違いするな、アフィエル。天の意志とは関係ない。これは俺や

伊津留、地上に暮らす者のためだ」

「何とでも言うが良いさ。私達、天に属する者にとつて、ティーガが捕縛されればそれで良い。奴の魂がサグンの牢に戻れば、それで良いのだ。私はこのまま天に戻り、サンダルフオン様に事の次第を伝えなければならない。後の事はお前に任せる。しつかりと働けよ」なけなしの威儀をかき集めると、マントのようになしに全身にしつかりと巻き付け、アフィエルは高飛車に吐き捨てた。が、さつきよりも勢いがないように感じるのは、俺の気のせいではないはずだ。先ほどのシェラの発言によつて、奴の鉄面皮にヒビが入つた事は間違いない。ざまあみろつてんだ。この超高層ビル男め。さつさと天でもどこのでも帰れつてんだ。

「用件は済んだか？ だつたら、さつさと帰つてくれ。俺は疲れてんだ」

そつけなく言うと、洗面所へ向かい顔を洗う。嘘でも方便でもなく、マジで俺は疲れてんだ。自分の気持ちだつて整理しなくちゃいけないので、今はアフィエルの傲岸な態度に付き合つてゐる余裕はない。

リビングに戻ると、高飛車天使の姿はすでになかつた。ああ、精神衛生上よろしくなかつたわい。

シェラが淹れ直してくれたコーヒーを、今度はゆっくりと味わつて飲む。一日分にしては十分過ぎる程の出来事が、怒涛の勢いで襲い掛かってきた感じだ。

美緒を送つて戻つてきたら、シェリ・ルーと詳しい話をするつもりだつたんだけど……。何だか、頭の中がぐぢやぐぢやだ。

自分の心の奥に凝つていた闇。一人の存在を疎むほどの嫉妬。それを見つけていた闇。それを見つけていた闇。一人の存在を疎むほどの嫉妬。そつていた。それなのに、あの馬鹿天使は余計な事ほざいて帰りやが

闇の解析・反撃開始（前書き）

シェラが少しづつ解析していくてくれる俺の中の闇。
そうだ、俺は聖人君子じゃない。
でも、誰かの涙の上にある幸せなんて欲しくない。
待つてろ、デイーガ！これから反撃開始だぜ。

「今日は何だか、ドタバタだな。ゆつくりと話をする暇もない」自分のカップを持つてきしたショーラが、俺の前に座る。

「少し話をしようか」

「ん……。いや、お前も何かと大変そうだし」

確かに悩みの種は尽きないけれど、こいつだつて色々抱えてんだ。そうそう俺のことばかり言つても始まらない。

「大丈夫だから。気にすんなよ」

笑いを作つて見せた俺に、あきれたような表情でため息をついた。「変に気を使つているのは、お前の方だろ？ 気にしなくていいってのは、こっちの台詞だよ。ディーガの方は、真砂がネットワークを使つて探してくれているし、何かあつたら連絡が来るようになるから。それに、俺のほうの用事は、少しくらい寄り道したからつてどうなるモンでもないしな」

だから話してみろよ。と促されて、俺は自分の胸の奥のモヤモヤを吐き出すことにした。忘れたと思つていた過去も恋。思いがけない再会によつて湧き上がる嫉妬心。無自覚に放つた呪いの言葉。

「諦めがついたと、自分の中では決着がついたと思つていたんだ。それなのに、美緒と一人の一人に会つただけで揺らぐような決心だつたなんて……」

テーブルで頬杖をつきながら俺の話を聞いていたショーリ・ルーは、噛んで含めるように語り始めた。

「それって、そんなに悪い事なのか？ たとえ決着のついた過去の恋でも、好きだつた人に出会えれば心が動かないか？ ライバルがいれば『いなくなつて欲しい』と思うのは、普通の事だらう。別に特別な話じやない。それさえも許せないほど、伊津留は聖人君子なのか？」

「そんな訳じやないけど……」

そう……だよな。俺つてば、聖人君子じゃない。思いつ切り俗にまみれた、平凡な人間なんだ。シェラの言葉を聞いているうちに、何だか気が楽になってくる。

「伊津留は今でも、本橋さんの事が好きなんだな？」

「ああ。好き なんだと思う」

この気持ちは本当に「恋」なのか？

それとも、逃げ出してしまった自分に対する、後悔への言い訳なのか？

「彼女を自分のモノにしたいか？ それが、たとえば一人を引き裂き、彼女を傷つけてしまう結果になつたとしても」

シェラの言葉に俺はハッとした。俺のこの想いは、彼女の、美緒の気持ちをまったく無視しているんだ。一人の身に何かあつたら、美緒はどれだけ傷つくだろう。考えた事もなかつた。

「そう……だな。美緒を泣かせてまで、俺のモノにしたい とは思えないかもな」

心の闇が、少しづつ解きほぐされていく。あれほど苦しかつた波が、嘘のように消えていくのが判つた。

「シェラ。お前と話して良かつたよ。あのまだつたら、俺はきっと、美緒を傷つけていた。一人の命が助かつた事を喜べねえ、サイテーな野郎になつてたさ」

俺の言葉を聞いて、シェラは静かに笑つた。

「そりやあ、良かつた」

「実は俺、結構凹んでたんだ。こんなに嫌な奴だつたのか、つてね 大きく伸びをして、息を吐き出す。胸の奥にあつた塊が、音を立てて墮ちていつた気がした。

「奴と出会えば、誰でもそうなる。人である以上、それは仕方のない事だ」

「？ 奴？」

「妖獣、ディーガの事さ。妖獣と言う存在は、いわば負のエネルギーの集合体だ。正と負のエネルギーが微妙なバランスで成り立つて

いる人間が、奴と出会えば必ず天秤の皿は負に傾く。これは誰にも止められない。伊津留の場合、その対象が倉田さんと本橋さんに向かつてしまつたという訳だ

だから、必要以上に落ち込むことはない。シェリ・ルーはそう言つてくれた。

あの妖獸と出合つた後に、俺の意識の奥でざわめいていた声。妬みや憎しみが満ち満ちた囁き。あれらはディーガの負のエネルギーに触発された人々の感情なのだ。自分で経験しているだけに、その闇の深さは人事ではない。

「そもそも、妖獸って何なんだ？　そのあたりの説明がないまま、

話が進んで行つた氣がするんだが」

「ああ、そうか。俺達には、今更だからな」

シェリ・ルーはクッショーンに座り直すと、改めて語り出した。

「神が“世界”を創造なさつた時、この世を美しいもの、清いもののみで満たそとなさつた。そのために、醜いもの、不完全なもの達の居場所がなくなつてしまつたんだ。神だつて、最初から全てを完全に造れた訳じやない。創造していく過程の中で何かが欠けたり、どこかが歪んだまま生み出されてしまつた者達も多くあつた」

「ディーガは、その不完全なものつて訳か」

俺の言葉に軽くうなずき、テーブルの上で両手を組んだ。

「神はその『失敗作』達を消そうとなされたが、それが不可能なことに気が付かれた。一度生み出されてしまつた存在は、いかに神といえども消滅させる事は出来なくなつていたんだ。仕方なく神は、それらのもの達を第三天・サグンへと連れて行かれた。そしてそのまま、地獄の牢獄に繋がれたんだ。『失敗作』が世界を汚さないようになると」

すでに何度も思つた事だが　まつたく、神つて奴は……。

「妖獸、ディーガは、天地に凝つた陰の気を集めて造られた。だから、常に陽の気を求める。つまり、自分にはない正のエネルギーだ。しかしディーガの持つ負のエネルギーは甚だ。奴に出会えば、誰も

が少なからず持つてゐるマイナスの感情が暴走してしまつんだ

「なるほど、良く判つたよ」

俺はクツショーンを抱きかかえて床に転がつた。

「なあ、奴をどうにかする手段つて、あるのか?」

「ああ。どうだらうな。正直、判らないんだ。今、それを探してい
るところだな」

俺の問いかけに、返つてきたシホウの答えは、何とも心細いもの
だつた。

「絶対に何かあるはずなんだ。必ず見つけ出してみせる。 時に、

伊津留

「んー? なにー?」

次の瞬間、俺は世にも恐ろしい言葉を聞いた。

「担当さんから電話、あつたぞ」

「あー————つ————やべえ————つ————！」

＊＊

その電話が掛かってきたのは、締め切りも過ぎ、何の進展もない
ままに数日が経過した頃だつた。

「もしもし?」

「あ、もしもし伊津留さんですか? 俺、匠です。つて、判ります
かねえ?」

電話の主が判らず、俺が「あー」とか「うー」とか言つてみると、
受話器の向つで笑い声がした。

「あはは、やつぱり判りませんか。コンビニでバイトしてゐ、ほり

……

ああ、はいはい。判つましたよ、狐君ね。君、匠つて名前なんだ。
「お知らせじときたい事があるんですけど、シホウさん、いますか
ねえ?」

あいにくと、シホウ・ルーは買い物に出ていた。あいつが買い物

に行くよくなつてから、おまけが沢山ついてくるよくなつたなあ。

「そつかあ。じゃあ、伊津留さんでもいいや。あのですね」

「……おい。「でもいいや」って何だよ。

「例の奴ですけど、調べていたら妙なことが判つたんですよ。詳しい話もしたいんで、今夜、真砂さんトコに来て欲しいんですけど、大丈夫ですか？」

「はいはい。判りましたよ。了解しました。今夜一人で“仮面舞踏会”へ出向く事を約束して、俺は電話を切つた。

「はひー。

咥えた煙草に火を点け、大きく息をついた時、ドアの鍵が開く音がした。

「ただいまー」

近くのスーパーの袋を抱えたシェラが帰つて來た。

「何？ どうかした？」

ソファーでだらけている俺の姿を見て、シェリ・ルーが問い合わせてくる。

「匠君から電話。奴の事で妙な事が判つたって。詳しい話がしたいから“仮面舞踏会”へ来て欲しいそうだ」

「匠君？ ああ、彼か。妙な事ねえ。何だらう、気になるなあ。伊津留も行くだろ？」

買つてきた物を冷蔵庫へしまいながら、シェラが振り返つて聞いてくる。

「当たり間だろ。もちろん、行くぞ」

ここまできて、置いてけぼりはないだらうよ。絶対行くつてばよ。ソファーの上でだらけ切つている俺は、プカリップカリと煙草をふかす。ああー、何もする気が起きない。アップダウンの激しい時間を過ごしたせいかどうかはわからないが、必要以上に疲れが出てしまつた俺は、担当さんに原稿を渡した後（担当さんがうちに来て、俺の後ろで出来上がるのを待つてた……泣）から、ダラダラ状態が

続いている。

「おーい、伊津留。そろそろスイッチを入れて、シャキッとしてくれないかな？ はつきり言つて、かなり邪魔だよ」

腰に手を当てたシェラが、ソファーの前に立つて見下ろしている。「あーん？ そんな事言わてもなあ」

日光に溶けたマーガリンのような俺は、ふやけた返事を返す。シェラは大きくため息を吐くと、俺を横目に眺めて言つた。

「そんなんだらけた顔して店に行つたら、ガルに何言われるか判らないぞ。大口開けて、笑われるかもな」

あ……。それはちょっと嫌かも。シェラや真砂にからかわれたり笑われたりするのは気にならないけど、ガルに笑われるのだけは、ちと勘弁。口悪いんだよ、あの一つ頭のケロベロスはさ……。

「んじや、スイッチ入れますか」

ぐーっと伸びをすると、煙草をもみ消す。何だか久し振りに、人間の形になつたような気がする。時計を見てみると、真砂の店に顔を出すには半端な時間だ。

「なあ、シェラ。“仮面舞踏会”に行く前に、病院に寄つてもいいかな？」

倉田一人が病院に担ぎ込まれて以来、俺は見舞いにも行つていなかつた。何だか、自分の心を整理する時間が必要だつたんだ。まつ、今さらだけどね。

「倉田さんのお見舞いか。意識、戻つたんだっけ？」
「ああ、美緒が連絡してきた」

まだベッドからは起きられないが、意識はしつかりしているそうだ。傷の経過も良好らしい。

久し振りに車を出すと、シェラを乗せて病院へと向かつた。途中で、柄にもなく花を買つ。食べ物だと、喰えなかつた時に困るからな。

病院に着くと、ナースステーションで病室を確認する。意識を取り戻した一人は、思つた通り個室から移動していた。

リノリウムの廊下を歩きながら、俺は妙に緊張している自分に気が付いた。教えてもらつた病室のネームプレートを確かめると、深呼吸を繰り返す。スーサー、スーサー、落ち着け、俺。

そんな俺を見て、シェリ・ルーが心配そうに声をかけて来た。

「大丈夫か？」

そんなに大丈夫じゃなさそうに見えるんだろうか？

奴に向かつて平氣だとうなずいて見せ、ノックをしようと右手を挙げた。

ガララ……。

「あれ？ 伊津っちゃん？ どうしたの？」

絶妙のタイミングでドアを開けたのは、誰あろう本橋美緒その人だつた。

「あ、え、う……」

一方、完全にタイミングを外してしまつた俺は、挙げた右手を下げるに下がられず、ヒドく間の抜けた姿で固まつてしまつた。

「外で何だか人の声がしたような気がしたから。あ、シェリ・ルーさんも来ててくれたんですか？ どうぞ入ってください。今、ひとりも起きてますから」

先日の不安気な表情とは打つて変わって、晴れやかに笑う彼女。そんな彼女を見て、一人の事を「ひとり」と呼ぶ声を聞いて、俺は自分の心が落ち着いている事に安堵した。

病室は六人部屋で、一人はその窓際にいた。実際にうまつているベッドは三台で、そのせいか妙に広々として感じられた。起こしたベッドに背中を預け、思いの外、元気そうな表情の一人が窓の景色を眺めている。

「よお。具合はどうだよ？」

俺の声に振り向いた一人は、頬が少しコケてはいるが顔色もいい。「伊津留、来ててくれたのか。悪かつたな。締め切りとか大丈夫なのか？」

「ケガ人が人の心配してんじゃねえよ。あ、ネコちゃん、これお見

舞いの花

抱えていた花束を美緒に渡す。お花を生けて来るわね、と、病室を出て行く美緒を見送つて一人は口を開いた。

「伊津留、そちらがシェリ・ルーさんか？」

俺の後ろにいたシェラが進み出て、一人と向き合つた。

「初めてまして、倉田さん。伊津留の所に居候させてもらつて、シリ・ルーです。どうぞシェラと呼んでください」

笑みを浮かべて挨拶をするシェラ。

「美緒からお話は伺つていましたが、直にお目にかかると……」
言葉を探しているらしい一人に、助け舟を出してやつた。

「美人さんだろ、うちの相棒」

「ああ、その通りだ。それしか言葉が浮かばないよ。伊津留、色々と世話になつたみたいだな。ありがとう」

静かに息を吸い込む。大丈夫だ。心に波は立たない。

「何……言つてんだよ。ダチだろ、俺ら」

言えた。

「伊津留、俺、お前に言わなくちゃならない事があるんだ。美緒の事だけど、俺、知つてたんだ。お前が美緒の事……」

一気に話してしまおうとする一人の言葉を、俺は無理矢理遮つた。
「一人。もういいんだ。もう、終わつた事なんだよ。お前が気にする必要はない。お前はこれから先、美緒を幸せにする事だけを考えていればいいんだ」

「俺、ずっとこの事が気になつていたんだ」

自然と俺の顔に笑みが浮かんだ。一人も、苦しんでいた。俺だけじゃなかつた。

「ああ。一人、お前になら任せられる。美緒の事を、頼む」

見えてくる真実（前書き）

俺、自分の事しか見えてなかつた。

あいつだつて、自分を責めていたつていうのに。

「真実」こそが、最も見えてこないものなんだな。

ディーガ、お前の真実も探してやる。

だからもうこれ以上、罪を重ねるのはやめるんだ。

見えてくる眞実

病院を出た俺達は、車を置くために一度自宅アパートへ向かつていた。ハンドルを握る俺の心は軽い。一人の意識が戻つた事を、美緒の笑顔を、喜べる自分が嬉しかつた。二人のこれから先の幸せを、祈れる自分が嬉しかつた。

「ところでさ、シェラ。一人はディーガに襲われた時、あのマイナスの波動に当たらなかつたのかねえ？ さつき見た限りでは、変わつた様子はなかつたけど」

自宅までの最後のカーブを曲がりながら、俺は疑問に感じていた事を尋ねてみた。

「俺もそれは気になつて、倉田さんの様子を伺つていたんだがな。大丈夫みたいだ」

助手席に座つているシェラが、窓枠に肘を付きながら言った。
「そんな事つて、ありえるのか？」

駐車場が見えてきた。縦列駐車、割と苦手なんだよね。

「考えられる理由は、いくつかあるな。その中でも、特に大きい理由は一つ。一つは本橋さんの想いだ。彼女の想いが、まるでベールのようになつて、彼を覆つっていた。彼女の彼を愛する想いである正のエネルギーが、ディーガの負のエネルギーから倉田さんを守つているんだ」駐車スペースに収まつた車から降りながら、聞こえたシェラの言葉に俺は振り向いた。

「美緒の一人への愛が、ディーガの負のエネルギーより勝つたって事か？」

助手席のドアを閉め、上着を羽織ながらシェラが続けた。

「そう。そして、彼が負の波動を受けなかつたもう一つの理由。それは、わざわざディーガが増大させるまでもなく、倉田さんが大きな負の感情を抱えていたからだ」

車の鍵をかけると、先を歩いているシェリ・ルーを追いかけた。

「大きな負の感情？」

「ああ。彼が常に抱いていた、大きなマイナスの感情。それは伊津留、お前に対する罪悪感だ」

シェリ・ルーを追う足が止まる。

「俺に対する 罪悪感？」

二・三歩先に立つ相棒が、不思議な表情で俺を見返す。

「倉田さんが病室で言つただろう。伊津留の気持ちを知つてたつて。倉田さんは、お前から本橋さんを奪つてしまつたんじやないか、そのせいで伊津留が身を引いたんじやないかつて、ずっと感じてたんだよ」

一人が、そんな事を考えていたのか。美緒との結婚を控えた、この期に及んまでまで。

「馬鹿だな。俺も、一人も」

俺一人が損をしたような気持ちになつていた。一人がそんなに悩んでいたとは。

「でも今回の件で、倉田さんも気持ちに区切りがついたみたいだね。帰り際の倉田さん、いい顔してたよ」

「ああ、そうだな。俺も、二人の結婚式には笑顔で出席できそうだ」

ようやく俺は、新しい一步を踏み出した。

＊＊

カロン、カロロロン

妙に懐かしい響きのカウベルに迎えられて、俺とシェリ・ルーは「仮面舞踏会」のドアをくぐつた。

「いらっしゃいませ。匠君、来てますよ」

夕暮れ色に彩られた店内は、ここが異空間である事を、すんなりと受け入れさせる。そんな雰囲気があつた。昼の名残と夜の訪れの入り混じつた空間に、俺達を呼び出した張本人が座つていた。

「こっちです。わざわざ済みません」

真砂に「コーヒーを二つ頼むと、彼のいるテーブルに着いた。

「予定も聞かずに呼び出したりして、大丈夫でしたか？」

「気にはすんな。締め切りの後だったから、ちょうど暇だつたし」

「良かつたあ。勢いで電話しちやつたけど、気になつちゃつて「

カシカシと頭を搔きながら、匠は人懐っこい笑顔を見せた。それ

にしても、あれは大した勢いの電話だつたぞ、確かに。

「それで、早速なんだけど、妙な事が判つたつて？」

「そうそう、そうなんですよ」

シェラの問いに、横にあいてあつたカバンの中から一冊のノートを取り出し、おもむろにテーブルの上に広げて見せた。

「新聞でちょっと調べてみたんですけどね。ディーガが起因していると考えられる事件は、月 日を境に始まつてあるんですよ。その日以前には、それらしい事件は見つかりませんでした」

ノートには、思いのほか几帳面な文字で事件の起こつた日時と場所、概要が記入してある。事の始まりは、俺が新聞記事を見つけたあの日。

「ヤツが行動を始めたのは、割と最近だという事なんです。なので、このあたりを中心にはかなかつたかと思つて色々と探してみたんですけど……」

ページをめぐると、始まりの日以前の新聞の切り抜きと、簡単なメモ。

「かなり頑張つて調べてくれたんだ」

俺の言葉に照れ臭そうにしていた匠は、ふと真顔になつて答えた。「世界の基準の外側にいる者の気持ちは、俺たちが一番知つています。でも、ヤツはやり過ぎた。例えどんな理由があるにせよ、もうこれ以上は駄目だ。止められる奴が止めてやらなきや」

強い視線で語る妖狐の前に、真砂が「コーヒーを置いた。

「そうですね、我々のために、そしてディーガのために」

「そう。俺達、人間のためだけじゃない。真砂や匠やシェリ・ルー

や、異端とされる者達の、そして何よりディーガのために」これ以

上の凶行をやめさせなくては。

改めて全員の視線が、テーブルの上のノートに注がれた。挟まれていた新聞の切り抜きを手にして、じっくりと読んでみる。さして大きくはない切り抜きは、社会面らしい。紙面の下のほうに、小さな記事が掲載されている。

“いじめを苦に自殺か？ 遺体見つからず”

そんなタイトルだつた。

“ 日午前七時三十分頃、××市の中学校で大量の血痕が発見された。発見したのは同校職員で、いつもより早めに出勤していた。血痕が発見されたのは校舎の裏手に辺り、普段は備品倉庫にでも行かない限り、人気はないという。保護者からの連絡により、血痕は昨夜から行方の分からなくなつていてる麻生美由紀さん（一六）のものではないかとして、警察も調べを進めている。しかし現場には遺体が残されておらず、麻生さんの生死も不明のままである。麻生さんが一分の同級生に「いじめ」をつけていたとの証言もあり、今後、警察では自殺も視野に入れて捜査を進める方針”

「遺体が ない？」

「関連性はないかも知れないって思つたんですけど、それ以外に『こちら側』の二オイのする記事つて、見つからないんですよ」

「匠君、この記事の続報はないんですか？」

「それがないんです。これ以上調べるのは俺では無理なんで、ちょっと協力を頼んだんですよ。もつすぐ来ると思うんですけど」

「協力つて、誰に？」

四人がそれぞれにしゃべつていると、カウベルが来客を告げて響いた。

「あー、いたいた。悪いな、遅くなつちまつて」

「お待たせしてしまいましたかしら？」

入ってきたのは、いつぞやの夜に真砂に紹介された人狼の彼とバンシーの彼女。

「貴方達の事だつたんですね、匠君の協力者というのは。伊津留は、

話をするのは初めてでしたっけ？」

立ち上がった俺に、真砂は改めて紹介してくれた。

「彼はフリーライターの間壁一郎さん。種族はご存知ですよね。彼女はエベーナ・クロワ。ナイトクラブの歌姫です」

間壁はゴツツイ右手を差し出して、一カツと笑つて見せた。

「人狼の間壁だ。満月になつても、我を忘れる事はないから安心してくれ」

「萌木伊津留です。こちらこそよろしく」

しつかりと握手を交わす。

「真砂から話は聞いているぜ。人間にしちゃあ、なかなか根性あるみたいじゃないか」

肩をバンバン叩かれる。痛い痛い痛い、イタタタタ……あ、肩凝り治りそう。そんな俺の姿を見て、エベーナが吹き出した。

「あ、あら。ごめんなさい。つい笑つてしましましたわ」

お行儀良く口元を隠しながら笑うエベーナは、灰茶色の髪をした小柄な女性だった。

「初めてまして。でよろしいのかしら？ エベーナ・クロワですわ。ナイトクラブで歌わせていただいております、しがないシンガーです。よろしかつたら、今度聴きにいらして下さいませね」

白くて細い手と握手する。力を込めたら折れてしまいそうだ。

「ええ。ぜひ伺わせていただきます」

簡単な自己紹介を終え、席に着く。

「間壁さん、写真は手に入りましたか？」

「ああ。おつ母さんから借りて来たぜ」

抱えていた大きなカバンの中から、一枚の写真を取り出した。

「これが、麻生美由紀だ」

その写真には、ペットであるう大きな犬を抱いた少女が笑顔で写っている。ボーアッシュなショートヘアが良く似合つ、活発そうな少女である。

「記事を書かせてもらひながらつて、無理を言つて借りて來たんだ」

なるほど、そのための協力者が。フリー・ライターの間壁だからこそ、彼女の写真を手に入れることが出来たのだ。」「こんなに明るく笑っているのに……。彼女は一体、どうしているんだろう?」「

匠の独り言のような呟きに、エベーナが悲痛な声で答えた。

「彼女はもう亡くなっているわ」

「え? 知ってるんですか?」

驚いて声を上げた俺に、エベーナは寂しそうに微笑んで答えた。「いいえ。でも、私には判ってしまうの。私は、人の死を報せる妖精・バンシーだから」

「エベーナはなくなつた方の持ち物や写真に触れることで、その時の記憶や風景を“見る”力を持っているんですよ」

「そうか。だから、二人目の協力者は彼女だったんだ。」

「そのためにも、どうしても彼女の写真が必要だつたんです。それで、間壁さんにお願いして写真を借りてきてもらつたんですよ」

匠がそう言って、テーブルの上の写真をエベーナに手渡した。彼女は写真を受け取ると、深く椅子に座り直し、そつと目を閉じた。再び開かれたエベーナの瞳は艶のない、いぶした銀色に似た灰色。光を反射しない不思議な瞳で、笑顔の少女の写真を見つめた。

張り詰めた空気の中、エベーナは己に見える麻生美由紀の過去を語り始めた。

懲哭（前書き）

思い出されるのは、あの人の最期の姿。
もう一度と、自分を抱き締めてはくれない、あの人の腕……。
許しはしない。

自分から大切な人のを奪つた「人間」を許しはしない。

闇にまどろみながら彼は思い出す。初めて口に含んだ血の味。口腔に広がる甘さ、そして苦味。

「死にたくない」

「あの人はそう言った。」

「もう死にたい」

「あの人はそう言った。」

それは、どちらも本心。相反する心に揺れ動きながら、その狭間で追い詰められていつたあの人。

彼を抱き締めてくれた、優しかったあの人は、もういない。彼を愛して、温めてくれたあの人は、もうどこにもいないのだ。その事を思い出した時、彼は自分の胸の奥にポツカリと深淵が口を開いたような気になる。その深淵は、ひどく冷たいモノで満たされている。彼を抱き上げてくれたあの人手は、とても温かくて、とても柔らかかった。あの人笑顔は、彼の裡を不思議な温もりで一杯にしてくれた。愛される事を知らなかつた彼は、あの人と共にいる事で得られる温もりが、「愛」であるとは気付かなかつた。でも、あの人と一緒にいた時間は、確かに彼にとつて幸せな時間だつたのだ。

しかし幸せな時間は、唐突に終わりを告げた。いつもの時間になつても戻つてこないあの人を心配して、彼は迎えに行つたのだ。辿り着いた彼は、鼻腔を刺激する血の臭いに気が付いた。臭いの先にあつたのは、血溜まりの中に倒れたまま、動こうとしないあの人

の姿。

迎えに来た事をほめて欲しくて、温かい手に抱き上げて欲しくて、彼は血溜まりの中へ歩を進めた。まだ温かい、粘り気のある、金属的な、それでいて甘い臭いのする生命の源。彼があの人の指をなめると、ほんのわずか目を開けた。鼻を鳴らして甘える彼に、あの人は残つた力で訴えた。

「死にたく……ない」

彼に触れようとして持ち上げられた手は、そのまま彼に触れる事なく地に落ちた。跳ね上がった血の飛沫^{しぶき}が、彼の口元に付着した。初めて口にしたその味は、限りなく甘美で、限りなく苦い。それは彼の理性を速やかに狂わせていく。

視野が赤く染まつた。彼の全身に刻み込まれた、あの人の言葉。血と肉に含まれた、あの人の無念。唐突に断ち切られてしまつた未来への夢。それらすべてが、彼を狂わせていく。彼はむしろ喜んで、その狂気の波に己を委ねた。

許せないと思った。彼から大切な人のを奪つた、すべての者が許せなかつた。復讐^{しゆしゆ}をあとの人の生命に誓つた。

そして 新しい彼が生まれたのだ。否、本来の姿に生まれ直したと言つべきか。

のそり、と闇の中で立ち上がる。まだまだ力が必要だ。まだ思い出していい事があるのだから。しかしそれは、もう思い出さなくともいいのかも知れない。彼の大切なあのを、一人寂しく死なせた奴等。あの人人が追い詰められていたのに、助けようともしなかつた人間共。そう。この世に生きる人間すべてが憎い。

身を潜ませていた物陰から姿を現わす。わざわざ思い出す必要はないんだ。他の事は考えなくていい。この世の人間を殺し尽くす事。そして大切な人の思い出だけ。それだけを憶えていればいいのだ。

さあ、希望を絶望に変えに行こう。狩りを始めるのだ。彼の味わつた絶望を与えた。彼の抱える虚無を与えた。

* *

「そう言えばさあ、最近、聞かなくなつたよねえ」

ファーストフード店のトイレを占拠し、化粧を直しながら氣だるそうに会話を交わす、数人の女子高校生。

「聞かなくなつたって、何が？」

「ほら、アレよアレ。例の事件だよ」

髪を整え、マスカラを付ける。眉を描き直し、口紅を塗る。

「あー、どつかで捕まつたんじゃねえの？」

「えー？ そんな話、聞いてないよお」

「そんじゅ、どつかで死んじゅつたんだよ、さひと。ねえ、それよりさあ、これからどうすんよ？」

それぞれの荷物を手にすると、甲高い声で騒ぎながら店から出していく。

「カラオケにでも行く？ あ、でも、あたし今日お金ないや。どうしようつか？」

「テキトーにオヤジでも捕まえてやあ、おじりせせちやおつぶ」

そのうちに彼女達はターゲットを発見したらしく。眞面目そうなサラリーマンの青年に駆け寄つた。

「ねえねえ、お兄さん。あたし達これからカラオケに行くんだけどさあ、一緒しない？ 今ちょっと、お財布ピンチなんだよねえ」

青年は事態が良く飲み込めていらないらしく、意味不明な事を口走りながら、女子高生達に引きずられるようにして移動していく。

「い、いや、君達……。一体、何なん……。僕は、あの……」

キヨドキヨドと周りを見回しながら、怯えたような表情を浮かべるサラリーマン青年。そんな様子を目に見て、少女達の嗜虐性に火が点いた。目配せすると、カラオケ店ではなく、その脇の細い路地へ入つていく。

「き、君達、何をする……？」

壁際に追い詰められた青年は、ズリ落ちそうになる眼鏡を押され、鞄を抱えて立つている。

「何だつたらさあ、別に付き合わなくていいからさあ。お小遣いだけちょうどいよ」

「そうそう。お兄さん、お金持つてるんでしょ？」

少女達の言葉に、ようやく青年が反論した。

「何を馬鹿なことを言つているんだ。第一、どつして僕が、君達にお金を渡さなくちゃならないんだ。こんな事して、恥ずかしくない

のか？」

手前に立っていた女子高生の顔付が変わる。

「ゴチャゴチャ、うるせえんだよ。黙つて大人しく財布出せよ」「サクサク出しちゃいなよ。それともさあ、何なら今ここで『痴漢でーす!』って叫ぼうか? お兄さんみたいな奴の言うことなんか、誰も信用してくんないよ?」

自分達の優位を感じて疑わない、まだ幼いはずの濁つた瞳。サラリーマン青年は口をつぐみ、うつむいている。

「判つたら、さつさと金出しなよ。こつちも暇じゃないんだからさ」「青年は答えない。街灯の光が眼鏡のレンズに反射し、その表情は読み取れない。

「おい、聞いてんのかよ!?」

乱暴な言葉を投げ付けていた少女が、ふと口をつぐんだ。

「え? 何、どうしたの?」

「今、誰かしゃべつた?」

「ううん、別に。誰も話してなかつたけど……」

最初に異変に気付いたのは、セミロングの髪を派手な赤茶色に染めた少女だった。

「誰か、いるのかよ?」

背後を振り返り、暗がりに向かつて声をかける。

「何に?」

「誰かいたの?」

側にいた少女達も何かを察したらしく、不安気に振り向きながら、せわしなく口を開く。

「ケタ」「

光の届かない、吹き溜まつた闇の中から、何者かの声が聞こえた気がした。

「誰だよ!?」

「そんなトコに隠れてんじゃねーよ! 出て来い!...」

コンクリートの壁に発育途中の少女達の声が響く。その声は、明

らかに恐怖の色を孕んでいた。

カシツ、カシツ、カシツ 。

硬く鋭いものがアスファルトを搔く音。闇が一点に凝縮し、膨れ上がつた気がした。

「ミ ヴ、ケタ……」

人語を語る形には出来ていなアゴから、たどたどしい言葉が漏れる。

「な、何コレ！？」

暗がりから現れた、その姿。泥色の毛皮。鈍く光を反射する太い爪。めくれ上がった口唇から覗く乱杭歯。

「ね、ねえ 。「イツつて、もしかして」

「そんな、まさか」

怯えながら震えている少女達を、黄色く濁つた眼で見据えながら近寄つてくる獣。不気味に蠢く、奇怪な蛇。

「ミ、ツケ、タゾ 。ソノ、フクダ。シツテ、イ、ルゾ 」

明瞭な発音ではない。片言の人語。しかし、意味が通じるだけに、余計に不気味さが募る。息を飲んで立ち尽くしている少女達の背後から、不意に笑い声が弾けた。

「あつはは、おつかしいつたら。さつきまでの威勢の良さは、どうしたよ？」

先程まで、目の前の少女達にいたぶられていたのと同じ人物とは、とても思えない豹変振りである。

「お嬢ちゃん達、ちつとオイタが過ぎるねえ。黙つて見てようかとも思つたんだけど、それも、あんまりだしな」

かけていた眼鏡を放り投げ、ネクタイを緩めながら不敵に笑つているのは、サラリーマン青年。上着を脱ぎ捨てて肩を回しながら、凍り付いている少女達に告げた。

「これに懲りたら、少しは良い子にしてるよ。これからヤバい事が始めるから、早く行け」

その言葉にディーガが反応した。

「ナゼ、ジャマ、ヲスル。ソノフクダ。サガシタゾ。シンデ、シマツタアノヒトト……オナジフクダ」

逃げ出そうとしていた女子高生の一人が、立ち止まって振り返った。

「死んじゃったあの人って、まさか、麻生？　あいつ、勝手に死んだクセに何だつて」

「オマエ、シツ テイルナ……。アノヒトヲ、シツ テイルナ！」

「馬鹿野郎！　立ち止まらずに、早く逃げろ！！」

何の予備運動もなく、ディーガの巨体が跳んだ。着地したディーガが少女の退路を断つ。

「オマエカ？　オマエガ、アノヒトヲ　　オマエガ、アノヒトヲロシタノカ！！」

その怒りの波動が、物理的な衝撃となつて襲い掛かってくる。仲間から取り残された少女は、恐怖に目を見開き、ズルズルと腰を抜かして座り込む。

「あ、あたしのせいじゃない！　あいつが、麻生が勝手に死んだんだ！　あたしのせいじゃない！！」

壊れた人形のように首を振りながら、自分のせいではないと繰り返す。

「ちつ！」

舌打ちをした青年は、アスファルトに座り込んでいる少女とディーガの間に割り込む。

「だから、さっさと逃げろって言つたんだ」

「ジャマヲスルナ！　ソノオンナヲ、コツチニヨコセ！」

短時間のうちに、随分と滑らかに人語を話すようになつてきている。物凄いスピードで学習しているのだろう。

「悪いな。このお嬢ちゃんを、お前にくれてやるわけにゃ、いかねえんだ」

背後に少女をかばつた青年の姿が、徐々に変化していく。瞳が縦長になり光を反射する。脇に垂らされた両手が、バキバキと音を立

てて変わつていつた。指が太くなり全体的に黒い毛に覆われていく。鋭い爪が伸び、口許には長い犬歯が覗く。

「お嬢ちゃん、良く覚えておきな。」この世の中、やつた事とやられた事の釣り合いは、バランスが取れるようになつて出来る。その時になつて、やつてません、知りませんは、通用しねえんだぜ」

その言葉は、果たして彼女の耳に届いたのか……。

闇との対峙（前書き）

いよいよ全面対決だ！
もうやめる、俺達が止めてやるから。
これ以上、罪を重ねるんじゃない！
クライマックス突入！！

その知らせが届いた時、俺達はまだ「仮面舞踏会」に揃っていた。エベーナの力によつて知つた、麻生美由紀の最期。そのこ事に俺達は複雑な思いに包まれていた。

ガロンッ！ ガロロンッ！

店内に漂う静寂を打ち破るカウベルのけたたましい音。ドアを蹴破る勢いで入ってきたのは、店の常連である顔なじみの男性とガルだつた。

「出たぞ！ 阿久から知らせが来た！」

「かかったのか？」

匠が立ち上がりて問い合わせる。

アフィエルがうちに来た次の日から、「仮面舞踏会」のメンバーが「おとり」になつて街を徘徊していたのだ。そして、それが今夜、ヒットしたのだという。

「場所は？」

間壁も立ち上がりてている。

「何のために俺がいると思つてんだ。大丈夫だ。引っかかったんなら、逃がしゃしねえ」

力強くガルが応える。

「急いだ方がいい。どうやら、逃げ遅れた人間がいるらしい」

「馬鹿！ それを早く言え！ 真砂とエベーナは、ここに残つてくれ。何かあつた時に、この店で連絡を取り合おう。匠君は、街に散らばつているメンバーに状況を伝えてくれないか。どんな方法でも、それは任せる」

シェリ・ルーが矢継ぎ早に支持を出していく。

「判りました。それじゃ、狐火を使って、皆に報せます。万が一、突破された時の事を考えて、周辺に待機しているように伝えればいいんですね？」

匠は身をひるがえすと「仮面舞踏会」を飛び出していった。さすがは、狐が正体だけあってフットワークの軽い事。

「私はここで、真砂さんと一緒に皆さんを待っていますわ。私が行つても、かえつて足手まといになつてしまつだけですから」

「そうですね。エベーナと一緒に、皆さんが帰つてくる準備をしておきましよう」

「ああ、頼む。間壁さんは一緒に来て下さい。伊津留は」

俺は麻生美由紀の写真を胸ポケットにしまつと、立ち上がつた。「俺も行くぜ。あんな話を聞いて、このままとこゝ訳にもいかんしな。」「人間」として、行かせてもううだ

「そうか。よし、それじゃ、行こう。ガル、案内を頼む

「仮面舞踏会」を飛び出した俺達は、先頭を走るガルの後を追いかけて走つていいく。どこをどう走つたのか。側から見ればかなり異様なこの集団は、誰かに見咎められることもなく、駅付近の繁華街に辿り着いていた。この時の事は、後になつても良く思い出せない。多分「仮面舞踏会」と同じく、異空間をつなげてあつたんだと思う。本来かかるはずの時間を大幅に短縮して、俺達は現場に辿り着いた。

「コタ！ 大丈夫か！」

ガルが鼻先で示した路地の奥に向かつて、間壁が大声で問い合わせた。

「馬つ鹿野郎！ 来んのが遅エよ！ それから、俺の事を『コタ』って呼ぶんじゃねえ！」

それに答える声も、間壁に負けず劣らず大声だ。

「何でえ。マジで大丈夫そうじゃねえか」

おいおい。その言葉の中に、本気の残念さが伺えるぞ……怖えなあ。

「どうやら、結界はまだ張られていないようだな。それだけの余裕がないのか、なりふり構つていられなくなつたのか。それとも、そんな事はもうどうでもいいのか」

シーラが咳きながら路地へ入つていった。

「つて言つたつて、このままにしといて大丈夫なのかよ？ 他の人間が入つて来たりとか」

「俺の心配に、ガルが答えてくれた。
「気にしなくていいぞ。匠達が、外側から結界を張つてくれるらしいから」

その瞬間、地面スレスレに不思議な炎が灯つた。

「いつまでかかってんだよ！ 早くしろよ！」

路地の奥からお呼びがかかつた。「今行くさ！」

俺達は匠の狐火を越え、声のする方へと進んで行つた。

「よお、コタ。どんな感じだ？」

ディーガを壁に向かつて投げ飛ばしていた男が振り向いた。

「遅えつつってんだろ、馬鹿野郎！ それから、コタつて呼ぶな！」

俺の名前は『虎太朗』だ！」

その顔や腕などのむき出しになつた肌には、名前の通り、虎のような模様が浮かび上がつてゐる。縦長の瞳はギラギラと光り、口許からのぞく牙が恐ろし氣だ。

「こつちにや、足手まといにしかならないおまけがくつついてんだ。助けに来んなら、サクサク来いつてんだよ！」

背後には、腰を抜かしているらしい少女の姿があつた。

楽しそうに腕まくりをしながら、間壁が虎太朗に聞い掛けた。

「そいつが、ターゲットなのか？」

「そうちしげな。そのお嬢ちゃんの事を、寄越せ寄越せつて、ウルセーのよ」

立ちはだかる俺達を見て、ディーガは怒りに全身の毛を逆立てた。

「ナゼダ……？ ドウシテ、ジャマヲスル！ ソイツガ、アノヒトヲ「ロシタンダ！ ナゼ、ワタシノジャマヲスルンダ！？」

「わッ！ しゃべつてる！ ディーガの奴、しゃべつてるよー？」

「だから、お前にこのお嬢ちゃんを渡せねえつて言つてんだろ？」

学習しろよ

虎太朗の後ろで座り込んでいた少女は、俺達の姿を見て少し安心したらしい。

「あ、あ、あんた達、助けてよ！ 何なのよアイツ！ 何なの？ 一体何なの？ あ、あんた達、何者なのよ？ 人間なの？ あんた達も化け物なの！？ 何でもいいから、早くあたしを助けてよ！！」

血走った目を見開き、口から泡を飛ばす勢いでまくし立てた。だが、俺達は誰も彼女の方を見もしなかった。

「悪いけど、俺達は君を助けに来たわけじゃないんだ」

あんまり優しくない口調で俺が答える。

「ちょ、ちょっと、何言つてんのよ！ それじゃ、何のために来たつて言つのー？」

「うるせーよ、嬢ちゃん。俺はなあ、お前さんみたいな人間は嫌なんだよ」

ガルが冷たく言い放つ。

「ソイツヲ、タスケニキタワケジヤナイ？ ナノニ、ワタシノジヤマヲスルノカ？ オマエタチハ、ナニモノダ？」

ディーガが用心深く、こちらをうかがう。奴には理解できないだろう。そりやあ、そういう。だけど、本当に俺達は少女を助けに来たわけじゃないんだ。シェリ・ルーが一步前に出ると、おもむろにディーガに語りかけた。

「俺達は、お前と同じモノだ。天の定めた理から外れた、種族としての枠から外れたモノだ。今ここにいる連中は、あの娘を助けに来たんじゃない。お前を救いに来たんだ。お前がこれ以上罪を犯さないようだ。お前の魂が、これ以上闇に墮ちてしまわないように」

「ワタシノ……タマシイ」

意外な言葉だったのだろう。

「お前、麻生美由紀さんが可愛がっていた、レックスだろう？」

俺は胸ポケットから、あの写真を取り出して見せた。

「レックス　。ワタシノナマエ……レックス……アノヒトガツケ
テクレタ　」

「麻生美由紀のな、おっかさんか言つてたよ。彼女が戻つて来なかつた夜、可愛がつてた雑種のレックスもいなくなつちまつたつて。随分と寂しがつてたよ」

間壁が言葉を繋いだ。

「あんた達、何なのよ？　そんな事、どうだつていいじゃない！　早くそいつを殺しちゃつてよ！」

別の意味でパニックに陥つた少女が叫ぶ。だけど、誰も振り向かない。何も答えない。

「何でよ！　あたしは人間なのよ！　どうして人間じゃなくて、化け物のそいつを助けるなんて言つの！？　あたしの事を助けなさいよ！」

ま、ね。常態であるなら、それが本当だと思つよ。どう見たつて

この状況は、「怪物に襲われている女子高生」だからな。

「あたしが何したつて言つのよ！？　あたしは何も悪くないじゃない！　麻生は勝手に死んだのよ！　あたしが殺したわけじゃない。あいつが勝手に死んだのよ！」

状況に体が順応し始めたのか、抜けていた腰が元に戻り始めたのか、四つん這いになりながらにじり寄つてくる。

「ナニモシテイナイダト？　ワタシノタイセツナ、アオノヒトヨコロシテオイテ、ナニモシテイナイダト！？　フザケルナ！！」

ディーガが怒りの咆哮を上げる。蛇が赤い舌を吐き出し、身をくねらせて威嚇する。

「オマエガコロシタンダ！　オマエガ！　オマエガ！！」

四肢をバネのようにたわませ、ディーガがこちらに飛び掛つてくる。

「つ！　だから、落ち着けつて！」

間壁がぶつかってきたディーがを受け止める。長大な蛇が襲い掛かろうとした瞬間、シェラの指が印を切つた。蒼い光で紡がれた神

聖陣がディーガの周囲に現れる。

「ギャンツー！」

陣に弾き飛ばされたディーガは、アスファルトに叩きつけられた。俺はこの場所に着いてから、初めてその少女の姿をまともに見た。両手の指先を飾っていたネイルは剥がれ落ち、あちこちに散らばっている。さして大きくはない目を縁取っていたマスカラとアイシャドーは、涙と汗に溶けてその顔を汚している。

「自分は何も悪くない。君は今、そう言つたな」

地面に張り付いたまま、彼女は俺を見上げた。

「そうよ。あたしは悪くないじゃない。勝手に死んだ麻生が馬鹿なのよ。あたしが殺した訳じやない」

「そうだな。確かに君が言う通り、麻生美由紀を殺した訳じやない。でも、だからって、君の犯した罪まで消える訳じやない」

俺の言葉にディーガが噛み付いた。

「ウソダ！ アノヒトヲコロシタノハ、ソイツニキマツテイル！
ウソダ、ウソダ！！」

俺は、ディーガの復讐にかける果てしない執念を感じて、切なくも哀しくも思つた。

「ディーガ いや、レックス。お前には納得できないかもしれないが、彼女は麻生美由紀を殺してはいなんだ」

「ウソダ ！！」

路地にディーガ＝レックスの悲痛な叫びがこだました。

＊＊

これはエベーナが語つて聞かせてくれた、あの日の出来事。

放課後の音楽室で美由紀は何かを探していた。教卓の下や机の間を廻り、掃除用具入れの中まで覗いてみた。

「おかしいなあ。ここじゃないのかなあ」

さらに深く掃除用具入れを覗き込んだ瞬間、背後から腰を強く蹴

り付けられた。

「ああつ！？」

モップやホウキをガタガタと鳴らしながら、美由紀は掃除用具入れの中につんのめつてしまつた。背後からは、数人の女子の高い笑い声が響いている。

「何するの……」

床に座り込んでしまつた姿勢で、美由紀は自分を蹴り付けた相手を見上げた。

「あーら。誰かと思ったら、麻生さんじやない。気が付かなかつたわ

「あたしなんて、てつきり、しまい忘れたモップかと思つちゃつたわよ」

ひとしきり美由紀を囲んで笑つた後、リーダー格らしい少女が何かを取り出した。

「お前が探してんの、コレじゃねーの？」

手のひらに乗る程の小さな箱。グリーンのリボンがかけられた、可愛らしい箱だ。

「あ！ それ！」

差し出した美由紀の手を、少女の一人が払い除けた。

「なあに、こいつ。せつかく奈緒が拾つといてくれたのに、礼も無しかよ」

奈緒と呼ばれたリーダー格の少女は、手の上でその箱をポンポンと弾ませている。

「やめて！ 返して！」

「へえ。そんなに大事なモンなのかよ？」

奈緒は美由紀の前にしゃがみこむと、箱を田の高さに掲げて見せた。

「わざわざ拾つて持つてきてやつたんだ。タダでお前にくれてやる訳には、いかねえよなあ。いくらで買つよ？」

美由紀の目に、困惑の色が広がつた。

「そんな。お願い、返して」

立ち上がつて箱を取り戻そうとした美由紀は、側にいた女子生徒に足元をすくわれた。

「きやああ！」

前のめりに倒れこんだ美由紀の頭を、別の女子生徒がモップで押さえつけた。

「何が『返してえ』だよ。『返して下さい』だろ？ が。言葉遣いがなつてねえな」

周囲にいた女子生徒達が、笑いながら、掃除用具入れの中にあつた雑巾を投げ付ける。

「やめて！ やめてよ！ ビリして、こんな事をするの！？」
体を押さえ付ける数本のモップに抗い、投げ付けられる雑巾を手で除けようとしながら、美由紀は女子生徒達に訴えかけた。

「どうして？ お前が、ウゼエからに決まつてんだろ。当たり前の事、聞いてんじゃねえよ」

「目障りなんだよ」

「学校、来んなつつてんだろ」

頭上から降つてくる言葉のナイフの数々。

「どうしてよ、どうして？ 私が何かした？ 私があなた達に、何かしたの？」

美由紀の必死の問い掛けは、奈緒の冷ややかな答えにかき消されてしまつた。

「別に。あたし達もさあ、毎日ストレス溜まる訳よ。だから、あんたでストレス発散してるの。判つたあ？」

その声と共に、手についていた箱を美由紀の目の前に落とした。

「学校に来るなら、大人しく、あたし達のストレス発散に付き合つしかねーよなあ」

奈緒は冷笑を浮かべながら、落とした箱をゆっくりと踏み潰した。

「ああつ

無残に潰れた箱に、美由紀が痛々しい声を上げた。

「こんなモンなあ、大事そうに学校にまで持つてくんないよ。馬つ鹿じゃねえの？ そんなに大事なら、落としたりしてんじゃねえよ」自分の踏み潰した箱を掴み上げると、背中越しに開いた窓から投げ捨てた。声を失っている美由紀を見て、少女達はまた、甲高い笑い声を上げた。口々に罵倒の言葉を吐きながら音楽室を出て行く。ドアに手をかけ、奈緒が振り向いて言った。

「美由紀ちゃん。明日からも、あたし達のストレス発散、よろしくね」

彼女達が去った後、うずくまつたままの美由紀の口から嗚咽が漏れた。握り締めた拳で床板を叩く。

「どうして？ どうしてよ？ ねえ、どうしてなの？」

答えの返つてくるはずのない問いを繰り返す。意味もなく、訳も分からず、このままずつと、奈緒達のグループに虐げられ続けるのか。

フラフラと立ち上がった美由紀は、箱が投げ捨てられた窓枠へ近寄つて行った。涙で曇った美由紀の目が、窓のひさしの部分にかろうじて引っかかった状態になっている、潰れた箱を発見した。

「あつた」

生氣を失っていた彼女の顔に、一瞬、明るい光が差した。音楽室の中を見回し、転がっていたモップを拾い上げた。窓枠から身を乗り出し、モップの柄で箱を引き寄せようと試してみる。しかし長いモップの柄は、美由紀の思い通りには動かず、ともすれば微妙なバランスで引っかかっている箱を落としてしまいかねない。

「くつ……。上手くいかない……」

落ちれば、校舎の下へ捨いに行けばいいだけの話なのだが、そのときの美由紀の頭には思い浮かびもしなかつた。

「あと、もう少しなのに」

美由紀はモップを放り出すと、窓枠を乗り越えた。頭の中には、小箱を手にすることしかない。そのための手段は、美由紀にとつてどうでもいい事だった。窓枠に手を掛けて体を支えると、美由紀は

箱に手を伸ばした。

「もう、ちょっと……」

ギリギリまで両腕を伸ばす。美由紀の震える指先が、小箱のリボンにかかりつた。攀りそうになる指が、懸命に箱を手繰り寄せた。

「やつた！」

美由紀の顔が喜色に輝いた。その瞬間。

彼女の体を支えていた手が、汗ですべり、窓枠から離れた。何かを考える暇もなく、ただ掴んだ箱だけを胸に抱え込み、美由紀の体は宙に投げ出されていた。やがて 鈍い音が響いた。

**

「だから、彼女は麻生美由紀さんを、直接殺してはいらないんだ」俺の話が終わると、地面に座り込んだままだつた女子高生、麻生美由紀を苛めていたグループのリーダー格だった少女・奈緒は力なく呟いた。

「あ、あたし達が悪いんじゃないじゃない」

確かに、彼女が直接手を下した訳ではない。それでも。

「それでもやつぱり、君達にも原因があるんだ」

長い話を聞いて、ディーガ・レックスも言葉を失くしていた。

「ソンナ」

「お前が学校に着いたのは、それから間もなくの事だ。だから、麻生美由紀の最期に間に合つたんだ」

ディーガ・レックスに、シェリ・ルーが静かに声をかけた。

「お前が怒りに任せて、目の前にいる彼女を殺しても、美由紀さんは喜ばない。それは、お前が一番良く知つてははずだ。美由紀さんと一緒に長い時間を過ごし、そして 彼女の血肉を身裡に取り込んだお前なら」

新聞の記事にあつた、痛いが見つからなかつた謎。その答えは、とても単純な事だった。アフィエルが言つていた、妖獣ディーガの魂の気配を追えなくなつた理由。

「亡くなってしまった美由紀さんをそのままにしておけなかつたお

前は、彼女の血を口にした。そして　彼女の遺体を、喰つたんだ」

人間の血肉は、正邪を問わず彼等の理性を狂わせる。

「ソンナ　。ソノ女ガ、アノ人ヲ殺シタンジヤナイ？　ナラバ、
私ノコノ身裡ニアル、抑エヨウノナイ怒リハ、私ノ身ヲ焦ガス、狂
オシイ怒リノ炎ヲ、ドウシロト言ウノダ！　ダメダ！　ソンナ事ハ
許サナイ！」

ディーガ＝レックスの体が一回り膨れ上がった。恐ろしい勢いで
学習しているディーガ＝レックスの言葉は、聞いていてもはや何の
違和感もない。

「許スモノカ！　今更、何ヲ言イ繕ツテモ、アノ人ハ戻ツテ来ナイ
ンダ！　ナノニ、ソノ女ハ生キテイル。ソンア事ガ、許サレルハズ
ガナイ！」

ディーガ＝レックスの背中が盛り上がり、まるで牙のよう、刃
のよう（あれば、骨なのか、もしかして？）鋭い突起が、毛皮を
突き破つて現れる。

「おいおい。これ以上、どんな変身をしようってんだよ？」

虎太朗が呆れ顔で呟いた。

「やめる、レックス！　これ以上、己の魂を血で汚すな。もうやめ
るんだ！」

間壁の叫びに、レックスが悲痛な答えを返してきた。

「私ノ魂ハ、スデニ血塗レダ！　コノウエ血デ汚レタカラト言ツテ、
ドウト言ウ事モナイ。ドウセ私ノ魂ハ地獄ヘ墮チル。ダガ、アノ人
ヲ死ニ至ラシメタ者共ヲ、一人残ラズ殺シテカラダ！」

ディーガ＝レックスは全身の毛を逆立て、俺達に向かつて吼えた。
獸の眼に涙腺があるのなら、今、奴は血の涙を流しているだろう。
麻生美由紀の死は事故だった。彼女の仇を討つ事だけを思っていた
ディーガ＝レックスは、今になつて、その標的を見失つたのだ。しかし、間違つた仇討ちはやめさせなくてはならない。奴の魂が、こ
れ以上壊れてしまわないように。今の奴の醜い姿は、そのまま奴の
魂の壊れた姿だ。

「レックス。地獄へ行くなら、お前一人で行け。お前の道行きに、
彼女を付き合わせるんじゃない」

ショリ・ルーの声が、静かに、けれど厳しく空間を貫いた。

「何……ダト?」

思いもかけぬ事を言われたディーガ＝レックスは、攻撃態勢に入
つたまま固まった。

「お前がこれ以上罪を重ねれば、お前の魂だけじゃない。お前の事
を心配して、ずっと側にいた、美由紀さんの魂も罪に染まるんだ」
ショラの言葉は、ディーガ＝レックスの胸に届いたようだ。

「怒りと憎しみで墨つてしまつたお前の眼には“見え”ない。彼女
はずつと、お前の側についていたんだ。お前がやつっていた事も、全
部知つているぞ。」のうえ美由紀さんを、更に苦しめたいのか?」

俺達がディーガ＝レックスを説得している間に、奈緒の抜けてい
た腰が治つたらしい。誰も自分の注意を払つていない事を確かめる
と、何とか逃げ出そうと動き始める。

（何なの、コイツ等。何、話してんだよ？ 理解できねえよ
ジリジリと、その場から離れようとする。

（「マイツ等、まともじやないよ。さつさと殺しちまえよ。こんな奴、
さつさと殺しちまえよ。こんな奴、こんな奴

「さつさと殺しちまえよ！ こんな奴！ こんな化け物！ サツさ
と殺してよ！ ！」

過去からの光（前書き）

俺達の前に、ディーガがいる。

悲しみに打ちひしがれ、愛する者を狂わんばかりに探し求める孤独な魂……。

見るんだ、ディーガ！！

お前のために苦しみに耐えてくれていた人がいる事を、お前は知らないではいけない！！

奈緒の唐突な叫びのために、その場にいたすべての者の意識が逸れた。その一瞬の隙をついて、『ディーガ』レックスが俺達の間をすり抜ける。

「！ レックス！」

「キヤアアア！」

アスファルトの路面に押し倒され、手足をガツチリと固定されている奈緒。その彼女の上にのしかかり、鋭い爪の生えた四肢で獲物を捕らえている『ディーガ』レックス。

「やめる、レックス！」

「やめるんだ！」

あお向けに押さえつけられた奈緒の脇腹には、『ディーガ』レックスの背中から生えた刃が喰い込んでいる。蛇は長さも太さも倍ほどに変化している。身の丈を超える、奈緒の鼻先で舌を吐き出し威嚇している。

「私ノ側ニ、アノ人ガイル？ 嘘ダ！ アノ人ガ側ニイテクレティルノナラ、私ニ判ラナイハズガナイ！ ソンナデタラメヲ言ツテ、私ヲダマソウトシテモ、無駄ダ」

牙をむき出して、俺達の反論する。顔を引きつらせ、涙を流している奈緒を見下ろして『ディーガ』レックスは言った。

「私が怖イカ？ 私ガ恐ロシイカ。私ハ醜イダロウ。ダガ、才前ト私ニ、ソレ程ノ違イハナイ。姿ヲドレ程飾リ立テテモ、才前ノ魂ガ放ツ腐臭ハ、私ト同ジモノダ」

奈緒は歯を食いしばり、喉からうめき声がもれている。そんな奈緒に顔を近づけ、舌をダラリと垂らして、『ディーガ』レックスが更に言い募る。

「私ヲ、化ケ物ト言ツタナ。ソウダ。私ハ、天地ノ枠カラ外レタ、化ケ物ダ。ナラバ、才前ハ何ダト言ウノダ。私ハ、才前ガアノ人ニ

シタ事ヲ知ツテイルゾ。自分ヨリ弱イモノヲ虐ゲテ、ソンナ自分ヲ
自慢シテイルヨウナ、ソンナオ前ノ心ヲ何ト言ウカ知ツイノカ？

オ前ノ心モ、私ト同ジ化ケ物ダ」

俺はポケットから、ある物をつかみ出した。

「レックス！ それ以上、自分の魂を貶めるな！」

ディーガ＝レックスの意識が、俺に向いたのを感じる。

「これが何だか判るか？ 美由紀さんが、何としても取り返したかつた物だ」

俺の手のひらにあるのは、緑のリボンがかかつた潰れた小さな箱。「良く見てみる、レックス！ 彼女がどうして、この箱にこだわったのか！」

リボンを解く。包装紙を破る。箱のふたを開ける。

「見ろ！ これが何なのか、お前は見なくちゃいけない」

俺が箱から取り出したのは、オレンジ色をした首輪。ゴールドの金具に留められた、シルバーのプレートが懸けている。光を反射して煌くそのプレートには、「REX」と飾り文字で彫り込まれている。

「あの日、美由紀さんが亡くなつたあの日は、レックス、お前の誕生日だつた。憶えているか？ これは、お前のために彼女が用意したプレゼントだ」

これだけが、母親の元へ戻つてきたのだという。間壁が話を聴きに行つた時に、写真と一緒に借りてきたものだ。

「今更、ソレガ何ダト言ウノダ」

視線と意識だけを俺に向け、ディーガ＝レックスが吐き捨てた。

「シェラ 賴む」

背中に伝わる気配で、シェラがうなずいたのが判る。

ファササ……。優しく空気が揺れる。ディーガ＝レックスの目が見開かれる。路面に押さえつけられた奈緒の震えが、止まる。見なくても判る。シェラの シエリ・ルーの背中に、紅の翼が開いたのだ。薄明かりに浮かび上がる、燃え立つような四葉の花弁。

「未だ光を見出さぬ魂

耐え難き痛みを耐え

れんごく
煉獄に身を縛る魂よ

今ひと時 仮の器に宿れ

伝えられぬ想いを伝えよ 語られぬ言葉を語れ

我 死を司る天使

アズラエル シエリ・ルーが導く

萌木伊津留の裡へ」

広げられた翼が、かすかに震える。俺の胸の奥に温かいものが生まれた。それがジワジワと広がっていき、やがて俺の裡を一杯にする。それに従がって、俺の意識は主人格の座を譲り渡す。

「レックス……。もうやめて」

俺の口を借りて、俺のものではない声が、俺のものではない言葉を語る。

「レックス。私の声が聞こえる?」

奈緒を押さえつけたままのディーガ=レックスの瞳に、驚愕の色が浮かんだ。

「美、由紀ナノカ……? 本当に? 本当に美由紀ナノカ?」

俺の体が、ゆっくりと両腕を広げた。

「おいで、レックス」

奈緒の手足をガツチリと拘束していたディーガ=レックスの脚が、彼女の体から離れる。奴の目には、俺の姿にダブるようにして、麻生美由紀の姿が見えているのだろう。

「ごめんね、レックス。私のせいで、あなたに辛い思いをさせてしまつて。もう、いいのよ。私が死んだのは、事故だったの。奈緒さんのせいじゃないわ」

ヨロヨロと近寄つてくるディーガ=レックスの前に膝をつく。

「ダメダ、美由紀。アノガガイナケレバ、美由紀ガ命ヲ落トス事ハナカツタ。ソレハ許セナイ」

俺 いや、「俺」という器に宿つた美由紀の魂は、悲しげにディーガ=レックスに訴えかけた。

「私はね、レックス。生命の灯が消えた時から、ずっとあなたの側にいたのよ。あなたがやつてきた事も、あなたが考えていた事も、全部知っているわ。私の力が足りなかつたばかりに、罪を犯すあなたを止める事が出来なかつた」

美由紀は俺の体を借りて、ディーガ＝レックスの頭を抱き寄せた。「全部？ 私ノヤツテキタ事ヲ、全部見テキタノカ？ コンナニ醜イ私ヲ、ズット？」

腕の中から逃げ出そうとするディーガ＝レックスの頭を、美由紀はしつかりと、しかし優しく抱き締める。

「ええ、全部。あなたが罪を犯したのは、私のため。だから、私が地獄に墮ちるのは構わない。でも、レックス。あなたの魂を、これ以上、罪で染めるのはやめて」

そんな美由紀の魂とディーガ＝レックスの姿を、俺の魂は少し離れた場所から見ている。応急处置的に素人の俺の身体を「器」にしているために、魂はとても不安定な状態にある。ちょっととした衝撃で、器とのリンクが切れてしまう可能性もあるのだ。そのため、俺の魂はシェリ・ルーの力で護られている。余計なモノを脱ぎ捨てた俺の魂は、よりシェリ・ルーの本質と近しい存在になつている。（もしかするとシェラにとって、この世にある存在はすべて、こんなふうに感じるかもしねえな）

こうして見てみると、俗に「オーラ」と呼ばれる生命力の輝きが良く判る。間壁や虎太朗、ガルのオーラの輝きといったら。そばでうすくまつっている、奈緒のオーラとは比べものにならない。しかも奈緒の場合、現在おかれている立場と、これまでやつてきた行いが反映しているらしい。鈍色にくすんだ暗いオーラ。ディーガ＝レックスの、濁つた血のような赤黒いオーラ。そして、シェリ・ルーの体から立ち昇る、綺羅綺羅しい白銀のオーラの美しさ。

（ああ、何て綺麗なんだろう ）

アフィエルはシェラの事を「墮天使」と呼んだけれど、本当に墮ちた天使なら、これ程までに美しいオーラを保てるもんなんだろう

か？

（いつぺん、アフィエルの野郎のオーラを見てみてえもんだよなあ）
オーラの輝き・煌きは、そのまま本人の魂の強さだ。魂の輝きが
強ければ強いだけ、弱ければ弱いだけ、それはオーラに反映される。
それだけではない。魂が清ければ清いだけ、魂が壊れれば壊れただ
け、姿形に表れるのだ。

そう。今のディーガ＝レックスのように。

奴の本来の姿が、今あるものではないという事は、オーラの状態
を見ていれば判る。赤黒い濁んだオーラの隙間から、わずかに漏れ
る別の色のオーラ。

（あの姿は、ディーガ＝レックスの本来の姿じゃないのか？）

俺がそう感じた時、俺の体の中にいる麻生美由紀が、奈緒に向か
つて語り始めた。これまでの恨みつらみを彼女にぶちまけるのかと
も思つたが、どうやらいつでもないらしい。美由紀は静かに語り始
めた。

「奈緒さん。あなたにお願いしたい事があるの。これ以上、私やレ
ックスのような思いを誰にもさせないで」

よろけながら立ち上がった奈緒は、その言葉に疲れた視線を向け
た。

「何を……言つてる？」

ディーガ＝レックスの「口」「口」した毛皮を優しく撫でながら、美

由紀は奈緒に訴えた。

「あなたには、レックスの姿が恐ろしい怪物に見えたはず。それと
同じように、いじめられている時、わたしはあなたが怖かった。今
になつて思えば、何がそんなに怖かったのか。同じ人間なのにな
すでにこの世の住人ではない美由紀の言葉を、奈緒はどのような
気持ちで聞いているのか。

「あなたは、レックスと出会つ事が出来た。だからこそ、あなたに
お願いしたいの。レックスの姿は、罪を重ねた魂の醜さ。あなたも
このまま、罪の意識のない罪を重ねていけば、いつかはレックスの

「い魂になってしまふかもしれない」

奈緒に対して言葉を続ける美由紀に、ディーガ＝レックスが唸り声を上げた。

「美由紀！ コンナ女ガドウナロウト、ソンナ事ヲ心配シテヤル必要ナドナイ！ 腐ツタ魂ヲ抱エタママ、地獄ニ墮チレバインダ！」

そう叫んだディーガ＝レックスに、美由紀が厳しく諭した。

「それは違うわ。私にはあなたがいた。だけど彼女にはいなかつた。今ここで、私はあなたを救う事が出来るけれど、彼女が墮ちた時に救つてくれる人は、いないかも知れない。だからこそ、奈緒さんには、今気付いていほしいのよ。自分のやつてきた事が、いかに相手の心を殺すのかを」

「私に残された時間は、そう長くないのよ。もうすぐ、行かなくちゃいけないの」

「嫌ダ！ モウ離レルノハ嫌ダ！ ズツト側ニイテ！」
その言葉に、デイーガ"レックスが悲鳴を上げた。

すかり一ぐ妖獸に、シエテか語りかけた。

一レックス、良く聞け。すでにこの世の住人ではない美由紀さんにとって、光に逆らつてこの世に留まり続けるという事は、限りない苦痛にさらされているのと同じだ。死者にとって、この世は煉獄に

「何ならなし」

信じられないといった面持ちで、シェリ・ルーを見上げ、次いで美由紀を見上げる。

「美由紀、本当ナノ力？」

美由紀は柔らかく微笑んで、ディー・ガリックスを抱き締めた。

和の事に心酔しなくていいの
和はて」と
いふものが似にさ
から

そして、間壁に支えられて立っている奈緒を見た。

「奈緒さん。私は、あなたを恨んでいない。そりや、いじめられた時は、あなたを憎んだわ。でも、憎しみにかられて罪を重ねるレックスを見て、気付いたの。レックスを救うためには、私が奈緒さんへの憎しみを捨てなければいけないって」

俺は彼女達のやりとりを聞きながら、すぐ近くにある、誰のものでもない気配を感じていた。俺や間壁や虎太朗やガルのものよりも異質で強大であるそれは、感じとしては、シリ・ルーに近しい。全身がチクチクするような不思議な感じ。姿は見えないのに、何と言う圧迫感。そして存在感。

（誰だ？ 誰かいる。誰がいるんだ？）

シリ・ルーの力に護られているはずの俺の魂に、その何者かの気配は近寄つてくる。これだけの圧倒的な存在感を持ちながら、俺以外の連中が気付いた様子もない。とすると、今、俺が意識を保っている次元は、現実とは別次元という事になるんだろうか？

そんな事を考えているうち、強大な気配は、俺の魂に直接語りかけてきた。果たしてそれは、本当に“言葉”だったのか。何らかの意志が、俺に理解しやすい形に翻訳されたのだろう。

（ ）

俺の頭の中で鳴り響いた言葉。それは、奇妙な出来事に対して耐性がついていたはずの俺を、硬直させるのに充分な内容だった。

（いや、俺は構わないけど……。けど、それでいいのかよ？）

姿の見えない相手に話しかけるのは、恐ろしく間が抜けているような気がした。

（ ）

（まあ、あんたがそれでいいって言つんなら、俺に反対する理由はないしな）

美由紀は握り締めていた首輪を、レックスの首につけてやつた。

「ああ、やつぱり似合つね。遅くなつちやつたけど、誕生日おめでとう」

そう言って笑うと、美由紀の魂は、すつと俺の体から抜けて行つ

た。まるでその魂の行方を追うように、膝をついた俺の頭上を、じつと見つめている「ディーガ」レックス。

「レックス。もう、彼女に心配をかけるな。お前のために、光差す道からあえて顔を背ける彼女を、そろそろ自由にしてやるんだ」ショリ・ルーの言葉に、「ディーガ」レックスはノロノロと顔を向けた。

「私ノ罪ハ深イ。ソレヲ理解シテナオ、コノ憎シミカラ、コノ苦シミカラ抜ケ出ス事ガ出来ナイ。コノママデハ、私ダケデハナク、私ヲ愛シテクレタ美由紀ノ魂マデモ救ワレナイ。ドウスレバインダ? ドウスレバ、美由紀ノ魂ハ救ワレルンダ?」

見上げてくるその瞳に、もうあの狂氣はない。深い悲しみがあるだけだ。ショラが、「ディーガ」レックスの前に膝をついた時、俺は、すっと立ち上がった。

「伊津留……?」

目を閉じた俺の口から、再び俺のものではない声が滑り出でくる。「心配する事はない。大丈夫だ。お前の憎しみも、お前の苦しみも、全て俺が引き受けてやる。美由紀の魂が墮ちる事はない」

その声に、今度はショリ・ルーの顔色が変わった。

「伊津留……お前……どうして?」

「久しいな、ショリ・ルー。お前の相棒の器を借りたぞ。伊津留には承諾済みだし、ちゃんと器を整えてやるから、心配するな」

「ルシエル……」

俺の体に宿つた次なる相手。魂だけの俺に語りかけてきた相手。それは、ショリ・ルーがずっと捜し求めていた半身。大天使ウリエルによつて引き裂かれた、ショリ・ルーの魂の半分 ルシエル。（あの苦しみに満ちた魂を救つてやろう。しばし、器を貸してはくれまいが）

そう語りかけてきたのだ。

麻生美由紀の時は違い、俺の魂は体の中に収まっている。すぐ間に、ルシエルの存在を感じる。恐ろしくらい強大なのに、俺

の魂を弾き出してしまわないように、力をセーブしてくれているのも判つた。先程まで感じていたシェリ・ルーの気配とは、どこか似ていて、どこか違う。シェラの半身なんだから、気配が似ているのは当たり前なんだが。

（でも、シェラのものよりも、荒々しくて強い。そのくせ、何だか子供っぽい感じもするし）

俺がそんな事を考えていると、ルシエルの笑いを含んだ「声」が聞こえてきた。

（俺の半身が、随分と世話をになつてているようだ。礼を言ひながら）

（俺の方だし）

田を開いた俺は、自分の体が、その魂に見合つた形へと変化していくのを感じた。髪が伸びる。シェラと同じくらいの長さか。多分、瞳の色は、そのまま黒だ。いや、もしかしたら、より深みを増した黒かもしれない。四肢から余分な肉が落ち、その分、上背が増えた。あ、俺、この状態がいいな。え？ 戻っちゃうわけ？ え～～～？

（伊津留　　、お前　　）

（いや、ゴメ……。マジで、悪い）

内面でのやり取りは、さて置き。

「お前は無関係な人間を殺し過ぎた。その償いだけは、しなくてはいけない」

ルシエルの言葉に、ディーガ＝レックスは深くうなだれた。

「この世でもっとも大切な者を失つた、お前になら判るはずだ。お前が殺してしまつた人間にも、どこかで悲しむ誰かがいるという事を。それさえも理解できなくなつてしまつたと嘆ひのなら、お前の魂に救われる余地はない」

ファサア　。

空気が震える。重さを感じさせないけれど、しっかりとそこそこある。俺の背中に開いた、四葉の花弁。だがそれは、シェリ・ルーのものとは相反するように、漆黒の翼。

「その時には俺が、再生の叶わぬ最下層の窖へ、お前の魂を突き落としてやる」

ルシエルは厳しい声でディーガ＝レックスに告げた。

「美由紀ガ耐エ忍ンダ苦痛ニカケテ、私ハ誓ウ。コノ身ハ必ズ、裁キヲ受ケヨウ。タト工魂ヲ切り裂サカレヨウト、ソレダケノ事ヲ、私ハシデカシテシマツタノダカラ。美由紀ガ心安ク、光ノ道ヲ歩ンデ行ケルヨウ」

そこで一旦言葉を切ると、ルシエルを見上げた。

「美由紀ハ　アノ人ノ魂ハ、天国ニ迎エラレルノダロウカ？　私ト一緒ニイタ事デ、美由紀ノ魂ニ傷ガ付イタリシテイナイダロウカ？」

ルシエルは、そんなディーガ＝レックスに優しく微笑みかけた。

「大丈夫だ。心配する事はない。彼女からの伝言があるぞ。『魂の償いを済ませ、もしも生まれ変わる事が出来たら、もう一度、私のところに生まれておいで。今度は互いに、きちんと生きて行こうね。それまで、しばらくの間、さよならだよレックス』」

広げられた漆黒の翼が、細かな光の粒子をまとつて輝く。

「お前の心の内にある憎しみを取り除かない限り、同じ過ちを繰り返すだろう。俺がその苦しみを、全部引き受けてやる。いずれお前の罪が許され、再び生まれ変わることが出来た時に、美由紀に対して恥じないでいるために」

そう言って、ルシエルはディーガ＝レックスの頭上に手をかざした。ルシエルの手から光が放たれ、やがて輝く光輪となる。だがディーガ＝レックスは、何か言いたそうに視線を動かした。その視軸の先には、間壁に支えられて立つ奈緒がいる。

「もう、彼女の事は気にするな。彼女もいつか裁かれる。たとえ人間の法で罪に問われる事はなくとも、魂の法の前では逃げられない。彼女が自分のやつてきた事に気付く、その時まで。それまで、彼女の魂は目に見えぬ、だが逃れようのない司法官に裁かれ続ける。彼女自身の『良心』という司法官に」

シェリ・ルーはそう言つて、その紅の翼を広げた。

「さつき言つただろ？ やつた事とやられた事の釣り合いはどれるようになつてゐるって。」お嬢ちゃんも、それは身に染みただろう虎太朗が腕を組んで、皮肉を含んだ口調で言つた。視線はやはり、奈緒に向けられている。

「それじゃあ、お前を元の姿に戻すぞ。それから、魂の状態にする。

「いいな、シェリ・ルー」

「ああ。いつでもいいよ、ルシエル」

ディーガ＝レックスの前後に立ち、各々の四葉の翼を広げる。互いを包み込むように。ディーガ＝レックスを包み込むように。光の粒子がルシエルからあふれ出し。シェリ・ルーの翼へと移行していく。ディーガ＝レックスの頭上にあつた光輪も、徐々に輝きを増していく。それに従がつてディーガ＝レックスの姿が変わつていく。

背中から生えていた牙状の鋭い刃が消えていく。ドロ色の毛皮は、まるで漂白でもするかのように、端から色が変化する。長く細い毛は、光の加減で微妙に色合いを変えるアイスブルー。わずかな風にも優雅に揺れる。

「キ　　レイ」

そう呴いたのは、ようやく一人で立つ事ができた奈緒だ。

蛇の姿をしていた尾は、縄のような質感を持つた長い尾に変わる。細められた目から伺える瞳は、知性をたたえた黄玉の色。そして、その額にもう一つの目が開く。縦に開いたまぶたから、見て取れる瞳もまた黄玉の色だ。耳の後ろから、羊のようにキツく巻いた太い角が現れる。

「これで、お前の憎しみは取り除かれた。その姿こそが、レックス、お前の本当の姿だ」

ディーガ＝レックスの頭上に輝いていた光輪が消えた。全身を軽く震わせ、ディーガ＝レックスが立ち上がる。先程までの醜い姿からは、想像もつかない。憎しみが、魂の本質までも歪めていたのだろう。

「何て　何て、キレイなの……」

その姿に魅了されるように、奈緒がふらふらと近寄つて行く。

「おいおい、やめとけって……」

奈緒を止めようとしたガルに向かつて、ディーガ＝レックスが言った。

「イヤ、構ワナイ。私ノ中ニ、モハヤ彼女ヘノ憎シミハ存在シナイ」
その声は落ち着いている。多少、金属的な響きもあるが、耳に快い声だ。三つの目で奈緒を見つめる。じつと立つてているディーガ＝レックスの体に、震える奈緒の指が触れた。流れる毛並みに指を這わせる奈緒に、ディーガ＝レックスが語りかけた。

「私ハコレカラ、自分ノ犯シタ罪ヲ贖あがなイニ行ク。ドノヨウナ理由ガ
アツタニセヨ、己テシデカシテシマツタ事ニ対スル責任ハ、己自身
デ取ルシカナノダカラ。私ハモウ、アナタヲ憎マナイ。アナタガ
早ク、自分ノ心ノ歪ミニ氣付イテクレル事ヲ願ツテイル」

口唇を噛み締めている奈緒を残し、ディーガ＝レックスはその場から離れた。待っていたシェリ・ルーとルシエルの許へ戻る。

「では、魂の在るべき場所へ戻ろうか」

ルシエルが両手を差し出す。三つある目を閉じ、ディーガ＝レックスはその手に向かつて首を垂れた。その姿が足下から解け始め、光の粒子に変換されていく。誰もが言葉を失くし、目の前にある幻想的ともいえる光景に見入つていて。やがて、ディーガ＝レックスの全身が解け終る。獣一頭分の質量の光の粒子が渦を巻きながら舞い上がる。螺旋を描きながら舞う粒子に、シェリ・ルーが手を差し伸べた。

シェリ・ルーが捜し求めていた相手・ルシエル。束の間の邂逅の後、彼は去つていこうとしている。引き止めるシェリ・ルーに、ルシエルが示した答えとは？

頭上に掲げられたシェラの細く白い指先に、光の粒子が集う。粒子は凝縮され、一枚の羽根を形作る。シェラの手のひらの上に、ふわりと落ちてきた羽根は、目の醒めるような緋色。

「これでいいだろう」

一同から、ため息が漏れた。

「一件落着つて事か？」

虎太朗がシェリ・ルーに尋ねた。

「ああ、あとはこれを、アフィエルに渡せば終わりかな」手の中の羽根に視線を落として、シェラが答える。

「んじや、もう結界は解いても大丈夫だな」

ガルが、路地の入り口へ向かって行つた。周辺で待機している匠達に、状況を伝えに行つたのだろう。

「アフィエルが来るのか。なら、その前に退散するといよ」

ルシエルの一言に、シェラが反応した。

「どこへ行こうと言うんだ。せっかく巡り会えたのに、また、お前はどこかへ行つてしまふのか」

「シェリ・ルー。お前と会えた事は、俺にとつても嬉しい出来事だ。

でもな、俺は、お前の側にいない方がいいんだ」

意味が判らず、何もいえないシェリ・ルーを残し、自分の手を見つめている奈緒に近付いていった。

「人間とは、不思議な生き物だな。美しさを感じる純粋な心と、他者を虐げる残酷な心を併せ持つ。一つの身体に、相反する二つの心を住まわせる生き物は、そうは多くないだろう。お前、レックスの姿を見て、どう思つた？」

ルシエルに問い合わせられた奈緒は、自分の手に視線を落としたまま、小さな声で答えた。

「すごく、キレイだった。あんなにキレイな生き物、見たことない

「温かかったか？」

言葉なくうなずく。

「それが、生きているという事だ。『命』というものは、間違えたからといって、『デリート』できるデータとは違うんだ。死んでしまったからと黙つて、『ディスプレイ』の電源を切るように、何もかもが消えてなくなるわけじゃない。麻生真由美のことは、確かにお前に責任はないだろう。が、自分の目の前から、一人の人間の命が消えてしまった事実は、しつかりと受け止めるべきなのではないか？」

……いや、データとか『ディスプレイ』って、お前……。『デリート』とかって、どこで学習したんだよ、ルシエル。

しかし、下手な喩えよりも奈緒には判り易かつたようだ。

「麻生、死んじゃった。もう、謝つても、届かないんだ」

奈緒の心にも、ようやく変化があつたようだ。ルシエルは、奈緒の手のひらにオレンジ色の首輪を乗せた。

「届くよ。美由紀の声がお前に届いたよ」、その声は美由紀に届くよ

路地のそぢに灯つていた、青白い炎が消えた。周辺で待機していた匠達が、結界を解いたのだろう。

「さあ、お嬢ちゃん。これから、どうするんだい？ 帰るつてつたつて、その格好じゃ無理だらう」

虎太朗の一言に、そこにいた全員の視線が奈緒に集中した。腕や足には、あちこちに擦り傷や切り傷があるし、服も汚れ、ところどころほつれている。確かにこのままでは、帰れないだろう。

「『タタ。お前の上着、貸してやれよ。真砂ん』ト』まで行けば、何とかなるだろ」

間壁の提案に、脱ぎ捨ててあつた上着を拾い上げながら、虎太朗が不毛な反論を繰り返す。

「だから、『タタつて呼ぶな』つてんだろ？ 俺の名前は、虎太朗だ」

その時、頭上でかすかな羽音が聞こえた。空を仰ぎ見た一同の目

の前に、純白の翼をはためかせて降り立つ、ハイパー高飛車エンジエルのアフィエル氏。

「あーあ。退散する前に、来ちまつたよ」
ルシエルの啖きは、周囲に黙殺された。

「終わったのか？」

前置きなしにシェリ・ルーに詰め寄つたアフィエルは、少し離れた場所に立つて、俺＝ルシエルには気付いていない。

「ああ、終わったよ。レックスの魂は、ここだ」
手の中の羽根をアフィエルに示した。

「レックス？ 何だ、それは？」

形のいい眉をひそめて、アフィエルが聞き返していく。

「お前さんが“妖獸”と呼んだ、ディーガに付けられていた名前さ」
戻ってきたガルが、アフィエルの足下をすり抜けながら答えた。

「ふん。奴の名前が何であろうと、我等には関係のない話だ。それにして、この品のない色は、どうにかならんのか。それとも、主人の品性を写し取るのかも知れんなあ」

うつわ、ムカつく。何、コイツ。背中の羽根、全部むしってやろうかな。マジで。

（まあ、落ち着け）

俺の思考を読み取つて、脳内にルシエルの言葉が流れる。

「その色が気に入らんのなら、いつそ黒にしてやろうか。しかし、己等の失敗で逃してしまつた魂を、わざわざたら得てもらつたのに礼もなしか。天界の品性も大した事は、なさそうだ」

「何だと？ 誰だ」

眉間に深い（不快？）シワを刻んだアフィエルが、声のした方を振り返る。

「誰だはないだろう。じぱらく見ないうちに、俺の事を忘れたらしいな？」

そう言つたルシエルの姿を認めて、アフィエルの顔が強張る。

「え、あ、ルシエル？ どうして、あなたがここにいるんだ？」

あなたああああ？

ショラには「お前」とか「貴様」とか言つクセに、ルシエルと随分態度違つじやねえか。昔、アフィエルと何かあつたんか？

（俺も、やんちゃだつたつて事さ。しかしアフィエルの奴も、見事なまでに変わらんない。もつとも、あの性格は変わりようがないのかもな）

「昔から、あんなんかよ……。ルシエルの知つてる頃つて、一体、何百年前じゃ？」

「俺がここにいると、何か不都合でもあるのか？」

「そんな事は……。このような汚らしい場所に、まさか、あなたがいるなんて思いもしなかつたので……」

明らかに、わざと意地の悪い質問をしている。あつははー！

ルシエル、やるじやねえ。けど、アフィエルの野郎、言つに事欠いて「汚らしい場所」だとお？ そもそも誰のせいでこんなことになつたと思ってやがんだ。

「それでは、私はティーガの魂を受取り、第三天へ連れ戻してきましょう。一度と再び、抜け出す事のないように、また、抜け出す気など起こさぬように、厳重に縛り付けておかねばなりますまい」
ルシエルって、一体、アフィエルに何したんだよ。物凄い、嫌な汗かいてるだろ、アフィエルの奴。

「こいつは、一度と逃げ出したりはしないさ。裁きが下り、いつか許されるその日まで。己の犯してしまった罪を、しつかりと認識しているからな」

ショリ・ルーから羽根を受け取つたアフィエルは、自分を悩ませていた仕事が終わつたという安心感からか、少々油断していたらしく、い。

「まったく。人間など、いくら死んだところで痛くも痒くもない。しかし天界から魂が逃げ出すなど、あつてはならない事だ。存在する意味もない、無用の輩が多過ぎるのだ。父なる神も、このような連中に情けなどおかげにならず、いつその事、全部滅ぼしておしま

いになればよろしいものを」

そう言つて、その場にいた者達を見回した。牙をむき出しにして、足を踏み出す間壁と虎太朗をシェリ・ルーが制する。うんうん。こんな馬鹿たれ天使の言うことなんぞ、聞き流すにこしたこたあない。ほつとけ、ほつとけ。

「人間共とて同じ事。まるで腐肉に湧く虫のよつにフラフラと、際限もなく増えよつて。ノアの洪水といいソドムの炎といい、人間を滅ぼす機会は何度もあつたというのに、父なる神も甘い事よ」

アフィエルのその言葉に、思わぬところから反撃の手があがつた。「ふざけんなよ、テメー！　あたし達人間が、どんだけ大変な思いの中、毎日生きてると思ってやがる。そんなに目障りなら、どうして神は、あたし達人間を造つたんだよ。自分の勝手な都合で生み出しておいて、邪魔になつたら滅ぼすのか！？」

声の主は、オレンジ色の首輪を握り締めた奈緒だった。

「何だ、お前は？　子を孕む胎を持つた、卑しむべき女め。お前如きが、神の御使いである私に口をきくなど不敬の極み。言葉を慎め、愚か者め！」

アフィエルが怒りの形相で、奈緒に向かつていつもの自論を披露した。ただ、いつもと違つていたのは、相手がアフィエルの高飛車発言にも、まったく怯む気配がなかつたという点か。

「うるせー。卑しいのはオメーだ、馬鹿野郎！　背中に白い羽根が生えてんのが、そんなに偉いのかよ。あんたなんかよりなあ、レックスの方が、よっぽどキレイだつたよ。あいつに馬鹿にされるのは、仕方がないと思うさ。そう言われるだけの事を、あたしはしてきたんだろうし。でもね、あんたに下に見られる理由なんか、これっぽちもないよ！」

奈緒はアフィエルを睨み付け、そう言い放つた。

よつしゃ！　よう言つた！　その場にいた全員が、心中で快哉を叫んだ。一方、これ程に罵倒されたのは初めてなのだろう。アフィエルの髪が逆立つた。文字通り、怒髪天を衝く、である。

「黙つて聞いておれば、いい氣になりおつて！ 貴様、神の怒りに触れるがいい！」

いや……黙つてねえし、神じゃなくてお前の怒りだし……。そつ

突つ込みたかつたが、さすがにそんな暇はなかつた。

アフィエルの背中に広げられた翼が、雷電をまとつてまばゆく輝く。

「消し飛べ、愚か者……！」

高飛車天使の翼から放たれた雷撃が、周辺の空氣を白く染め上げた。全員の視界が焼ききれる寸前。

「愚か者は、己じや、この馬鹿め……。氣位ばかり高くて、忍耐の足りぬ奴よ。己の感情に鼻面引きずられおつて、この未熟者めが」アフィエルの放つた全ての雷撃を、立ちはだかつたルシエルが片手で受け止めている。

「ル、ルシエル……」

頭に血が昇つていたアフィエルの顔から、今度は音を立てて血の氣が引いていく。バチバチと火花をまとわりつかせながら、ルフィエルはその手を握りこんだ。

「どうやら、その魂を任せる訳にはいかんようだな。思いたくはないが、天**上界**は、お前のような天使で溢れているのか……。いや、今も変わらず……というところか」

ルシエルの手の中で、雷撃は握りつぶされてしまった。シェリ・ルーと良く似た仕種で髪をかき上げ、ルシエルは指を鳴らした。途端に、アフィエルの手にあつた紅の羽根が、シエラの手の中に移動した。

「この魂は、こちらで預らせてもらおつ。時が来れば、そして必要があれば、第三天にも届けよう。どうせ、今のお前に渡しても、口クな扱いをしないようだしな」

言葉が出てこないらしいアフィエルは、金魚みたいに口をパクパクさせている。

「判つたら、さつさと戻つてサンダルフォンに伝えよ！ 文句があ

つたら、次元・時空の狭間を辿つて会いに来いとな

先程の雷撃を握り潰した手を開くと、中には小さな結晶がある。それをアフィエルに向かつて弾き飛ばした。結晶がアフィエルの足下に着弾すると、雷撃が湧き起つた。

「うわっ！」

両腕で顔面をガードしているアフィエルに、ルシエルは皮肉たつぱりに言つた。

「お前の忘れ物だ。ちゃんと持つて行け」

顔を両腕で隠したまま、アフィエルは翼を広げた。真っ白だったはずの奴の翼は、今は、ルシエルに返された口の雷撃のせいだ、少々焦げている。へつ、ざまあみろ。

「その言葉、確かにサンダルフォン様に伝えるぞ！！」

いや、それ、捨て台詞のつもりなのか？ かなり、情けないぞ。まあ、俺の知つた事じやないけどな。あれ、隠れた顔は絶対、泣いてんぞ、アイツ。

決して優雅とは言ひがたい姿で、どこぞかへ飛び去つていくアフィエルを、その場の全員がおそらく、心の中で舌を出して見送つた事だろう。

「さて、俺もそろそろ行くか。これ以上は、依り代の身体に負担をかける」

ルシエルの言葉に、シェリ・ルーが口を開きかける。

「何も言つな。俺はなるべくな、お前の側にいない方がいいんだ。俺もディーガと同じく、償いを続ける身だ。いつの日いか、お前の許に戻れる事もあるかも知れん。だが、それは今ではない。お前が俺を求めて、地上を彷徨つていたことは知つてゐる。その気持ちに応えたいとも思う。けれど、それは出来ないんだ。理由を俺の口から伝える事も出来ない。まあ、今度機会があつたら、ウリエルにでも聞いてみてくれ」

「そんな言い分で、納得できると思つてゐるのか？」

「思つちゃいないだ。でも今は、無理矢理にでも納得しき。これ以

上、何も言えん。俺も、お前に語られる日が来るのを、願つてゐるよ
そう言つと、俺の中からルシエルの魂が（魂……なのか？）抜け
て行くのを感じる。どういう原理か判らんが、俺の、『萌木伊津留』
の姿に戻つたらしい事は理解できる。

「悪い。行つちまつたよ」

申し訳なさそうな口調になつてしまふ俺に、シェリ・ルーが無言
でうなずいた。そして、俺の肩に顔を埋める。

「お前のせいじゃないさ。それは、シェリ・ルーも判つてゐる事だ」
代わりに声を掛けてくれたのは、虎太朗だった。

「いつまでも、ここにこうしていいる訳にもいかんだろう。そろそろ、
場所を移そう。匠達には、先に真砂んトコに行つとくように伝えと
いたぞ」

ガルの言葉で、全員が路地の入り口の方を向いた時。

「なあ、おい。兄ちゃん達、面白い格好してつけど、仮装行列が何
かか？」

そこにいたのは、トロンとした田付きの、出来上がつたオッチャ
ンだつた。シェリ・ルー以下、全員が凍り付いてゐる中で、やけに
冷静な奈緒が答えた。

「そうだよ。クラブのイベントなの。ね？」

なぜか、俺に振つてくる。判つたよ。話に乗れば、いいんだろう？

「ああ。クラブ『仮面舞踏会』の、恒例イベントなのさ

ハルローゲ（前書き）

これまで見えなかつたモノが見えるよつになり、考えもしなかつた出来事に遭遇して、色々な「不思議」を見た。でもさ、「日常」があるから「不思議」を感じられるんだよな。

「ああー、今日もいい天氣だあ」

俺は窓を一杯に開けると、思いつきり伸びをする。足下に置いてあつたカゴから、洗濯したタオルを引っ張り出して広げる。

「平凡な日常つて、素晴らしいねえ」

鼻歌混じりに、洗濯物を干していく。何も心配する必要のない日常が、俺には、とても新鮮に感じられた。

あの後、奈緒を連れて『仮面舞踏会』に戻つた俺達一行は、待機組のメンバーから盛大な労いのもてなしを受けた。ディーガ……いや、レックスや麻生美由紀の事、亡くなつた人々の事を考えると、手放しで大騒ぎする気分にはなれなかつた。けれども、それぞれの裡に大きな安堵感が漂つていたのは確かだ。

詳細を真砂達に語るのは、間壁と虎太朗だ。お互に、ああでもない、こうでもないと言い合つてゐる。

俺はと言えば、さすがに連續しての降霊（ルシエルも靈なのか？）の影響か、少々ヘタリ気味でカウンターでコーヒーをすすつてゐた。あー、この甘さが、疲れた身体に染まる……。

特に何を話すでもなく、俺とシェリ・ルーが並んで座つてると、シャワーを借りてサッパリした奈緒がやつて來た。少しためらいながら、俺の隣の席に腰掛ける。そうそう。俺、この娘に聞きたい事があつたんだ。

「ひとつ、聞いてもいいかな？」

真砂からコーヒーを差し出されていた奈緒は、化粧を落とした顔を俺に向けた。その表情は、歳相応に幼い。

「どうしてあの時、あの馬鹿天使に噛み付いたんだい？」

「あれ……、見てたんだ」

「ルシエルと一緒にいたからね」

奈緒はカップの底から浮き上がってくる、注がれたミルクの模様を見つめ、俺の問いに答えた。

「あの天使。アイツの事見てたらさ、何かこう、いやあな気分になつたんだ。まるで、自分を見てるみたいでさ。きっとあたしも、アイツみたいな顔して、アイツみたいな目をして、アイツみたいな言葉を使って。そう思つたら、無性に腹が立つた。あたしと同じ、腐つた魂を持つてお前に、ヒラそうな事言つ資格があるのかつてね」

「なる程……」

煙草に火を点けた俺は、カップを両手で包み込んでいる奈緒の横顔を見た。

「あたしん家つてさ、すごい厳しかつたんだ。子供の頃から塾とかばっかしで、友達と遊んだ事なんてなかつた。第一、友達なんていなかつたし、作る方法も知らなかつたしね」

「コーヒーを口に含み、喉を湿す。カップの中に言葉を落とし込むように、ポツリポツリと語り始めた。自分の子供の頃の話。厳しかつた両親の話。まるで自分の中に蓄積されていた、何か苦しいモノを、全部吐き出そうとするかのように。

「きつかけは、何だつたのかなあ。麻生が、レックステの「写真」を見せていたんだ。あれだつたのかも」

麻生美由紀が、楽しそうに写真を見せて笑っていた。その姿を見た時、奈緒は彼女に嫉妬を感じたのだと言う。

「思い出したんだ。どうしても飼いたかつた子猫を、取り上げられた時の事」

自分にはいなかつた、友人に囲まれた美由紀。自分には許されなかつたモノを、許されている美由紀。自分よりも恵まれている思つた。そんな美由紀を妬ましく思つた。

初めは、ハつ当たりのつもりだつたと言つ。だが皮肉な事に、美由紀をいじめるようになつてから、奈緒にも仲間が出来た。

「いじめ仲間」という決して褒められたものではない関係だつたが、

奈緒には初めて出来た友人だった。友人達の関心を失うまいと、美由紀に対する奈緒のいじめはエスカレートしていき、最早何が始まりだつたのかさえ、忘れてしまつ程となつたのだ。

「麻生が死んだつて聞いた時、本当はすごく怖かつた。誰かがあたしを指差して、『お前が麻生を殺したんだ』って言い出すんじゃなかつた。でも、クラスの誰も、学校ですら何も言わなかつた。いじめもなかつた事にされちゃつた。だから、あたし達も、何もなかつたことに対するしかなかつたんだ」

麻生美由紀が死んだのは、自分のせいぢやない。そう考える事にした。そう思い込む事にした。そして 罪悪感を忘れた。

「何やつてるんだろう、あたし」

そう呟いて、奈緒は自嘲に似た笑いを浮かべた。

しばらくの間、何も語らず、ただコーヒーを味わう。静かに流れた時間の後、奈緒は帰ると言つて立ち上がつた。

「そんじや、俺、送つて行くわ。時間も遅いしな」

座席から立ち上がつたのは、意外な事に虎太朗だった。大丈夫だと言い張る奈緒を、虎太朗は「女の子なんだから」との理由で言い負かした。荷物を抱えて席を立つた奈緒は、少しためらつた後、俺とシェラに向かつて口を開いた。

「あたしさあ、もうやめる。あの、ウルトラムカつく、馬鹿野郎みたいになるの、ゴメンだし。そんで、麻生とレックスの事、忘れないようにする」

ウルトラムカつく馬鹿野郎とは、もしかするとアヤツの事ですかな？なる程、そいつは言い得て妙だ。

「そうか。それを聞いたら、美由紀さんもレックスも喜ぶよ、きっと

シリ・ルーは奈緒を見上げると、そう行つて柔らかく微笑んだ。

店内のライトに照らされて、神秘的に輝く。

「君の魂を守るのは、君自身だと言う事を、忘れないでいて欲しい。彼女達のために。そして何より、君自身のためにね」

奈緒はうなずくと、店のドアに手をかけた。

「送つてつてくれるんでしょ、コタ？」

呼びかけられた虎太朗は、目を丸くした。

「コタ つて、お前。ま、いいか。俺の名前は虎太朗だけ……あんたなら構わねえよ、お嬢ちゃん」「あたしは、奈緒よ。小野田奈緒。お嬢ちゃんつて呼ぶの、やめてね」

カロン、カロン

カウベルの音に送られて二人が出て行く。その後姿を、店にいる全員が見送った。一人の例外もなく、ポカンと口を開けていた。

「あの虎太朗が……」

「コタつて呼ばせた……」

「あり得ねえ」

俺とシェリ・ルーと真砂は、顔を見合せると、大声で笑い出した。何だか、すごく久し振りに声を上げて笑つたような気がする。俺達三人につられて、店中に笑い声が弾けた。

嘆き悲しんでも、死んだ者は戻つて来ない。俺達は生きている。生きている以上、これから先も生きて行かなくてはならない。それなら、悲壮な顔をしているよりも、笑つていた方がいい。

洗濯物を干し終わった俺は、掃除機を引っ張り出してくる。なんでもない、日常の出来事。しかしそれも、毎日を「生きて」いればこそ。

「天気がいいと、気持ちがいいやねえ」

世界が変わった訳じゃない。世界を見る「俺」が変わったんだ。世界は相変わらず、そこにある。変わったモノ、変わらないモノを内包して、世界は存在している。人も、妖獣も、妖しも、墮天使も、すべてを含めて存在する世界。それは何て偉大な事なんだろう。

どうしようか迷つたんだけど、俺はルシエルの事をシェラに聞いてみたんだ。

長年かけて捗し求めてきた、半身。ようやく巡り合えたルシエルとの時間は、あまりにも短いものだつた。シリ・ルーにとつては、到底満足のいくものではなかつただろう。俺の問い掛けに、シェラは何とも言えない表情をした。

「確かにね。納得いかない事だらけだし、言ってやりたい事も山ほどある。ルシエルの奴、自分だけ一方的にしゃべつて行つちまつたからな」

カップから立ち昇る湯気を、ため息で吹き飛ばした。

「俺はルシエルを見つけ出して、元の自分の戻る事しか考えてなかつたけど……。よく考えてみると、ルシエルはルシエルで、自分の生きていく道を見つけたのかも知れないな」

そう言つて、シェラは淡く微笑んだ。俺がこれまで見た中で、一番印象的な微笑みだ。最近見慣れちまつたせいで、あんまり気にならなくなつてたけど、こいつ、綺麗な顔してたんだよなあ。

「なぜウリエルが俺とルシエルを引き裂いたのか。それは今になつても判らない。でも、ルシエルには判つていたのかもしれない」

視線を上げると、店内を見回す。

「いつかそれが、俺にも判るといいが。ルシエルが俺の側に戻らなかつたのは、俺なりの生き方を見つけるつていう事なのかも知れない。そんな気がするよ」

「それで、これからどうするんだ?」

「そうだな。考えた事もなかつたけど……。ゆっくり考えるさ。時間は、たっぷりあるんだし」

「それも、そうだな」

俺とシェラは顔を見合すと、コーヒーをカップで乾杯をしたんだ。

掃除機のスイッチを切ると、コードを巻き取り。クローゼットの中にしまい込む。

「これで、よし つと」

台所でコーヒーを淹れると、部屋に戻つて一息つく。テーブルに

置かれた郵便物に目をやり、その中の一通を手に取った。差出人は、

倉田一人と橋本美緒の連名だ。

『あの時は、お世話になりました』

そんな書き出しで始まつた手紙は、一人の近況を伝えてくれる。

「そつか、結婚式、早めるんだ」

すでに退院している一人は、今回の事もあつて、予定を早める決意を固めたようだ。ぜひ、シリ・ルーと一人で出席してくれ。そう締めくくられていた。

「シリ・ルー……。行くのかな、あいつ？」

シリ・ルー。そう。今、俺の部屋の中に、奴の姿はない。どうやら、ようやくの事で自分がこの先どうするのか、決心がついたらしい。うむ。良い事だ。

手紙をたたみ、予定を確認しようとカレンダーを見上げた俺の耳に、チャイムの音が飛び込んできた。はい、はい。今、開けますよ。鍵を外し、ドアを開ける。目の前に大きな紙袋を抱えた、長身の人物が立っている。陽に透けた髪は、明るいブラウン。鳶色の瞳は、いたずらっぽく光っている。そしてその、ととのつた中世的な美貌。聞いていて、耳に心地良い声が言葉を紡ぐ。

「ただいま、伊津留」

俺も笑顔で答える。

「ああ、お帰り。シリ・ルー」

そう。地上に降り立つた緋色の大天使は、今も俺の部屋に戻つてくる。自分に託された様々な想いを、四葉の紅い翼に宿し、極上の笑顔と、両手一杯の紙袋を持つて。

「今日は特売日だから、思いつ切り、買物してきちゃつたよ」

「ほー。そいつは、ありがたい。つてか、早くメシにしてくれよ。俺、もー。腹減っちゃつて……」

「はいはい」

そして俺は、ドアを閉める。

この先も、この相棒といつも、ドアを開けるたんびに感じるの

だろう。

『世界は、不思議であふれている』と

。

} Fin {

あとがき

この作品も、ようやく完結いたしました。

思えば、原稿用紙の一行目に「天使の仮面舞踏会」と題を書き込んでから、やうに十年間の月日が流れております。

本当に、この作品を完結する事ができるんだろうか……と怯えていた物語ですが、本日ここに、無事「～エンド～」を打つ事が出来ました。

これまで「天使の～」を読んで下さった皆様。
皆様のお陰で、物語を閉じる事ができました。
心より感謝申上げます。

またいつか、このキャラクター達で続編を書いていけたらいいなあ
……などと考えております。

お付き合いくださって、まことにありがとうございました。

橘 伊津姫

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0035r/>

天使の仮面舞踏会

2011年5月24日14時25分発行